

青春ラブコメ神話大系

鋼の連勤術士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学生時代には社会的有意義な存在になるための布石を尽くはずし、ダメ人間になるための布石を狙い済ましたかのように打って来てしまっていた。だがしかし、一生の友となる存在は高校生で出来るといふ言葉もある。ならば、高校生活で肉体面を鍛え精神面の充実を図り、友達百人、先輩後輩からは一目置かれ、黒髪の乙女との甘い生活を謳歌する。そんな薔薇色のスクールライフを目指しても良いのではないか。

そんな事を思っていた中学生の時の俺に言ってやりたい。
人生の選択を見誤るなど。

俺ガイド×四畳半神話大系の設定クロスです。

前にSS速報でやっていましたが、落ちてしまったのでここでゆつくり書かせて頂きます。

まだ忙しい日が続いてしまうので不定期更新となります。

ご了承下さい。

移るにあたり一部文章をごっそり変えてたりしています。読みにくい等、疑問質問いちゃもんありましたら教えてください。

目次

一疊紀 春は短し旅せよ青年

一話 1

二話 10

三話 22

四話 31

五話 44

二疊紀 こうして恋の邪魔者は蜜月を迎える

える

六話 53

七話 66

八話 77

九話 87

三疊紀 自虐的代理姉妹戦争

十話 102

十一話 113

十二話 124

十三話 133

十四話 140

十五話 149

十六話 164

十七話 181

十八話 192

十九話 199

四疊紀 同位点四角関係

二十話 218

一晷紀 春は短し旅せよ青年

一話

青春とは嘘であり、悪である。

昨今、○○デビューという言葉が世間に浸透していつている。

大学デビュー、高校デビュー、社会人デビュー……

どれもが言葉尻にデビューと銘打ってあるが、ニュアンスは少しずつ違う。

例えば、社会人デビュー。

社会人になるのは責任と自由と義務を伴い、親の庇護を離れるということだ。

社会人になったのだから、今までのように好き勝手に行動せずに節度と良識を守り行

動していこうと戒めるための言葉である。

それに対するのが、高校デビューである。

義務教育を抜け、自由と責任を背負う立場になるところまでは社会人と変わらない。

しかしながら使われる意味としては、中学での負の遺産、主に自らの容姿や友人関係

に決別し、知り合いの居ない新天地に向かうにあたり、自分という既存のキャラクター

を一新して高校生活をより良いものにしていくという謂わば、旅の恥は書き捨ての高校

版のことである。

私は諸事情により、その機会を無くし高校二年の現在に至る。

だが、そんな私だから見えてくるものもあつた。

青春というのはなかなか嘘で塗り固められた物であり、自分を出しすぎても、出さなすぎてもするりと逃げてしまう、前髪しかない幸運の女神のようなものであるということ。

真つ只中にいるときには気付かず、過ぎ去つてしまつたあとにその幻影を懐かしむというものであるため、掴もうとしたらがむしやらに手を振り回すしか他ない。

そして、そんな光景は滑稽なことこの上ない。

一人でワルツでも踊つて要るのならまだ許せる。しかしながら、彼等のそれはリオのカーニバルかくやである。

彼等は気持ちや感情を共有できないものを悪、または敵と断定し、さも楽しいかのように振る舞う事で高校生活や青春を自らの支配下に置いていと勘違いをしてしまう。

その波は周囲を巻き込み肥大化していき、一部の人間はただただ飲み込まれて被害を受けるのも一つの特徴と言えるだろう。

踊るように足掻いている者たちは気付かないかもしれないが、その隅つこに挟まつて雨と埃だけ食べて辛うじて生きている私からしたら、その姿は滑稽であり、見るに耐え

ない動きをしている。

青春やデビュー、自由と言った言葉を免罪符として扱うのではなく、節度や良識を守りながら大人な意味での高校デビューを是非ともしてほしいものである。

つまり何が言いたいかと言うと、リア充爆発しろ。

○

「はあ」

俺は今、高校生活とは、という文を提出し生徒指導係である平塚静に呼び出しをくらい、職員室にいる。

彼女はもの憂げな表情と共にため息をつき、憐憫の眼差しを向けてきた。

「言いたいことは山ほどあるが、どうして君はこうも物事を穿った方向でしか捉えることが出来ないのかね」

「確かに一般的ではないとは思いますが、そこまで捻くれた考え方じゃないと思います。ソースはネット記事」

理系の教諭ではないが、白衣を着こなした彼女は黒い髪を靡かせ理知的な雰囲気を出している。

白衣を着ているからといって理知的に見えるとは限らず、寧ろ悪目立ちする教諭もいることから彼女が何を着ていようと理知的な女性であることは分かる。

きつと白衣は彼女にとって、教師の中では若いからと生徒や他の教師に見下されないようにする防護服であり戦闘服なのかも知れない。

「そんなんじやさぞ生き辛いだろうに」

最初に目についた白衣について考えを巡らせていたら、何故か生きやすさについて同情をされていた。頭を抱え下を向くその姿は、黒髪 of 乙女と言つても支障は無いだろう。いや、乙女というには少しあれがあれだが。

とにかく、タバコさえくわえて居なければ可憐な女性であるのにも関わらず、アラウンドサーティーで未だその生涯の伴侶の見つからない先生に心配までさせてしまっているのが現状であった。

「先生もその年で独身というのはさぞ生きづらいでしょうに」

「ああ?」

ボソツと呟いた言葉を目敏く拾ってしまった先生は、般若のような顔をし、俺に鉄拳制裁を加えたあと少し涙ぐむ。

誰か早くもらつてあげて。

「節度、良識。これらを守って生活することは当たり前であり、しかしそれから逸脱している人間がいることも分かる。でも、君は節度や良識を逃げ口上にしてるだけで自らを変えようとしていないじゃないか」

「節度や良識を守って生活していれば変える必要は無いですよ。クラスに迷惑をかけることは元より、居ることすら感じきれない俺は十二分に節度を守ってますよ」

「節度を守った人間はこんな文は提出しない。とにかくだ、高校デビューがどうの書いてあるが、そもそも自分を変えるのに遅いも早いもないんだ。今からでも変えてみないか？少年」

至極真つ当な反論をしたあとに彼女は、どこぞの加速世界のような言い方で、リア充になつてよ。と契約を交わそうとしてきた。

これで契約したらリア充の成れの果てと戦うことになるんですね。わかります。

「先生。俺の中で高校生は、飛行機みたいなものなんです。一度自分の役割やキャラを設定したら自動操縦。ハンドルを切ることなど出来ないんです。もし、マニュアルで操作した暁には、クラスや学年全体を巻き込む墜落事故を引き起こし、戦犯である俺は、お天道様の下での活動を諦めざる終えないまでであるでしょう」

お天道様の下での活動を諦めるって、闇の住人みたいで少し格好の良く憧れる気もするが、要は引きこもりのことである。

はあ、ともう一度息を吐いた後、こめかみを親指で押しながら先生は立ち上がる。

「どうせ君のことだ。そんな事を言うと思っていたよ。そんな末期の症状である君には、ある部活に入ってもらおう」

有無を言わせずに、彼女は俺の首根っこを掴み引きずって行く。

職員室をずるずると抜け廊下を歩く姿は、市中引き回しの刑のような光景に見えるのか、行きかう生徒は目をそらし、モーゼに對した海原のように動線は割れている。どこかでドナドナを口ずさむ声まで聞こえてくる。

おい、誰だ。そんな不吉な歌を歌うのは！

「ちよ、待つてください。俺を食べても美味しくないですって」

「私は妖怪か何かか」

ああ、これで俺も美味しく頂かれてしまうのだな。と他称腐った魚のような眼を更に濁らせ、そんな掛け合いをしている内に、空き教室の一つと思われるところにつく。

「着いたぞ」

「せめてもつと雰囲気のいいところで」

「お前は何をいつているんだ」

悲しきかな、俺の純潔は美人だが日照りの続く先生によつてここで散らされてしまうのか。

グッバイ、純潔

アデイオス、昨日までの自分

ハロー、これからの俺

新しい世界へようこそ

徒然なるままに妄想を広げていたら、先生はゆらりとしたフォームで拳を上に掲げ勢いよく俺の頭の上に振り下ろした。

「下らないことを考えるな。……まあいい、入るぞ」

頭を擦る俺を引きずったままガラガラと戸を開けると、そこには眉目秀麗才色兼備大和撫子完璧超人・・・といくら四字熟語を並べたところで説明のしようがない程の黒髪の乙女が椅子に座っていた。

いや、完璧超人だとネプチューンマンか。

爽やかな風が吹き、さらさらと腰まで届く長い髪を靡かせながら本を読むその姿は、額縁に飾りたい衝動にかられるほど絵になっていた。つまるところ、そんな表現をすることが似合いそうにない俺がしてしまうほどの衝撃だった。

「いきなり開けないで、ノックをしてください」

「ああ、悪いな」

「それでどのようなご用件でしょうか」

「それがだなー」

当事者を置き去りにして話ほとんどん拍子に進んでいく。

その当事者はどうしてたかって？

扉より前に進むことができず、口をあけて固まっていた。

口こそ動かなかったが、頭の中では二人きりの放課後、共にする下校、縮まる距離、重なる影と桃色の脳細胞がひっきりなしに働いて妄想という映像を垂れ流している。

「何をしている。入ってこい」

「ひ、ひゃい」

いきなり先生に促されたお陰で声が上がってしまい、何とも不格好な形になったが意を決して教室へと踏み出す。

「あなたが、比企谷君ね。不本意ながらあなたを奉仕部へと入部させることになってしまったわ。雪ノ下雪乃よ」

『初めまして、比企谷八幡です。これから迷惑をかけるかもしれませんがどうぞよろしく』

「ひゃ……はい。よろしく」

『』の中が理想で、「」の中が現実だ。

諸兄等は長つたらしい独白を読んでいるため忘れていたのかもしれないが、俺は打つべき布石を打たず、打たなくてもよい布石を打ってきていた人間である。

よって、初対面の人とのコミュニケーション能力というものを期待するのは間違っている。

ともあれ、これが彼女とのファーストコンタクトであり、ベストコンタクトであった。が、これからそれを後悔するとは夢にも思わなかった。

二話

蓋を開けてみれば、彼女は黒髪の乙女どころか黒髪の妖怪であった。

道行く人10人に聞いたら10人とも振り返ってしまうような容姿を持ちながら、実情を知っている者からすれば、10人に8人は鬼か妖怪の類と答えるであろう。残りの2人は姉か妖怪だ。

分かりづらい人のために少し実例を挙げる。

「(一)三日間ぐらいこうやって、来ては本を読むだけの部になっているけど、奉仕部とは一体何をやる部活なんだ？」

活動内容を訪ねるのに三日もかかったのはご愛嬌と受け取って欲しい。

「そんなことを聞くのにも三日もかかるなんて本当に重症ね。貴方」

初めて会話らしい会話を試みようとした俺に、彼女は随分と辛辣な言葉を発した。

「貴方はどう思うの？」

「どうと言われてもだな」

奉仕部というからには、何らかの奉仕活動を行う部活であろうとは想像がつく。しか

し、ここ三日間で清掃活動や地域への貢献は何一つとして行つて居らず、ただただ本を読み時間になつたら帰宅するだけであり、奉仕のホの字もしていない。

ならば、奉仕部とは名ばかりの文学部の可能性もあるが、先生がそんなところに俺を放り込むとは思えなかつた。

「まあ、いいわ。どうせ聞いた所で答えがかえつて来るのは三日後とかになるだろうから。お腹が減っている人には魚の取り方を、恋に悩んでいる人には恋文の技術を、目の腐っているあなたには良い眼科を、それが奉仕部の基本理念よ」

つまりは、悩んでる人が来たときに少しだけ手助けをしてあげる。お悩み相談所のよ
うな部活動らしい。

「なるほどな。俺は別に教えてもらわなくても、この目とは一生を添い遂げてくつもりだから安心してくれ」

「それは残念。目は口ほどにものを言うから、目を治せばあるいと思つただけれど」
なぜ俺がここまで罵倒されなければならぬのかと、その夜は鏡で目を確認しながら
独り涙ぐんだ。

「はあ」

その日は少し気分が落ちていた。いや、友達がいらないなら友人関係で煩う事も無く、気分にも上下も無いだろうと思われるかも知れないが、友人とのあれこれがなくとも教室の空気や二人組を作る体育だとか犬のフンを踏んだだとか賞味期限の切れていたパン一つでも気分はリーマンショック並みに下降する事だつてある。ソースは俺。

「ため息をつかないでくれるかしら。聞いてるこつちが不愉快になるのだけれど」

「あ、ああ、悪い」

あくまで一般論だが、落ち込んでいる人間を見た場合は関わると面倒臭いから放つておくか、慰めようとする筈だと思つていた。構つて欲しい訳では断じてないので、ため息の一つぐらいはお目こぼしして貰いたいが、彼女の気に障つたのか傷口に塩を塗り込んでくる。

「ついでに言うそうやって謝る癖、やめた方が良いわ。負け犬根性が染み付いてるみたいで不愉快よ。思いきつて何も話さない置物の物真似でもしてたらどう？今よりも有意義だと思うわ」

塩の上からハバネロまで塗りたくり御丁寧に包帯でぐるぐる巻きにして貰つた。その意趣返しにと「……すまん」とまた謝つたが

「……おちよくつてるのかしらっ？」

そう言つて睨む目があまりにも怖く繊細なハートは悲鳴を挙げ、帰り際少し泣いた。

「あの一」

「……」

「あの、雪ノ下さん」

「あら、いたの？ 存在感がなさすぎて気づかなかったわ」

「いや、ひどくね」

「二度、皮を剥いで、死海に潜ってみなさい。その存在感も、腐った目も少しはマシになるでしょうから」

「今日もキレイキレイな毒舌ありがとうございます。俺になんの恨みがあるんだ」

「いいえ、何も無いわ。これはそうね……言うなれば、私なりの愛つてやつよ」

「もはや、話しかけた理由すら忘れてしまう衝撃だった。無視されたかと思ったら罵倒されていた。」

催眠術だとか超スピードだとか以下略。

こんな風にイチメを私なりの愛だとか、可愛がりだとかと言うからこの世からイチメは無くならないのだ。

意識改革を。イチメ良くない。

「そんなトゲトゲして冷たい愛なんかいらん。もつとふわふわして暖かい愛が欲しいん

だよ」

「うわ……」

「いいのか、泣くぞ。すぐ泣くぞ。ほら泣くぞ」

「確かに、一回泣いて涙を出しきった方が良いかもしれないわね。もしかしたらあなたの中で、涙が消費期限切れで腐っているから、目も腐っているという可能性も有り得るわ」

「えっ、そんなことないよね。えっマジで」

「冗談よ」

勿論その夜は枕を涙で濡らすのであった。

一見会話のキャッチボールが成立しているかのように思える、しかし、弾は鉄球。投げるのは室伏。

こんな状況では、桃色の空間とは呼べず、灰色の閉鎖空間まである。

ここまで来ると、俺の繊細なハートを傷つけて回復した頃に、また傷つけてを繰り返して超回復的なやつを利用した心理的療法なのかとも疑ったがそんなわけはない。

余談だが雪ノ下の事は、絶対に許さないリスト（仮）と言う名のバインダー式の日記

に記してある。

名前があれなのは、自尊心と劣等感に埋もれていた頃から使っている為であり、日記を隠してある所々に仕掛けた燃える罫は、その時読んだ本に影響されただけであつて、断じて今も痛い子と言う訳ではない。

○

「あれで、もう少しほわほわとしている感じの乙女であつたならなあ」

「なになに、どうしたのお兄ちゃん？ 乙女がどうのこうのとか言ってるけど、春でも来たの？」

リビングで寛ぎながらぼそぼそと呟いた一言に、妹の比企谷小町が目敏く食い付いてくる。

「いや、春が来たかと思つたら、グリーンランド辺りにまで飛ばされてた」

事実、そりゃあ少しだけ期待をしてみましたさ。

可憐な乙女との2人だけの部活動なんて一見甘美な響きを持っているものに、高校生という殻を被つた阿呆は誰だつて期待をするはず。

「なにそれ。んーでも、乙女ならここにいろじゃん」

その場でくるつと回転して、小首を傾げながら上目遣いを使ってくる妹。あざといけど確かに可愛い、妹でなかったら告白してフラれてるまである。

「はいはい。そういうのは家族にやっても意味はないぞ」

「えー、この前お父さんにやったら、お小遣いくれたよ」

陥落するなよ親父。

「まあ、今のところは、お兄ちゃんとお父さん以外にはしないもん。あれ、今の小町のポイント高いくない？」

今のところとつけるところがこれまたあざとい。

暗に、何時かはそういう人ができますよと言っているような感じがして、ただならぬ不安を覚えてしまう。

「もし、家族以外にやったらそいつを破滅させなきゃいけないから気を付けろよ。今の八幡的にポイント高いくね」

「高いくないよ、ごみいちゃん」

はて、俺はごみいちゃんと呼ばれてしまうことをしたのかしらん？と頭を捻っている
と、はあ、と息を吐かれ、妹は隣で寛いでる猫のカマクラにちよっかいを出し始めた。

○

雪ノ下がどう思っているかは分からないが、今日も今日とて気まずい雰囲気の中、誰でもないからこの空気をぶち壊してくれとせつに願っていると、控えめにノックがされた。

「失礼します。奉仕部ってここであっていますか、つてええ。ヒッキー」

日曜6時半からお茶の間に流れるような驚き方を見せた彼女。

容姿について雪ノ下と違うところは、おしとやかそうな美少女か活発そうな美少女かという違いだけで、雪ノ下雪乃に負けず劣らずの可憐な乙女であった。

それよりも、ヒッキーってなんだ。

もしかして幻のファイブマンよろしく、存在が無さすぎて学校に来ていないと思われる……つまりは引きこもり……よってヒッキー……

「合ってるわよ。それとその素っ頓狂な声は何」

「い、いえ何でもないです」

「さっそくだけで用件を聞きましようか」

「はい、えーと、私は由比ヶ浜結衣で、相談が……」

頭のなかで新しい等式を作っているのと、コミュニケーション能力を育てる機会のない部活に入ってしまったせいで、例のごとく話に入ることは出来ずに、二人のやり取りを見ているだけだった。

「聞いてた、腐り谷君」

最早、様式美となってしまったコミュニケーション能力不足によるステルス状態を掻い潜り、雪ノ下は暴言を吐く。

「すまん、聞いてなかった」

「お礼したい人がいて、そのお礼にクッキーを作りたんだけど、私料理が苦手で」

「そういうことだから、由比ヶ浜さんのクッキーづくりを手伝いに家庭科室まで行くわよ」

「……うつす」

動きたくないと主張する可愛らしいあんよとお尻に、行かなければひどいことが待ち受けているだろうと説得し、むんずと立ち上がる。

○

端的に言おう。彼女の料理スキルは異常なほどなかった。

どこをどうすれば、クッキーの味が旨味と甘味以外で構成されるのかを、じつくりと、二人きりで、問いただきたいほどである。

「これは……絶望的ね」

「うう、やっぱりそう思う?」

そこから数回、作っては食べ、作っては食べを繰返し

「ああ、これなら、まあな」

「ええ、最初よりはまだ食べれると言っても良いわね」

ようやく一応は食べれるものになった。

それでも普通よりは劣っているといつて良いだろうそれを、由比ヶ浜さんは不安げに見つめる。

「でも、こんなので大丈夫かな。それに私才能ないのかも」

ボソリと微かに聞こえる声で呟くが、それは間違っている。大事なものは美味しさではなく、作った人間そのものと、その人の気持ちに他ならない。

花沢さんから貰っても複雑な気持ちだが、かおりちゃんから貰ったら嬉しい。しかし、かおりちゃんからでも、釘を打ち込まれた藁人形だったら貰っても嬉しくない。

所詮、磯野くん、いや野郎共なんてそんなもんだ。

俺に告白されても嬉しくないだろうが、勉強のできるサッカー部エースの爽やかイケメンに告白されたら女子だって嬉しいはずだ。

そんなやつが居たら思わず藁人形に釘を打ち込んでしまいかもしれないが。

勿論、由比ヶ浜さんの言う通り才能の差も何かを比べるときに重要になるのかもしれない。でもそれは、一流と二流、プロとアマチュア、それぐらいにまで努力を重ねてから評価されるべき事であって、高々数回作っただけで才能云々ということが間違っている。

「なあ、一回だけ俺にクッキーを作らせてくれないか」

「いいけど、変なものでも入れてみなさい。コンクリートの暖かさを感じながら、冷たい

海のなかを探検することになるわよ」

よくもまあ、こんなに罵詈雑言のボキャブラリーがあるものだと関心すらしてしまうが、実際に海底探査をするのはごめん被る。

「日本の法律ではそれを殺人と言う」

「殺人ではないわ。死体遺棄よ」

「俺は元から死んでるってか」

「だって、貴方腐ってるじゃない」

「目は腐ってる訳じゃない。個性だ」

「いえ、性根の話よ」

何時もの如く、けちよんけちよんに貶されている様子を見た由比ヶ浜さんはポカンと口を開けている。

教室では、いつも置物のように喋らない俺とのギャップに、「あら嫌だ、何か怖い人」
とも思われているのだろうか。それとも「寡黙だと思っていたけど、ギャップが素敵
ね」と思ってくれているのかもしれない。

そんな彼女の呆けたようにずつとこちらを見続けている視線に居た堪れなくなり
「変なもんなんかいれる訳ないだろ。ほら、出てって出てって」

と二人を追いつ出した。

「長くなりそうだから部屋で待ってるわ」

雪ノ下の声と共にガラガラと扉が閉じられる音がした。

二人が出たのを確認し、先程の罵詈雑言の捌け口として分量を計らずに砂糖を小麦粉にぶちこんだ。

三話

時間がたち、後は二人が調理室に戻る間に完成する手筈の為、彼女達を呼ぶために奉仕部へ行きドアを開けた。

まさか、二人がそのまま居なくなってしまうたのではないかと心配したが杞憂で、本を読んだりスマホを弄ったりして各々時間を潰していた。

二人の間でどんな会話がされたのか、それとも終始無言だったのかは知らないが、これじゃあコミュニケーション不足ってモノじゃないのか。

依頼を解決したいなら、もうちよつと話してくれた方が円滑に進むと言うのに。

藪蛇になるであろう言葉は口には出さず、そのまま二人を連れ調理室に戻り、目の前に由比ヶ浜さんが創ったモノに似ている出来のクッキーをオーブンから出した。

「そのままの感想を言ってくれ」

「ゴミの方が建設的と思うような味……かしら」

「うーん、私もこれはちよつと」

「……そっか、悪かったな。やっぱり初めて作ったけど結構難しいもんだ。捨てるから置いていくれるとありがたい」

一口食べた後、思っていた通りの回答が来て、頭のなかで何回もシユミレートした言葉をいう。

勿論、少し伏し目がちで視線を斜めにし、落胆したかのような表情で演出するのも忘れない。

「えっ、でもそれじゃあ、作ってくれたのに勿体ないって言うか」

「そう。なら捨てさせてもらおうわ」

雪ノ下、予定と違うではないか。

そこは作ってくれた人の心を考えて捨てずに食べると言うのが人情じゃないのか。

この鬼、妖怪。

「何か文句でも」

「いえ、ありません」

にっこりと笑う彼女の頭から角が生えているのは幻覚であろうか。

それとも本当に彼女は鬼や妖怪の類いだったか。

「由比ヶ浜さん。彼が言いたかったのは恐らく、作ってくれる人の気持ちがかもつていればある程度なら喜んで受け取ってくれるものだから心配しなくてもいいということなのよ」

「そうなのかなあ」

「その通りだけれども、なら、なぜ捨てようとした」

「貴方はそうされた方が喜ぶのではなくって」

「そんな特殊な趣味は持ち合わせていない」

そんな趣味にさせたいのだったら、にこつと微笑みながらその場でクッキーをグシャグシャにするぐらいの事をしてくれなければ、目覚めないだろう。

俺の抗議を無視し、雪ノ下は由比ヶ浜さんに向き合い口を開いた。

「それにさつき貴女が言った才能がないなんて言葉は、やつてもやつても高みに辿り着けない人が自分を慰めて諦めるためにある言葉であって、ただ数回作っただけでその入り口にも立っていない貴女が言うべき言葉じゃない。貴女の言葉は作っても上手くないから面白くない、飽きてしまった。というのを下らない言い訳で誤魔化しているだけのよ」

これは不味い。

こんなナイフの切れ味でマシンガンの毒舌を吐かれたら、普通の人は心をぼつきりと折られ愛宕山に隠った挙げ句、自衛隊の皆様にお世話になるまでだろう。

「と、まああれだ。由比ヶ浜さんみたいな人から心のこもった手作りクッキーを頂けたら喜ばない男などいないから、そこら辺は安心して大丈夫だ」

なんて紳士的対応だ。

流石はデیفュンスに定評のある俺。自称だけれども。

ここで爽やかな笑みを浮かべ、魍魎からの毒舌から守ってお近づきになり、行方は桃色の学園生活を謳歌していくという我ながら完璧な計画であったが

「その、気持ち悪い笑みを浮かべるのは辞めてちょうだい。阿呆が移るわ」

前言撤回。この人物がいる限り、俺の学園生活は桃色に染まることはないだろう。

「うん、そつか……そつか、私頑張ってみるね。ありがとうゆきのん」

俺の精一杯の笑みを華麗に無視し、彼女は一人納得した様子だった。

伝わったのは何よりだが。

「え、ええ。それは良かったわ。でもその……ゆきのんというのは？ それに私結構貴女を傷付ける様なことも言ったのだけれど」

「そんな風に自分の意見をきちつと言えるのって格好いいなあっておもったの。ゆきのんは、ゆきのんだよ。……ダメかな」

「別にダメと言うわけでは無いのだけれど、なんだかこそばゆくって」

かの有名な鬼も乙女の上目遣いには弱かったようで、そこから彼女達の百合色の学園生活が始まったのだ。

俺もそこに混ぜていただければ、なおのことよしなのだが。

「後、ヒツキーもありがとう。さっきの顔はちよつとあれだったけど」

なんのことはない。

○ その時、輝かしいその幻想がぶち壊された音を聴いただけだ。

奉仕部の活動は、ある時は不良少女の手助けをして、またある時はいたいけな小学生達を蜘蛛の子のように散らしていき、文化祭では悪役を担って大失敗で終わらないようにもした。

その合間に実は同胞であつた大岡とその他の阿呆達との友情を紡ぎあげたり、巷で噂になつている恋の邪魔者と呼ばれる阿呆の小説を酷評したり、訳の解らん部活と闇のゲームを繰り広げたり……etc. と、とにかく雑多な内容だつた。

これを見ると何とも言い難い戦績と阿呆っぷりである。

傍目から見れば毎回、俺が阿呆なことをし、それを雪ノ下が助け、由比ヶ浜が場を持たせるという役割が定着しているように思われるが、その実色々なことを考え暗躍しているのは俺だつた。

時間の無い不良少女には俺の使っている〈印刷所〉と錬金術を教え、いたいけな小学生を散らした後は、平塚先生を通して親御さんに紳士の謝罪をした。

文化祭終了後は人知れず隠れる術も完璧にした。

そんな苦勞もいざ知れず、奉仕部が一つ問題を解決すること、俺と彼女達の関係はギスギスとし始め、百合色のキャツキヤウフフな空間が形成される。

こんなギスギスと錆びた歯車のような音が流れる部活にしてみました責任者は誰だ。責任者を出せ！

と声をあげたところで出てくるのは、雪ノ下の姉である雪ノ下陽乃や、まだ見ぬ雪ノ下母等の強敵であるだろうからそれは言えない。

それというのも、高校一年の入学式当日に犬の命と引き換えに高校デビューの機会を失った俺だが、俺が助けた犬が由比ヶ浜の犬で、俺を轢いた車が雪ノ下を乗せた車だったことに他ならない。

この事実を知らなければ、もしかしたら彼女達ともまだ上手くやっていけたかもしれない。

○ ギスギスを通り越して冷戦状態を迎える切っ掛けとなったのは、修学旅行の件だろう。

戸部なる阿呆の先端を走る男が京都の修学旅行で意中の女性に告白したいという依頼をしてきたことや、その乙女の依頼？を達成する為、その他諸々の空気を保つ為に、なんやかんやあり渦中の女性に告白をした。

機密保持の観点から、女性の名前を書かないのは了承して頂きたい。

俺がその乙女に告白をした場所は竹林の道といい、京都の嵐山駅から渡月橋を渡り途中の交差点を左に曲がり少し歩いた所にあつた。

当初、戸部の依頼を成功させようとしていた俺たち奉仕部は、竹林の道でその様子を見守っていたがライトアップされ風に靡きながら揺れる竹林と彼女達は、なにやら映画やドラマの一シーンに見えよく似合っていた。

どれくらい似合うというと、将来は高等遊民か専業主婦以外になるとしたら、竹林をよきによきと植え世界中が美女と竹林で溢れ変えるような仕事をしようと思わせるぐらい。

そこに浴衣なんて着て来られた日には、一生懸命働いて養ってしまおうとするまである。

つまり、美女と竹林と浴衣は、部屋とワイシャツと私に匹敵するぐらい素晴らしいものかもしれないと言うことを知った。

まあ、それは置いといて、その一件について雪ノ下からは

「貴方の自分を犠牲にして解決しようとするやり方、正直言って嫌いだわ」

と軽蔑され、由比ヶ浜からは

「ヒツキーだけが損するのはやっぱり可笑しいよ」

と怒られた。

仕方ないではないか。今まで誰とも関わることのできなかつた人間がどうして人間関係の問題を円滑に解決することが出来るのだろうか。

俺が解決できるものといったら文系の問題だけで。

そんな、ただのぼつちが何かを成すには、何かを犠牲にしなきゃならない。

等価交換だ。って某錬金術だって言ってたじゃないか。

なら、助けてくれよ。軽蔑するだけじゃなくって、哀れむだけじゃなくって、奉仕部なんだろう。

結局、この叫びは誰の耳にも届かないまま、今でも自分の中で消化不良を起こしたように漂っている。

○

その後、生徒会選挙についての依頼が着て、何かを決定的に掛け違えてしまった。

雪ノ下は自分が生徒会長になれば、依頼内容の後輩を生徒会長でないようにすることを達成出来ると思ひ、立候補をした。

対して俺はと言うと、後輩をその気にさせ依頼自体を無かつたことにさせると言う考

えで行動をした。

両方の意見の食い違いは論争に発展し、その論争は成田山に御参りにくる観光客の耳にまで届く大論争となった。

結果、彼女達との仲に48度線が引かれてしまい、雪ノ下は生徒会長に就任し、最後まで仲を持つとうと努力してくれた由比ヶ浜は雪ノ下に着いていく形で奉仕部を辞めた。

奉仕部は俺一人きりになり、最早顔を出す必要性も無く自由に時間を過ごせるといふのに、何故部室に足を向けてポケットと過ごしているのか。

そんな事を聞いても誰も答えを返してくれない。

部室は今、一人分のページをめくる音だけを静かに反響させている。

四話

猫ラーメンというのがあるらしい。

真偽のほどは定かではないが、何でもその屋台では猫で出汁を取っているという。

そして、その味は無類だと評判になる程。

しかし、インターネットで検索しても出てこない、実際に食べた人も聞いたことがない、と都市伝説の一つではないかと言われている。

その噂を聞いた俺は、いつからか猫ラーメンとも言われている屋台を探しにふらふらと夜の街へ抜け出し散策するのが日課となっていた。

そんな冬のある日。

というより地元の祭りの当日、俺は今日も猫ラーメンを探して町をふらついていた。

それというのも、愛しき妹の小町の

「今日は友達とお祭りに行つてくるから晩御飯は自分でなんとかしてね。でもお兄ちゃんも雪ノ下さん達とお祭りに行くのかな。じゃあお土産はいらさないから、お話聞かせてね。今の小町的にポイント高い」

と言う発言で最初に晩飯をどうにかするしかなくなったからだつた。

ちなみに彼女たちからは、勿論声もかかつていない。そもそもあの一件以降、殆ど顔も合わせていない。

そんな状況で部屋にあるのは、奉仕部の二人と仲が拗れる前に何故かモジモジしながらもつてきてくれた、由比ヶ浜産のクッキーと常時置いてあるマツ缶のみである。

祭りの日に一人寂しく部屋でクッキーをかじるかラーメンを啜るかで迷つたが、食欲には勝てなかつたよ。

くっ殺

そんなこんなで今日こそはと噂のあつた高架下へ向かうと、ぼつりと佇む屋台を見つけた。

これが猫ラーメンなのかと期待する気持ちを抑え席に座る。

先客がいたが気にせずにはラーメンを注文すると隣から、比企谷あ比企谷あ何やら声が聞こえてきた。

ちらりとの覗き見るとぐでんぐでんに酔っぱらつた平塚先生の姿があつた。

「うわっ、出た」

「お前はそうやっていつも私を妖怪扱いして楽しいのかあ」

「そういうつもりじゃないんですが、タイミングというかなんというか。というよりどうしたんですか祭り当日だったのに、こんなに酔っぱらって」

「合コンで、合コンで……うわああああ」

脳内の選択肢で、俺でなければ話を聞きますよ。と、そつとしておこうの二通りが出てきた。これは、もしや絆の力で敵を倒すアトラス的なあれか。とも思ったが、圧倒的コミュニケーション不足である。なんなら最初の影にやられてしまうまでである。

即座にそつとしておこうを選んだ俺だが、意に反さずに平塚先生は絡んでくる。

その内容は多岐にわたたり、女性という生き物はから始まり、彼女の小学校時代の甘い初恋にまで及んだ。

噂通り絶品であった猫ラーメンを食べ終わった後もずつとしゃべり続ける彼女を抑え、屋台を出るころには何時ものように説教へと変わっていった。

「比企谷、お前はもう少し自分というものを大事にすることは出来ないのか」

「俺は自分が一番大事だと思っっていますけど」

「いいや、違うな。いつも奉仕部に依頼される問題は君が傷つくことによつて解消されていた。まあ、それは生徒会長になった雪ノ下にも言えることだが」

それは仕方ないじゃないか、コミュニケーション能力の圧倒的不足や状況を鑑みて最善を取っているだけなのだから。

「そんな君が、自分の事を一番大事に思っていると云ったところで、説得力は無いな」
「……前向きに検討しておきます」

「君が傷つくと悲しむ者がいることを忘れるなよ。私だつてその一人だ」

からからと笑いながら言う彼女を見て、本当に何故この人にいい男性が現れないか不思議でしょうがないと場違いな感想をもった。

「先生が奉仕部へと連れてきてくれなかったら、もつと違う人生があつたのかもしれないね」

「それは無理だ。君が道を踏み外そうとしてもいくらでも私は日の当たる道に戻してやる。全力を尽くしてな」

公衆灰皿に吸い殻を入れながら彼女は言う。

その言葉がやけにむず痒く感じ、何かを言わなくてはいけないという気持ちになる。
「良く、自分探しつて言つて旅に出る人がいるじゃないですか？」

「そういうやつもいるとは思いますが、それがどうかしたか」

「旅したからつて自分がどこにあるか、何てわからないと思うんですよね。別にループルで恭しく展示されてる訳でもないし、月の裏側にあるわけでもない。だからといつ

て、そこら辺の道端に落ちてるものでもないし、行き付けのコンビニなんかでも売られていないと思うんですよ。……で、旅から帰って自分の部屋を見たら転がってたりする」

「それで、君はどうしたい？」

自分でも言いたいことが混乱してきた時に、優しい声色でまるで教師のように彼女は語りかける。

いや、そういえば彼女は教師だったな。

「君のいう通り、自分自身なんて結局そんなもんだったりするさ。旅は病気と同じだよ。無くなって初めて日常の有り難みを感じることでできる手段なのだからな」

そう、人は自分の力でそうそう変わるものではない。

だから、ここに連れてきてくれた彼女に感謝と少しの恨みを持つのだ。

言い回しが回り口説くなつたが、今はこれが精一杯。

「君の言いたい事は大体分かった」

彼女は二箱目の煙草を取りだし、火をつける。

「まあ、春は短し旅せよ青年。桜は速く枯れてしまうぞ」

彼女の吐く煙が空へと吸い込まれていく。

「……どうして、そこまでして俺のことを気に掛けるんですか」

そういうと彼女は笑いながら小指を立てた。

「私達は運命の糸で結ばれているんだ。それに……」

一呼吸おいて、満面の笑みで答える

「私なりの愛だよ。愛」

この破壊力は不味い。生徒と先生のアバンチュールに走りそうまである。

が、相手は酒臭い、相手は酔っぱらい、相手はアラサー、相手は教師

よし、なんとか大丈夫。

「……すまん。酔ってるみたいだ」

「知ってます。それにそんな重い物要らないですよ。先生」

「ぐはっ」

がくりと崩れた後、彼女はコンビニでお酒を買いヤケ酒だとばかりに飲み干す。

そのまま、2人でぶらぶらと歩いているが、心なしか先生がくっついて来るように感

じる。

「どうか近いですよ先生」

「だって寂しいんだもの。それに夜風が冷たいの」

「この、さびしがりやさん」

「きや」

と、こんな会話をしても彼女に惹かれないぐらいに回復した俺は、いい気分になった先生と共に祭りの雰囲気を感じる公園を横切る。

そこで、占いという何とも怪しげな看板を掲げた露店を見つけた。

「比企谷、ちよつと寄つてみよう」

酔っぱらった彼女に怖いものではなく、イチャイチャとするカップルにフシャーと威嚇しながら白い布を掛けた台を前にしている人のところへと向う。

何やら妖気をまとわせ、無駄に説得力がありそうな場所だった。

フードで顔を見ることは出来ないが、こんな妖気を無料で垂れ流している人物の占いが当たらないわけない。

きっとフードは俺の欲する薔薇色のスクールライフへの道を客観的に指し示してくれるに違いない。と妖気に吸い込まれるように足を踏み出した。

「あなたはどうかやら真面目で才能もおおりのようです」

フードの慧眼に脱帽した。

「しかし、このままではあなたは伴侶に巡り合えず、結果、イニシャルがY・ZかS・Tの男性と将来過ごすことになりました。ぐ腐腐」

笑いかたが特徴的なその占い師はよりにもよつて、野郎のみで歩んでいくという訳のわからない未来を予言した。

「そんなことつてあんまりじゃないですか」

「その未来を変えたぐば、好機を逃さないことです」

「好機？」

「キーホルダーと首輪です。それが好機の印、好機がやつてきたら逃さない事。その好機がやつてきたら、漫然と同じことをしては駄目です。思い切つて、今までと全く違うやり方で、それを捕まえてごらんなさい」

キーホルダーと首輪に心当たりを求めようとするが、あと一歩のところまで思い出せないもどかしさを感じる。

しかし、隣で聞いていた彼女によってその考えは隅へと追いやられた。

「私は、私の、私の好機の印とやらはいったい何なのだ」

「先程逃したようですね。もうありませんよ、独りです」

「ぐはっ」

本日二度目の崩れ落ちは、それはそれは見事なorzを描いていた。

「良いですか、キーホルダーと首輪です。好機はそこにございます。努々お忘れなきよう」

野口さんを召喚しその場を去ると、隣から何やら声がする。

「ふふつ、ははつ、フウアーハハハッ。いいじゃないか独身だつて……合コンに失敗したつていいじゃないか!!」

白衣をバサアとしながら高笑いをする彼女は、紛れもなき狂気のマッドサイエンティストのそれだ。

「ええじゃないか、ええじゃないか」

ええじゃないか、ええじゃないかと壊れかけの Radio のように叫びながら彼女は祭りの人混みまで行脚していく。

さつきまで俺に論していた大人は何処へ行ってしまったのか。

成る程、独身な訳だ。

「何、阿呆なこと言ってるんですか先生」

「煩いぞ比企谷。ええじゃないか、ええじゃないか。ほらお前もやれ」

仕事帰りのサラリーマンや祭りに来ていた学生らしき人がびくりとこちらを見るがお構い無し。

そんな彼女の叫ぶ姿を見てるとなぜだか哀しくてしようがなくなってくる。

しかし、一応大恩ある先生、見捨てるわけにはいかない。

ならばこちらもと自棄になり、溜め息をついた後ええじゃないかと叫び出す。

「くそつ、ええじゃないか、ええじゃないか、独りぼっちでもええじゃないか、ええじゃないか」

「ええじゃないか、ええじゃないか、独身だつてええじゃないか、ええじゃないか」
訳の分からない百姓一氣を行う内、中々に愉快な気分になつてくる。

何事かと集まつてきた人に彼女は肩を組み、巻き込みながらええじゃないかと叫ぶ。肩を組まれたサラリーマンが、万年平でもええじゃないか。と叫び出す。

祭りに来た人々が感化されたのか少しずつええじゃないかと叫ぶ人が増え、ちよつとした、ええじゃないかの大名行列のようになりながら一行は橋へと着く。

橋の向こうからは、大勢の集団が何やら気色ばんだ表情で何かを探すように彷徨つてゐるが、橋に着き20分位たつと、何かを探していた集団をも取り込み、辺りはええじゃないかの声一色になり『ええじゃないか』他の音が聴こえなくなる『ええじゃないか』程の大合唱『ええじゃないか』になつた。

なぜだか気分が晴れ『ええじゃないか』笑いながら川の方に目をやると、『ええじゃないか』泣きそうになつてゐる由比ヶ浜と雪ノ下が『ええじゃないか』いた。

どうやら、この騒ぎに巻き込まれてしまったようだ。

声を聞くことは出来ないが、由比ヶ浜を守るようにして立つ雪ノ下は良い訳無いじゃ

ない。と言っているように見える。

冷戦状態でも流石に何か月も同じ部活をしていた仲で放っておくことも出来ず、隣にいる平塚先生に声をかける。

「ちよつと、『ええじゃないか』先生」

「『ええじゃないか』何だ」

「あそこに『ええじゃないか』下と『ええじゃないか』ヶ浜が」

「え、なんだつて?」

精一杯声を張り上げるが、全く聞こえていない平塚先生を置いて、人混みのなかを掻き分けていく。

そうこうしているうちに、彼女たちは橋の隅へと追いやられ、顔は今にも泣きそうに歪み、強く押されたら落ちてしまうのではないかと思われるところにまで来ていた。

彼女達が泣きそうになつてゐるのに、回りの阿呆共の能天気な声で楽しそうにしているのを見てみると、不思議と苛立ちが高まつてきた。

「『ええじゃないか』お前ら、なにがええじゃないかだ。ええわけないだろ『ええじゃないか』どけつて」

叫んで押し退けて、叫んで押し退けてやつとたどり着く。

「大丈夫かお前ら」

「ヒツキーなんでここに」

「いや、まあ、そんなことはええじゃないか」

「どうせまたあなたが阿呆なことでもしたんでしよう」

その通り。

それにしたつて、さつきまで泣きそうな顔をして居たのに俺が来ただけで何時もの表情に戻るのには信用されているのか心底あきれられてるのか分からなくなる。

「やつと追い付いた。つて、雪ノ下に、由比ヶ浜じゃないか。こんなところでどうした」
「先生こそ追い付いたつて、ヒツキーとデートでもしてたんですか」

ぎらりと由比ヶ浜が先生を睨む。

先生は、酔っぱらった赤い顔をさらに赤くして俯いていた。

「いや、先生。否定してくださいよ」

「早く通報しなきゃ」

と携帯を取り出す雪ノ下。

少し冷静になったのか、先生は顔が赤いままだがさつきよりは顔を引き締めいう。

「偶々、猫ラーメンで会つてその帰りだ」

「そうですか。猫ラーメンに行つてたのですね?」

彼女の全てを凍らせるような視線がこちらを刺してくるが、何のこつちやわからない

こつちは所在なさげに手を頭に回すしかない。

「こんなところで話さなくても良いだろう。取り敢えず早くここから離れるぞ」

と言ったとたんにどこからか

「いたぞ、こつちだ」

と誰かが叫び、その声に向かうかのように人が動き先ほどよりも揉みくちやにされた。

どこの馬の骨とも知れない奴が雪ノ下にドンとぶつかり、彼女が寄り掛かっていた欄干が悲鳴を上げる。

「くそっ」

無意識のうちに雪ノ下の手を引き、場所を交換した。欄干の外に投げ出された俺が最後に見たのは三様の驚いた顔と大量の紙吹雪だった。

何か叫んではいるが、『ええじゃないか』に押し潰され聞くことは叶わなかった。

五話

それは、まだ俺と奉仕部の関係がギスギスと音を立てる前の話である。

それは由比ヶ浜の誕生日プレゼントを買いに雪ノ下と二人でららぽーとに向かったときの事。

何時ものように、北極点の氷のごとく冷たく固かったが乙女と2人でどこかに出掛けるなど妹以外では初めてだったのでやけにふわふわした気分になったのを覚えている。

名目上は友達にプレゼントをあげたことがないから、プレゼントの選び方がわからない。い。

というものだったが、それをいったら俺だって友達にプレゼントを渡したことがない。い。

それどころか友達すらいない。

それでも、プレゼントに参考書を選ぼうとしたのを止めれたことは、俺がいることで少しは役に立ったという証拠かもしれない。

一緒に買い物をする事で少しは気を許してくれたのか、何時も纏わせている空気が柔らかくなっている気もして、ふとショーケースに映った顔をみたら、にやけていて気持ち

ち悪い自分の顔が見えた。

それが恥ずかしくて、背筋を伸ばし顔に力を入れたが、彼女はそれどころではなかったらしい。

白いスカーフを巻いたパンさんのキーホルダーの入ったクレイニングゲームを発見したとき、彼女は挙動不審ともとれるぐらいそわそわしていた。

「これ欲しいのか」

どつからどう見てもそれが欲しいです。って表情をしているけど、あくまで紳士的な対応を心掛け訪ねる。

「ちがうの、これは、その」

歯切れの悪い彼女のに業を煮やし、いざパンさんのキーホルダーを取ろうとお金を入れた所までは良かったが、あれよあれよと言う間に樋口さんまで飛んでいくことになってしまった。

「あー、悪い。取れなかった」

「別に私は欲しいなんて一言も言っていないのだけれど。全く貴方は阿呆なことをするのね」

横顔が残念さを物語っていたが、こつちを向いた彼女は少し笑っていた。

「お前にあげる為じゃなくて、ただ単にとれない悔しさからこここまでやつちまったんだ。

まあ、今日はプレゼント代が無くなるからやめるけど今度来るときは俺が悔しいから絶対にとってやるよ」

「そう。なら期待しているわ」

てつきり、あなたと来ることなんて一生無いのだけれど、みたいな言葉を言われるのかと思っていただけに拍子抜けも良いところだ。

「ああ、約束する」

○

場面は変わり、由比ヶ浜の誕生日

俺は買った犬の首輪を渡すために彼女を呼び出した。

桃色の学園生活に未練があった俺は、何かあるのではないかと、期待を膨らませていた。

「どしたの、ヒッキー」

「まだ、きちつと誕生日を祝ってなかったなと思って。おめでとう由比ヶ浜」

「うん。ありがとう」

「それでだな、その」

プレゼントを渡そうとポケットに手を入れているが

「ヒツキーはさ、今楽しい？」

と言う問いかけに渡すタイムミングを逃してしまった。

「そりやあ思ってた高校生活とは違うな。もっとうきゃツキヤウフフな感じでだな」

「なにそれ、変なの」

「雪ノ下にこき使われたりもするが、でも、最悪ではないと思う」

確かに彼女はきついところがある。

それこそ、俺が想像していた学園生活を根底から壊してしまうほどに。

それでも、ほんの少しだけ楽しんでる自分がいるのも事実だった。

「ゆきのんは少し愛情表現が苦手なだけなんだって、ああいう態度をとっちゃうのも全部あれは、ゆきのんなりの愛なんだよ」

「そんな気色悪いもん、いらんわ」

「ひどいなあ、もう。でも、私は奉仕部の活動は楽しいよ。ゆきのんや……ヒツキーもいるし」

渡すならばここしかない。自然にポケットからプレゼントを出すんだ。一歩さえ踏み出せば生活が変わるかもしれないのだから。

「由比ヶ浜」

「ヒツキー」

互いを呼ぶ声が重なり沈黙が流れる。

「ヒツキーから、先に」

「あ、ああ。あのな由比ヶ浜わた」

「けぷくんけぷくん。おーい我が朋友よ」

変な咳をしながら、こつちに向かつて手を振る熊の妖怪により次の言葉を遮られる。

先に雪ノ下の内面が妖怪と言ったが、こいつ。材木座は容姿も内面も妖怪だ。

人の恋路を邪魔することに生き甲斐を感じ、他人の不幸で飯が三杯食べれる、特定外来種、恋の邪魔者、犯罪係数300オーバーの執行対象。

こいつはいつの間にか体育で俺と組んでいたり、奉仕部に自作小説を持ち込んだりと神出鬼没に俺の前に現れる。

今日だって呼んでいなかったが、いつの間にかしれつと混じっていた。

「八幡だけが幸せになっていいはずがなからう」

ボソツと耳元で呟かれた言葉に戦慄を覚え、更に言えばそんな空気では無くなってしまったので、結局プレゼントを渡すことが出来ず別れた。

キーホルダーに首輪、一度はそれを手にして渡そうとしたはずだけど一步が踏み出せずに、気が付けば霞のように俺の部屋から消えてしまっていた。

○

いつもと変わらない部室の中、何時もより雪ノ下がそわそわしている。慣れてしまえば彼女は意外と分かりやすい。

「どうしたの、ゆきのん」

「ねえ、由比ヶ浜さん猫ラーメンって知ってる？」

聞きなれた単語を雪ノ下がいうものだから少しビックリとするが、ここで反応したらなにか言われるだろうと黙って様子を見る。

「うーん、分からないな」

「そう。私も平塚先生が、眩いていたのを聴いただけだから聞き間違いなのかもしれないけれど、もし知っているのなら教えてほしいと思って」

この様子じゃ、ただ言葉として聴いただけで噂として知ってるわけでは無さそうだ。

他の人から真実を聞いて、まだ見ぬ猫ラーメンを廃業にさせてしまうよりかは、ある程度こちらで情報を教えた方が良さだろうと結論付け二人に話しかける。

「それ聞いたことあるぞ」

「あなたは、何時から乙女の会話を盗み聞きするようになったのかしら」

「いや、お前何時もよりそわそわしすぎ。声が大きすぎ。誰だつて不振に思うわ」

「それでヒッキー、猫ラーメンってどんななの？ 私も聞いたことないんだけど」

「ああ、何でも移動式の屋台で味は無類なんだとか。ただ、食べたことあるつて奴の話

しは聞かないな」

猫ラーメンの猫は、猫カフェみたいな意味の猫ではないがそれは敢えて言わずにおく。

「そう、猫ラーメン。ね……」

顎に手をあて考え込む雪ノ下を見みながら、少し窓の外を眺める。

その途中で由比ヶ浜と目が合い、彼女は優しくそうに微笑む。

「ねえ、ゆきのん。今度さ、3人で探してみない?」

「何でこの男も一緒に、って言いたいところだけど、この中で一番情報を持つてるのも事実だし、2人で探すよりかは効率的になるかも知れないわね」

「という訳で、ヒッキーも参加ね」

「はあ、どうせ断つても強制参加だろ。なら断るだけ無駄だな」

「溜め息吐かなくてもいいじゃん」

「由比ヶ浜さん。この男にそこまで求めるのは酷よ。むしろ断らなかったことを誉めてあげるぐらいしてあげないと」

「いや、そんなダメな子じゃねーよ」

「この会話全部が本物って訳ではない。

猫ラーメンの名前の由来も明かしてないし、雪ノ下が何で猫ラーメンを探してるかも明かしてない。

さつき言った断るだけ無駄、つてのもそんな理由をつけなくても多分俺は……

色んな事に言い訳をして、肉付けをしていって、偽物が増える。

それに気付けば、自分の気持ちすら本物かどうか分からなくなる。

それでも、夕暮れの教室で、逆光の中の彼女たちの微笑みに少しだけ何かを見た気がした。

○

「貴方の自分を犠牲にして解決しようとするやり方、正直言つて嫌いだわ」

「ヒッキーだけが損するのはやっぱり可笑しいよ」

「君が傷つくと悲しむ者がいることを忘れるなよ。私だつてその一人だ」

走馬灯のように駆ける映像と遠い昔に聞いたような言葉。

遠ざかる雪ノ下たちの顔を見ながら考える。

もし俺が奉仕部に入っていないければ、彼女たちではなく、違う乙女たちと戯れる機会が合ったのではないか。

俺が奉仕部に入ってしまったせいで、この部活も俺も彼女たちも歪になっちゃった

のではないか。

確かに彼女達に惹かれた事があるのは否定しない。

このまま、奉仕部の関係が崩れなければ良いと思つた事もあつたのは事実だ。なら、どうすれば良かったのか。

部活内の空気がギスギスしたつて、何かを守りたかつた。

自分を犠牲にしても、きつとそこにいたかつたのかもしれない。

何を守りたかつたのか、何故そこに居たかつたのか。

この短い時間では、答えなど見つからなくて、ただボソツと何が本物だ、という声を残して落ちていく。

どうしてこうなつてしまった。

由比ヶ浜でも平塚先生でも、そして雪ノ下でも……誰かにきちんと気持ちを伝えれば良かったのか？

恋愛という意味だけでなく、今もぐるぐると渦巻いているこの気持ちを。

この俺の優柔不断で独善的な態度がこの結末を引き起こしたならば、責任者は俺かもしれない。

今となつては、あの奉仕部での会話も懐かしい。

願わくば、高校生活をやり直せるように。と思ひながら、俺は目をつぶつた。

二畳紀 こうして恋の邪魔者は蜜月を迎える 六話

夕暮れ時、体に纏わりつく不快な湿気と、隣から発せられる不快な声を振り払うようにため息をつく。

「はあ」

「どうしたというのだ八幡。幸せが逃げるぞ」

「お前、本当に溜め息をつくとき幸せが逃げるとでも思っているのか」

「まさか、もしそれが本当ならば我は今頃行き交う乙女達の桃色吐息と幸せを片っ端から吸い込んで、総理大臣にでも成っているだろうな」

冒頭から通報ものの阿呆っぷりを発揮したのは、道行く10人のうち8人が妖怪と間違えるような容姿を持つ男、材木座義輝である。

ちなみに残りの道行く2人はきつと妖怪だ。

中二病で暑苦しく、他人の不幸で飯が三杯食べられるというおおよそ誉められる所の無い、特定外来種、犯罪係数300オーバーの執行対象の存在。

なぜこんな男と2人で歩いているかと言うと、部活帰りだからというに他ならない。

○ 俺と材木座の出会いが8ヶ月ほど前に遡る

高校一年の猛暑真つ只中、なぜか平塚という黒髪教師に目をつけられ、健全な心は健全な肉体に宿ると俺はテニス部へと強制的に入部させられたのであった。

まあ、これも薔薇色のスクールライフを謳歌していく為であり、この部活でキャツキヤウフフな展開になるのではないかと、もしくは友達百人作るのも悪くないと期待もしていた。

しかし、現実には非情でこの中途半端な時期に入部をしたところで、俺は異質以外の何者ではなかった。

入学式後の悲劇の再来である。

この部活を通して、柔軟な社交性を身に付けようと思っていたがそもそも会話のなかにはいけない。

言葉のラリーどころか、先ず玉が見つからない。

柔軟な社交性を身に付ける前に、最低限の社交性を身に付けるべきであったと気付いたのはすでに手遅れになってからであり、部活内でも、教室でも俺の居場所は無くなっていた。

「これは乗り越えられる試練なんだ。ほら、仁先生も言ってたじゃないか。神は乗り越

えられる試練しか与えないと。この逆光の中で立ち向かってこそ、黒髪の乙女との純金色の未来が待っているのだ」

そう自分に言い聞かせながらも、俺は挫けかけていた。

愛しき妹である小町の

「お兄ちゃん。ぶつぶつ呟いてて引くんだけど」

と言う言葉に心は完全に挫けた。

そして目を瞑って隅っこに挟まって、口だけ開けて雨と埃だけ食って辛うじて生きている状態の俺の傍らに、酷く縁起の悪そうな顔をした不気味な男がたっていた。

繊細な俺にだけ見える地獄からの使者か又は雪山から遭難したイエティでも来たのではないかと最初は思った。

「酷いことを言うではないか、我はお主の味方だ」

それが材木座とのファーストコンタクトであり、ワーストコンタクトであった。

○ どうやら奴も平塚先生に目をつけられ俺の1ヶ月後に入部させられたらしい。

部活内から総すかんを食らった俺だけでも、こちらも何も感じなかった訳ではない。

先ずこの部活の体制に腹が立った。

彼等はお飾りの顧問と一年生部長を据え、実質的な権力は副部長以下が握っていた。

部活中は真面目にしているが、部活後の彼等は言うも破廉恥、聞くも破廉恥な阿呆ばかりで見ると耐えない。

かといって、この部活をやめるといふ選択は一応恩義ある先生の顔に泥を塗る事になり、何より逃げ出すといふ選択肢は敗けを認めるかのように癪に障った。

そこで、俺と材木座がとつた行動は実力をつけることだった。

そうすれば、部内でも一目を置かれる存在となり、発言力、ひいては社交性がぐんぐんとうなぎ登り、有明テニスの森よろしく幾面もある恋の COURT を縦横無尽に駆け回り乙女たちとのラリーを繰り広げられるに違いないと思つたのだ。

そう思っていた俺は、どうしようもない阿呆だったに違いない。

来る日も来る日も二人で黙々と練習に励み、元々この高校は弱小とも言えるテニス部だったということもあつた事が幸いし、二年生になる頃、部活内の人間全員に1ゲームしか取られずに勝てるまで上達した。

周りの連中が真面目に部活動をしなかつたからなのか、はたまた秘められた才能が開花したのかはわからないが、もし学校が違えば、お前はこの学校の柱になれと言われるまでであろう実力をつけていったのは確かだ。

しかし、こちらが実力をつければつけるほど怪奇なことに、副部長達の破廉恥さが上

がっていくようであった。

そして、俺と材木座は、一目置かれるどころか二十歩ぐらい遠巻きに見られるようになった。

他から見れば、実力のある人間をまとめあげているように見えるのであろうか、とにかく彼のカリスマ性はこちらの意図に反して上昇していく。

○

「これじゃあピエロじゃないか」

部活後、つらつらと歩きながらMAXコーヒを飲み世の不条理を訴える。

「今頃気が付いたのか。もうお主の立ち位置は変わらない。ならばこれでいいではないか」

「いいわけあるか。真っ直ぐに生きすぎたせいでこの有り様だ」

小町だけは誉めてくれるが、正直限界だった。

力をつける理由は、後ろめたいことでは本領を發揮できないと今更ながら気づいた。

愛する乙女のためだったらまた違ったのであろう。

小町は愛する乙女だが、兄妹なのでカウントはしない。

世の中も、青春もマツ缶ぐらい甘ければいいのに。

「確かに、部長の権力は地に落ち、副部長がのさばっているこの状況は看過出来んわな」

「しかし、ならどうすりゃいい」

ううん、と材木座が唸っていると、ここが地獄の一丁目かのように思えてくる。

何かを閃いたのか人指し指をピンと立て、彼は叫ぶ。

「リア充死すべき、是非もなしっ」

「お前は何をいつているんだ」

「花火を打ち込もう」

「いや、だからお前は何をいつているんだ」

ふふん、と鼻を鳴らし材木座は続ける。

「今度の日曜日、他の学校との交流試合があるだろう」

「ああ、それがどうした」

「そのあと、他校を含め南房総の方の三角州で大規模な宴会をやるらしい。そこを襲撃する」

「交流試合の後って、俺それ誘われてないんだけど」

「そんなのいつものことだろう」

よくもまあ、こんな非道なことを思い付く。

こいつを世にのさばらせておくのは、俺の精神衛生的な面でも日本政府的にも良くないに決まっているのに。

「よし、やろう。すぐやろう。天誅だ、天誅を下すのだ」

「しかし、その宴会には戸塚嬢も参加するそうだがな」

基本的に部活外では路傍の石同然の扱いだ、一人だけ、気にかけてくれ、下らない話を出来る存在がいる。

それがテニス部のお飾り部長であり、大天使の戸塚だ。

彼は黒髪 of 乙女も裸足で逃げだす程の美貌を持つ程の美少年。

そして、俺を幾度も衆道へと導きかけた存在である。

ほわほわとして笑うと、あれ？ここはいつからここは花畑になったんだ。と思わせてしまうような繊細で華麗な雰囲気を持っていた。

神はなぜ彼を乙女として、生を受けさせなかったのか甚だしく遺憾だ。

「ぬぐぐ、と、戸塚は関係ない。コレは俺達の戦いだ」

少しばかり心が動かされたが、飲み終わったMAXコーヒーをゴミ箱へと突っ込み、歌舞伎役者もかくやと、見栄を切る。

「その粋やよし」

そこでこの話は終わり、話題は学生らしく勉強の方へと向かう。

「そう言えばお前、課題とかどうしてるんだ」

「我はテニスばかりやって来たからな、その類いのものは全て〈印刷所〉へ任せている」

〈印刷所〉という秘密組織が学校にあつて、そこに注文を出せば偽造ノートが手にはいる。

噂ではこの学校のOBが立ち上げたらしいが、組織の構成など詳細は闇のなかだ。

高校生活が始まつてからは、自分の力で何とかしようと思つていた学問面だったが、一学期に渡された成績表は、実に見事な低空飛行をしていた。

それを見るに見かねた材木座が〈印刷所〉の存在を俺に教えて、それ以降日々使つているのだ。

〈印刷所〉なる胡散臭い組織に理数科目はおんぶに抱っこでやつて来たお陰で、今や俺は〈印刷所〉の助けがないと急場すら凌げない体になつてしまった。

見も心も蝕まれてぼろぼろまである。

○

決行の前日、俺は一度冷静になるために、夜の町へと繰り出した。

噂にすぎないが猫ラーメンという屋台があるらしい。

その屋台は猫の出汁を使つてラーメンを作つているらしく、味は無類だそうだ。

猫を飼つている身からしたら複雑な気持ちだが、好奇心と食欲には勝てなかつたよ。

さらに言えば小町は何やら知り合いの相談を受けるだのと不在。

家にある食料は小町がくれた、原産地不明のクッキーらしき木炭のみである。

小町がくれたものと言つても、おいそれと手を出して良いのか分からず、いや、出したくない代物で仕方なく夜の町を徘徊するはめになったのだ。

今日こそはと意気込みながら、探し回つていたら橋の下にそれらしい屋台が見つかった。

先客がいたが、気にせず座りラーメンを注文すると隣から比企谷あ、比企谷あと言う声がある。

ちらりとの覗き見るとぐでんぐでんに酔っぱらった平塚先生の姿があつた。

「うわっ、出た」

「お前はそうやって私を妖怪扱いして楽しいのかあ」

「そういうつもりじゃないんですが、タイミングというかなんというか。というよりどうしたんですかこんなに酔っぱらって」

「合コンで、合コンで……うわああああ」

ここで、俺でよかつたら愚痴に付き合いますよ。と気の効いたことの一つでも言うべきだとは分かっているが、恋のラリーどころか人間関係に置いては一ゲームも取ることの出来ない素人同然のため、見て見ぬふりをしながら自分のラーメンに手をつけ始めた。

即座に見て見ぬふりを選んだ俺だが、意に反さずに平塚先生は絡んでくる。

その内容は多岐にわたり、女性という生き物はから始まり、彼女の小学校時代の甘い初恋を経て、最終的には晩年の孤独死問題にまで及んだ。

噂通り絶品であった猫ラーメンを食べ終わった後もずつとしゃべり続ける彼女を押し、屋台を出るころには、話題はなぜか俺の学生生活へと変わっていった。

「顧問から聞いたぞ、比企谷。お前最近頑張っているそうじゃないか」

今週の日曜日には頑張った反動で爆発してしまいます。

とはいええず「うつつ」と、どこぞのテニス王国の従者のように答えておいた。

「私は、何か一つでも真剣に取り組む君や材木座が見たかった。テニス部に入れたかいがあったというものだ」

俺が腹の内を抱えている黒い感情に気付いていないのか、うんうんと満足そうに頷きながら彼女は続けた。

「もし俺がテニス部に入っていなかったら、また違う未来になったんでしょうか」

「それは無理だ。君が道を踏み外そうとしてもいくらでも私は日の当たる道に戻してやる。全力を尽くしてな」

「……どうして、そこまでして俺のことを気に掛けてくれるんですか」

彼女は俺の言葉を聞いた後、一呼吸おき笑みを浮かべながら答える。

「私なりの愛だよ。愛」

はーるのーこぼれびのー

いつかどこかで聞いたような音楽が頭のなかで流れ出す。

この破壊力は不味い。生徒と先生のアバンチュールに走るまでである。

が、相手は酒臭い、相手は酔っぱらい、相手は三十目前、相手は教師……

よし、大丈夫。

「飲みすぎたんですか先生。それに、そんな重い物要らないです」

「ぐはっ」

がくりと崩れた後、彼女はコンビニでお酒を買いヤケ酒だとばかりに飲み干す。

人通りの少ない公園に近づくと、占いという何とも怪しげな看板を掲げた露店を見つ

けた。

「比企谷、ちょっと寄ってみよう」

何やら妖気をまとわせ、無駄に説得力がありそうな場所だった。

フードで顔を見ることは出来ないがこんな妖気を無料で垂れ流している人物の占い

が当たらないわけないと考え、自然と俺の脚もそこに向かう。

「あなたはどうかやら真面目で才能もおありのようです」

フードの慧眼に脱帽した。

「しかし、このままではあなたは伴侶に巡り合えず、結果、イニシャルがH・Hの男性と

将来を過ごすことになりましょう。愚腐腐」

脱帽した後にはうのものなんだが、なぜに野郎なんだ。

自分の未来に戦々恐々としつつつつ訪ねる。

「そんなことつてあんまりじゃないですか。何か救いは無いんですか」

「その未来を変えたくば、好機を逃さないことです」

「好機？」

「光る玉です。それが好機の印、好機がやってきたら逃さない事。その好機がやってきたら、漫然と同じことをしては駄目です。思い切つて、今までと全く違うやり方で、それを捕まえてごらん下さい」

光る玉に心当たりを求めようとするが、全くもって記憶にない。あるとすれば7つ集めて龍を呼び出すあれぐらいであり、そんなものをもし集めることが出来るのなら眉目秀麗、才色兼備、完璧超人のような乙女とくんずほぐれつのスクールライフを繰り広げられるだろう。

いや、完璧超人はネプチューンマンではなかったか。

隣で聞いていた彼女によってその下らない考えは隅へと追いやられる。

「私は、私の、私の好機の印とやらはいったい何なのだ」

「もうありません。独りです」

「ぐはっ」

本日二度目の崩れ落ちは、それはそれは見事なorzを描いていた。

「良いですか、光る玉です。好機はそこにごぎいます。努々お忘れなきよう」

樋口さんを召喚しその場を去ると、隣から何やら声がする。

「ふふっ、ははっ、フウアーハハハッ。いいじゃないか独身だつて……合コンに失敗したついい……うっぷっ」

テンションが上がったのか大声を上げた反動で、先生はその場でうずくまった。

「だから飲みすぎだつて言ったんですよ」

背中をひとしきりさすった後、タクシーを呼んで先生を家へ帰した。

七話

試合当日、その日は午前中から慣らしや休憩を入れて一人四試合ほどをこなして四時頃解散というスケジュールになっていた。

他校との交流試合ということで、オラワクワクすつぞといった戦闘民族のような感想を抱いたことは否定しないが、そのあとのことを考えると腸が煮えくり返るようで、むしろ宴会のことか！と髪の毛を逆立てて叫びたいところだった。

そして今は、午前中の二試合を6―1、6―0で勝利して昼の休憩を挟んでいる最中だ。

高校という低いようで高い垣根を越えて互いに談笑しながら昼食を摂っている人達を横目に俺は一人、目に着きにくい離れた場所でパンをかじっていた。

材木座は何やら用事があるらしくこの場に居ないが、居たところで野郎二人で顔を突き合わせて黙々と昼食を摂るのも奇っ怪な光景に違いなく、その事を考えたら一人で良かったと言えるはずだ。

「八幡。こんなところにいたんだ。もう、探したんだよ」

デザートにカウントしていいか分からない菓子パンをマツ缶で流し込もうとしている時に、小走りで走ってきた戸塚が声をかけてきた。

「ああ、戸塚か。二試合目は残念だったな」

戸塚の二試合目は5―5まで粘っていたが、体力に限界が来て精細を欠き最終的には5―7で負けてしまっていた。

可愛さでは向こうの女子テニス部に6―0で勝利していたが。

練習試合とは言え、負けたことが相当悔しかったのか、試合後の挨拶の時に目に涙を浮かべながら話していたのを見て、仇を取ろうと自分の中で決意をしたのは秘密だ。

「うん。もつと練習しないとだね」

苦笑いをしながら言う戸塚に「安心しろ。仇は取る」と胸をはりながら大仰に答える

と

「ふふつ、なら期待しておくよ」

と漸く戸塚の顔に笑みが戻った。

「毎年、三年生しか試合に出れないけど、来年は八幡も材木座くんも居るからきつといいところまで行けると思うんだ」

「まあ、テニヌを使う奴とか、全国区の奴とかに当たらなければ多分勝てると思うが」

王子様のなあれに憧れた時期というのも有ったが、テニス部に入って本格的にテニス

を始めるようになってあれは無理だと確信を得た。というか序盤の方の技ですら再現が無理だった。

なんだよスーパーライジングショットって、もっとクルム伊達先生を見習えよ。今はクルムじゃ無かったな。

まあ、テニスは論外としても俺が一体どのくらい強いのかは分からない。練習試合や交流試合で当たる人達是对して強くないが全国区の間がこの程度というのはあり得ないだろう。

どちらにしても今の状況は井の中の蛙と言えらると思う。

「後、一年近くあるから僕も強くなって、そしたら僕と八幡と材木座くんで三勝すれば全国だつて行けるかもしれないよ」

「……なら、戸塚が諦めない限り俺は負けない。そうすれば全国だろうと何処だろうと一緒にしようぜ。まあ、材木座はどうか知らんがあいつは放つといても大丈夫だろ」

そういうと何故か戸塚の頬に紅がさして、腕を後ろに組みながら俯いた。

その様子を見て、あれ、これ双子野球マンガ的なやつじゃね。と気が付いた。

いけんじゃん。いつてしまえ。とどこからか聞こえてくる材木座らしき声を幻聴し、いや、いつちゃダメだろ。生物学的に。と一人ツツコミをしていると

「うん！約束だからね」

戸塚は上目遣いで花は開くような笑みを浮かべた。

「ああ、約束する」

○

戸塚の応援を受けた俺はもちろん総武高の鬼神のごとき活躍で全勝を飾った。すると彼らは、少しにやけているようにも見える顔で、そそくさと去って行き、それがまた俺のイライラを助長させる結果になっている。

刻一刻と迫る復讐の刻限に思いを馳せる。もう自分をいぢめるのもお終いにしなきゃならないのではないかと思ひ始めた。

テニスに縋りつくことで、自分の現状を変えられるのではないかと思ったのだ。

でもそれは、結局なんにもならずむなしさだけが残ったが。

午後五時半、ボケツと立ち尽くす俺のもとへ、材木座がやってきた。

「さつき振りだな。あいかわらず腐った目をしている」

それがこいつの第一声だった。

「お前も、相変わらず妖怪と間違える容姿をしていてなによりだ。それよりも用意はできたか？」

材木座は手にぶら下げたビニール袋をかすかに揺らして見せた。青や緑や赤といっ

た毒々しい色合いの筒がいっぱい飛び出していた。

「よし、じゃあ行くか」

最初こそ足取りも軽く、材木座の後を意気揚揚と歩いて行つたが、足が進むにつれて先日平塚先生に会つたことや昼休憩時の戸塚の事を思い出し、俺の中の良心がむくむくと出てきた。

「なあ、本当にやるのか」

「お主、先日はあんなに乗り気ではなかつたか。それに天誅なんだろう」

「もちろん俺はそのつもりだけでも、他の者からしてみれば、ただの阿呆の所業だろ」
「世間を気にして自分の信念を曲げるといふのか。我が共に歩んできたのは、そんな人間ではないわ」

唾をとばし身振り手振りを交えて、奴の説教は続く。

これ以上ほつとくのも面倒なことになりそうなので、材木座の講釈を遮つて言つた。
「わかつた、わかつた。やればいいんだらう。やつてやるよ」

こいつの下劣な品性を軽蔑しながら、敢えて一步を踏み出す。

○

俺らは木陰に隠れながら三角州で宴会を開いている男女に近い川岸に位置取ることにした。青いシートを広げ、笑いながら戯れている彼らの姿がよく見えるようになって

いる。

その中には、俺が先の試合で、6―0でくだした人々もいた。

試合に勝って勝負に負けるといふ言葉が一瞬よぎるが、そういうことでは無いはずだ。不埒な悪行三昧の無知蒙昧な彼らに鉄槌を下し、物事があるべき所に落ち着かせるのだろう。と頭を振り気合いを入れ直す。

別に戦いという訳じゃない。勝負じゃなく、天誅なのだから負けるとか勝つとかは無はずだ。それなのに、沸いてくるこの人恋しさはどうしろというのか。

葛藤を練り広げながらも外面に出す訳にはいかず、打ち上げ花火を並べているのをポーツと眺めている間、材木座は中二病御用達アイテム、単眼鏡を取り出し眺めている。

「わらわらと集まっておる。まるで人がごみのようだ」

「その中には戸塚もいるんだろう。戸塚は天使であつてゴミではない、訂正しろ」

「う、うむ。すまない」

「しかしなんだな、よく戸塚もこんなしょうもないのに参加するよな。俺なら絶対に参加しないのに」

材木座からひったくった単眼鏡を覗くと、土手の上で笑いながらジュースを飲んでいゝる戸塚が見える。

もう今日は戸塚を眺めているだけでいいのではないか、とも思ったが他校の野郎が戸

塚に絡んでいるのを見て、先程までの葛藤が嘘のように消え去り怒りに我を忘れた。

「材木座、今すぐ戸塚の隣にいる阿呆野郎の顔面にぶち込むぞ」

「それじゃあ、戸塚嬢にも当たってしまうではないか」

「そんなもん戸塚への愛で玉が勝手に避けてくまでである。今やらずしていつやるんだ」

「お主は、そんな阿呆な能力持っていないだろう」

こうしている間にも、あの阿呆野郎の毒牙にいつ戸塚がかかるかわからない。

「せめて副部長が来てからにしたらどうだ」

「そういえば、なぜあいつがいない」

「奴なら食材の調達に向かったはずだな」

「構わん。あいつだけでも亡き者にしてやる」

しばらく押し問答が続いた。

確かに材木座の言うことも一理あると我慢をしていたが、許しがたいことに、いくら待っても副部長は来なかった。宴会場では皆が楽しげに騒いでいる。

「こんなことなら、我もあつちに混ざればよかった」

夏には少し早い日、日が暮れても熱気があるにも関わらず冷々たる気分になり黙っていると、訳のわからない供述を材木座が言い始めた。

「お前だっけ呼ばれていなかったんだらう。そんな奴が参加したところで、あれこんな

奴呼んだっけ。とか言われて変な空気になるのが落ちだぞ」

「いや、実は我も誘われてたんだ」

「なにおう、この裏切り者が」

何故かドヤ顔を披露してくる材木座に対して、他称腐った目で精一杯睨みつける。

「そんなに怖い目で見ないでくれ」

「お、おい、くつつくな」

「だって寂しいじゃないか。それに夕風が冷たいの」

「このさびしがりやさんが」

「きや」

長い待機時間。川向こうから和気藹々と聞こえてくる声。それに加えて熊の妖怪と木陰で意味不明の寸劇をすることに虚しさを感じ、むしろその虚しさこそが俺たちの堪忍袋の緒を切った。

副部長の姿は見えないけれど、こうなれば仕方ない。

俺は勢いよく立ち上がり、宴会をしている群衆に向かって大声を張り上げた。

「やあやあ皆の衆。突然で悪いが、これから復讐を始めさせてもらう。くれぐれも目には注意」

「腐った目をした者が言うと言説得力が違うな」

「ええい、ちやちやを入れるな」

大声で口上をして、宴会をやっている人々を睨み回した。ぽかんと阿呆のように口を開けた面々が「なんのこつちや」というようにこちらを眺めている。

なんのこつちや分かなければ、分からせてやるまでである。

ふと、三角州の高い位置に座っている戸塚の姿が目に入った。

彼は

「あ」

「ほ」

とにっこり笑い、木の向こうに身を隠した。

戸塚が避難したとなれば遠慮する必要はない。

俺は配下の材木座に砲撃の命を下した。

材木座は嬉々とした様子で固定してある打ち上げ花火やロケット花火に点火し、次々に飛んでいくカラフルな弾をにやにやと気色の悪い笑みを浮かべながら見守っていた。

本来打ち上げ花火という物は夜空に向かつて打ち上げるものであり、決して手に持ったり人に向けたり川向こうで和氣藹々と宴会を開いている人達に爆撃をする物ではない。

どこぞの国では新年を祝うためであったり、祭りの時に爆竹やロケット花火を人並びに建物に向けることもあるらしいが、祭りでもない日に心の準備も出来ていない人に対して使う用途は説明書にも書いていない。

ひとしきり花火を打ち終わった後、ぎやあぎやあと騒いでいる宴会場をしり目に、颯爽と逃げ出すつもりであったが、怒り狂う部員たちがこつちへ追ってきたので、俺は慌てた。

「わっはっはっ、絶景かな絶景かな」

隣では材木座が未だにトリップしながら、花火の準備をしている。

「逃げるぞ」

「まだ花火が残っているではないか」

「んなもん放っておけよ」

俺達は未だ手付かずの花火を投げ棄て、千葉の町へと駆けだす。

「よくもこんなしょうもないことをしてくれたなあ」

と後ろから副部長の怒鳴り声が聞こえる。

よりによって、しょうもないとは良く言ったものだ。人に怒る前に先ずは自分の事を見つめ直した方がいい。

だが、それを説いたところで、少数派は多数派に飲み込まれるのが世の常、マイノリ

テイの虚しさを抱えながら戦略的撤退を余儀なくされる。

すぐ隣で花火の弾ける音がする。

報復のために誰かが花火を打ち込んできたらしい。

あの体躯で逃げ足だけはいいい材木座の背中を見ながら走り続けた。

八話

あの事件の後、テニス部に戻ろうにも戻れず自主休部状態になってた俺と材木座は、半ば自棄になりテニス部内の赤い糸を切つて切つて切りまくつた。

材木座好みの恋の修羅場が炎上するような環境にしたとき、俺らは黒いキューピッドとしてテニス部だけでなく学校内で有名になった。

学校内での活動が難しくなった俺達は千葉県の高校にまで手を伸ばし、その活動はワールドワイドにまでおよんだ。

東に恋に悩む乙女がいれば、あんな奴は止めとけと囁き

西に恋に悩む野郎がいれば、意中の女性に先に告白するという一見無駄なこともした。

南に恋の火花が散りかけていけば、ありつたけのMAXコーヒーにて鎮火をしに行き北では、常に恋愛無用論を説いた。

つまりは、八つ当たりをして近辺を回つた訳である。

その結果、恨みをもつた彼等に追い回され、最終的には〈印刷所〉のメンバーらしき統率された人間達にアクアラインまで追いかけられるはめになり、成田山付近のまんが

喫茶で息を潜め、夏休みを利用してほとほりを冷ました。

その後テニス部に戻った俺達は、恋の邪魔者の名を欲しいままにしていた。

地の文を読んで頂いている奇特な諸兄等は知っていると思うが、俺は今まで打つべき布石を尽く外し、打たなくてよい布石を狙い澄まして打ってきていた人間である。

そんな人間に社交性を期待することは甚だ疑問なのだが、材木座に会ってしまったお蔭で、間違った社交性と行動力を身に着けることに残念ながら成功してしまった。

よって、八面六臂の活躍をし、材木座と共に恋の邪魔者の不名誉な称号を得ることができたのだった。

この行為によって俺たちは多くの敵を作った。しかし、俺は負けなかった。負けることができなかった。あの時負けていた方が、きっと俺もみんなも幸せになったに違いない。

材木座は幸せにならなくてもよい。

○

その日、サイゼリアへと繰り出したのは、材木座の提案だった。

久しぶりに出たテニス部で材木座が「辛味チキンが食べたい」と繰り返すので、俺の口の中も辛味チキンの口になってしまい、サイゼリア分を補充することに決めた。

ドリンクバーでミルクと砂糖をたっぷり入れた特製コーヒーを作って飲んでいると、材木座はまるで人を食べている喰種を目撃した捜査官のような目つきをした。

「よくもまあ、そんな気色の悪い甘い飲み物、口にするな。底の方なんか砂糖でドロドロ、軟体だぞ。まるで泥のスライムみたいだ」

「なら、お前もスライム倒して経験値手に入れとけ」

マツ缶を馬鹿にされたみたいで腹が立ち、そのお返しに材木座の飲んでいたコーヒーにこれでもかと砂糖を入れてやった。

特性のコーヒーを口に入れた瞬間、お口直しと言いながら水を取りに行こうとする材木座を無視しエスカルゴのような何かに取り掛かっていると、ふと平塚先生と猫ラーメンを食べた帰りに会った占い師の言葉を思い出していた。

「光る玉なあ」

とひとり呟く。

「なに一人でぶつぶつ言っているのだ」

水を二人分持つてきた材木座が聞いてくるが、あまり答える気になれず考えていると「どうせ成就しない恋の悩みでも考えているのであろう」と材木座は低俗な決めつけ方

をした。

「不埒不埒」

壊れた時計のように繰り返し、思考を邪魔してくる。

俺が怒りに任せて特製コーヒーを口の中に注ぎ込むと、ごぼごぼと音をたてしばらく静かになった。

光る玉なんぞに思い当たる節などないが、すでにどこかであった出来事かもしれない。

そう考えていると言いいられない不安に襲われた。

店内は賑やかで、学校帰りの若者や家族連れなど様々な年代の人々がいた。なかには、四人席をくつつけて騒いでる学生達の姿もあった。

もしかしたら、あのように大勢の中で笑い合っている可能性だってあったのかもしれない。

「もう少し、ましな高校生活を送れたのではないかと思っっているのか」

甘い甘いと言いながら俺の前に置いてあった水までがぶ飲みした材木座は、材木座のくせに核心を突くようなことを言う。

「当たり前だ。お前がいなかったら俺の心はもつと綺麗なまま、友達は百人出来て黒髪の乙女との学生生活を送っていたまでである」

「そんなことは無理だ。どんな道を選んだってこうなっていたであろう」

「んな訳無いだろうが」

「いいや言いきれぬ。どんな道を選んでも我が全力でちよつかいをかけてやるからな」

「どうしてそんなに俺に絡んでくるんだよ」

呆れながら呟いた言葉に対して、材木座はその言葉を待っていたとばかりに意地悪く、にやりと口角を上げ、たつぷり2秒ほど時間をかけた後、口開いた。

「我なりの愛というやつだ。ふっふっふっ。貴様には、運命の黒い糸が至るところに張り巡らされているんだからな」

俺と材木座がドス黒い糸でボンレスハムのようにぐるぐる巻きにされて、暗い水底に沈んでいく幻影が脳裏に浮かび戦慄した。

「俺は忍者屋敷かなんかかよ。御免被りたいね」

「それに、我でなくとも誰かが貴様を全力でダメにする」

「無駄な愛され体質もいらん」

出来ることなら放っておいてもらいたい。それができないならばせめて黒髪の乙女に構ってもらってダメにしてほしい。

なにそれ最高じゃん。

「で、結局、戸塚氏はどうなのだ」

黒髪の乙女に構ってもらつてダメ男になる妄想をしていると、ミラノ風ドリアをやつつけていた材木座が唐突に話題を変えてきた。

「いやどうつてなんだよ」

「あれだけ、氣立てのよく、真面目で阿呆なことにも笑つてくれる逸材だぞ。それに何時も言っているではないか。戸塚氏は天使だと」

「だが、男だ」

そう、だが男なのだ。

最初、彼をテニス部で見つけた時は、我が世の春が来た。と部屋の中で小躍りして、小町に煩いと言われたが、男だと知った日は逆に沈みすぎて小町に心配されたまである。

「確かに戸塚は、ふはふはして、繊細微妙で夢のような、美しいものだけで頭がいっぱいな黒髪の乙女とも見えなくもない。男でなければ……乙女であれば……」

「男か女かを選べる立場か」

「選べる立場だよ」

さすがに、それくらいは出来ると思いたい。

ここまで材木座と色々話してきたが、普段から黒いキューピッドとして毎日顔を合わせている為、基本的に俺と材木座の間には話題がそこまでない。

俺が口下手という訳ではなく例えば、『今日登校時に見た猫がかわいくって思わずシヤメ撮っちゃった』といった会話を野郎二人でしているとところを想像してみてほしい。

それは身の毛も弥立つ光景であること請け合ひであり、一部の方々からは積を求める計算になってしまう可能性もある。

そんな噂は本当にノーサンキューである。もしされた日には子々孫々に顔向け出来ないままである。

比企谷家はお前で終わりじゃん。なんて言葉もノーサンキューである。

そういうえば、占い師が好機云々の前に野郎と将来を過ごすかどうかのこのとか言っていた気がしたが、今の状況はまさしくそれではないのか。

いや、でもまさか。そもそもこいつはY・Zだしな。

しかし、万が一フードの占い師が千葉の母的なよく当たる占い師だったらどうしよう。ただならぬ妖気を垂れ流しにしていたようにも感じられたし。

と思考のループに陥っている内に、さっきまで前に座っていた材木座がないことに気付いた。トイレに行くとか行つたきり、帰って来ていない。

途中でふらふら抜け出すのは奴の十八番だということを忘れていた。

また、俺が夕飯代の清算をしなくちゃならないのか。

「あんの野郎……」

たらこスパゲッティをくるくると巻き、不貞腐れていると、ガタリと前の椅子を引く音がした。ようやく材木座が帰ってきたようだ。

「なんだ。逃げたんじゃないんだな」

ホツとして向かいに座った人物を見てみると、材木座じゃなかった。

「よく分からないけど、時間がないよ。早く食べよう」

目の前に座ったのは戸塚で、材木座が手を付けなかったサラダを食べ始めた。さつきまで戸塚の話をしていたからといって、材木座が戸塚に見えてくるとは症状としてなかなか危ない状況だろう。

「遂に変化の術を体得したのか？戸塚にそっくりだな」

「なに阿呆なこといつてるの？」

ぷりぷりと怒る姿は360。どこからどうみても戸塚だった。

「な、何で戸塚がこんなところに居るんだ」

「コンテニス部の溜まり場だよ」

確かに、学校から一番近くて学生の味方であるサイゼリアが溜まり場になるのは分かるが、部活終わりに来なくてもいいだろう。

もしや、これがあの有名な友人と帰り道に取り敢えずサイゼというやつか。

「練習の後、八幡達いつも直ぐ居なくなるから分からなかったと思うけど」

「じゃあ、もしかしてあの副部長達も来るのか」

「うん。多分、後五分ぐらいで」

こうしてる場合ではない。戸塚と話していたかったが、今は部活外、流石に部活中になにかをしてくる奴は居ないが、今俺を見かけたら奴らは俺をアクアラインを支える人柱にしかねない。

「もう支払いは済ませて、店長とも話はあるから裏口から早く逃げて」

「サンキュー戸塚。愛してるぜ」

戸塚はクスツと笑った後

「はいはい、それより約束忘れないでね」

と言った。

不本意ではあるが、戸塚との約束を全く思い出すことができない。

「デートの約束なんかしたっけ」

「ううん、何でもないんだ。その代わりに明日のお昼休み練習に付き合っつてよ」

寂しそうな笑みを浮かべた戸塚を見たら何がなんでも思い出さなくてはこの気にかられたが

「ほら、早く避難しないとみんな来ちゃうよ」

との言葉で、後ろ髪引かれる思いをしながらサイゼリアを後にした。

九話

翌日、俺は戸塚との約束の代わりを果たすため、昼食を取らずにテニスコートへと向かった。

一日悩んでいたが、約束は結局思い出すことができなかつた。

お陰で少々寝不足だが数学の授業中に取った睡眠で頭の重さも改善された。

いざ、テニスコートに着くと何やら揉めている様である。

何時もなら、揉め事とあれば団扇を持ち、扇いで炎上させる俺だが、流石に戸塚が居るところでそれは出来ない。

出来るだけ穏便に済ませようと声をかける。

「どうした戸塚」

「あつ、八幡。ええつとね」

「だから、別に邪魔するって訳じゃないんだから良くない」

戸塚に詰め寄っていた金髪の女性の目がぎらりと光る。

そんな彼女を宥めるかのように、彼女の肩をとんとんと叩くどこかいけすかない男。

それに、取り巻きが何人か。

どこかで見たような気もするが、思い出せない。

首を捻りながら唸っていると戸塚が耳元で助け船を出してくれた。

「ほら、同じクラスの三浦さんと葉山君だよ。それに海老名さんとかもいるよ」

「……ああ、そういえばいたな」

前は部活動、今は人の恋路の邪魔と千葉県の高校生の闇討ちから逃げることで頭が一杯だったので、教室内の事は殆ど分からないが、確かに教室でわいわい騒いでいた連中だった。

「これから八幡と練習するって言ってるんだけど、ここで遊びたいんだって」

つくづく面倒臭い連中である。リア充死すべき慈悲は無し。

普段なら塩で撒いて溶かしてしまおうかと言うところだが、しかし今は戸塚の前、紳士的な対応を心掛けよう。

決して戸塚に良いように思われたいとかそういうことではない。

「えーと、悪いな。今から戸塚と練習するから他を当たってくれ」

「だいじょぶだって、あーしたちも手伝うし」

「いや、そういうことじゃなくてだな。効率とか色々あんだろ。それに、ここは戸塚が許可取った場所だから他の人は無理なんだ」

「なにそれ、あんただって許可取って無いじゃん」

「許可云々の前にテニスは独りじゃできないだろ」

「じゃあ、あーしらが居たって別によくない」

ダメだ。話が伝わらない。この手の阿呆には、うえーい、ばなくね、マジで、といった少数の単語で会話が成立するニュータイプが一定数いる事は知っていたが、ここまで話が噛み合わないのはアンジャッシュだけで充分だ。

「まあまあ二人とも熱くならず。それにみんなでやった方が楽しいじゃないか」
爽やかイケメンが間を取り成す風の事を言ってきたが、どこかちぐはぐな印象を受けた。

波風をたたせたたくないのか、皆で並んでゴールしたら一等賞なのかは分からないが、どちらにしろこの男はリア充とっていいだろう。

ならば、リア充死すべき慈悲はなし。

「じゃあ、はつきり言うぞ。皆とかはいらない。お前らは俺より弱いから話にならない。練習の足を引つ張るだけ。以上」

そう言った途端、三浦さんの目尻はつり上がり怒っている事が手に取るように分かり、葉山も苦笑いを浮かべているが目は笑っていないかった。

戸塚にいたっては、おろおろと辺りを見回している。

「はあ、ちょっと弱小高校のテニス部エースだかなんだか知らないけど、あーしらバカに

しすぎじゃないの。こう見えても昔、県選抜だったんだけど」

「俺も、今の言葉は取り消して欲しいと思う。確かに君と比べたら弱いだろうけどだからと言って戸塚君の練習に全く貢献できないなんてことはないはずだから」

「知らねえよ。そこまでいうんだつたらかかつてかこいよ。これで負けたらもう邪魔すんじゃないぞ」

我ながらこんな強い言葉でよく挑発をしたもんだと驚いたが、考えてみればアクアラインまで追い回されたり、赤い糸を切つて切つて切りまくつた時に比べたら対したことはないと開き直つた。

「あーし達が勝つたら、コートを使わせること。それでいい?」

「勝てるんだつたらな」

勢いで言つてしまい、何故か戸塚との練習初日はダブルスでの試合形式となつてしまった。

「つか、隣のコートの使用許可とつてくればよくなるよ」

とか何とか聞こえたけど売り文句に面白い言葉、いまさら後に引けるか。

○

娯楽に飢えている高校生達、彼らの嗅覚は流石と言うもので、昼休みも序盤を過ぎた頃にも関わらず、葉山がテニスの試合をすると聞いてどこからかわらわらと沸いてきた

観客が歓声をあげている。

「葉山がテニスの試合するってマジ？」

「葉山くん頑張ってる」

「負ける比企谷」

「戸塚くん。今日も可愛いよ」

「比企谷、調子に乗んな」

「馬に蹴られる。然る後くたばれ」

俺への罵詈雑言も混じる聞こえてきて完璧アウェイの中、試合は始まった。

昼休みということもあり、形式は5ゲームマッチの3ゲーム先取。

どっちも前衛と後衛が左右に別れてポジションニングをする基本的な雁行陣となっている。

三浦さんのサーブから始まり、強く叩きつけられたフラットが俺の方へと向かってくる。

ダブルスはシングルスと違い、一人がカバーする範囲が狭いと思われるが、その実、後衛にいる人間の役割はとても重要である。緩い返球に成れば相手前衛に叩かれ、向こうが返してくる玉にどこまで味方前衛が対応出来るのかを考え、場合によってはカバーしに行かなくてはならない。シングルスでは経験することのない、味方前衛の力量や限界

の把握と隙間を埋めるように玉を打つ技量が必要になる。

この二人にそれが出来るほどのコンビネーションは無いとたかをくくり、適当に左右に振れば着いてこれなくなるだろうとネット際に出てる葉山の横を抜いたりしながら三浦さんを疲れさせようとしていた。

けれど三浦さんは確かに県選抜を自慢していただだけの事はあり、しっかりと着いてきていた。

葉山は葉山で、甘めのトップスピんがかかった球ならボレーを決めにくいこうとする事ぐらいは出来るので、三年の弱いテニス部員になら勝てる実力はあるのだろう。

戸塚もボレーにくいこうとするが、三浦さんの打つ弾道が低いスライスになつているせいで手を出しあぐねていて、暫くラリーが続いた。

それでも葉山の横を強めのトップスピんをかけたダウンザラインで決めたり、三浦さんの方にドロップ気味のボールを打ち、甘くなつた球を戸塚がポーチで決めたり、相手のポジションチェンジの隙に逆クロスで決めたりと2ゲームをこつちが先取することが出来た。

その頃になると試合を見ていた賑やかしの奴らも静かになつてきていた。

「思つてたより強いな君は」

「当たり前だ。俺にはこれしか無かつたんだから」

「でも、みんなでやった方が楽しいだろ」

「黙っとけ」

葉山と短く言葉を交わし、休憩を終えコートに戻る時、戸塚が俺の背中を叩いてきた。

「やっぱり八幡は阿呆だよ」

「いきなりどうした」

「僕とテニスしてもつまらないかな」

そういつてはにかむ戸塚に答えられず、ただ

「……勝とうな」

とだけ言った。

○

三浦さんのサーブで3ゲーム目に入ったが、葉山の立ち位置がサービスラインより少し後ろへと変わる。

30—30まで試合が進み、ラリーをしていくうちにベースラインにいた三浦さんがサービスラインへと上がっていった。葉山はベースラインの方へと下がるフォーメーションになる。

葉山の横を抜くダウンザラインを警戒したのかも知れないけど、前に出てこないならそれはそれで都合だ。

このコートを使っているのは阿呆ばかりのテニス部員達。当然、クレールコートの整備なんて適当に済ませているからネットの近くまでローラーを掛けることはしていない。

結果、ちよつとした凹凸が生まれて、そこにボールを落とせば

「跳ね……ない」

名付けて俺式ドロップショットの完成だ。

「マッチポイント」

いつの間にかに観客に混じっていた材木座が叫ぶと、始まったころの様な暴言ではなく歓声が響いた。

三浦さんがサーブを打ち、戸塚がりターンをする。

戸塚と三浦さんのクロスでのラリーが続くが、三浦さんがライジングでボールを取り、前衛気味の葉山とポジションを交換する。

ストロークが葉山に変わり、甘くなったボールをサーブスライン上で柔らかく返す。

狙いは葉山が前に走れば届く、三浦さんも横に走れば手が届く様な所で、だからこそ両者とも見合わせて反応が遅れる。

サーブスライン上の三浦さんが咄嗟に手を振り出して返そうとしたボールは、フレーム部に強く当たり空高く舞い上がる。

上を見上げるが玉が逆光になって、眩しさに目を細める。

『光る玉が好機の印。思いきって捕まえてご覧なさい』

これが、その好機の印なのかもしれない。

捕まえようと、ラケットを持っていない左手を伸ばす。

今まで煩いぐらいに聞こえていた歓声も遠くなり、心臓の音だけがやけに大きくなる。

近付いている筈の、玉と自分の距離が引き延ばされていく。

手を伸ばした左手が、何時ものスマツシユを打つときの体勢に変わり、足は地面を離れ、右手が空を断ち切る。

なんだよ、俺って結構テニス好きだったじゃねえか。

黒髪の乙女に応援されようとされまいと、関係無かつたな。

と、気が付けば眩いていた。

きつと他の人から見たら俺の顔は、にやけていたと思う。

○

ボーツとした意識が現実に戻されたのは、歓声でなく悲鳴だった。

向かいのコートを見ると、耳を押さえながら横になっている葉山、隣でしゃがみこみ啞然として三浦さんがいる。

何があった。何が起こった。

最後に俺がスマツシユを打ち、葉山が倒れている。

現状に思考が付いていけないのか、頭がぐるぐると回る。

しかし、そんな簡単に答えが出る問題なのに、何を言っているんだ。と俺の中の冷静な部分が告げる。

怪我をさせた。

いきなり風が吹いて違うところに当たった？

眩しくて目を細めたから？

無意識の内に打ってしまったから方向がずれてしまった？

好機を間違えた？

それとも、どこか片隅でこうなつてほしいと望んでいたから？

そう気づいてしまったら、さつき呟いた言葉ですら汚く思えた。

今まで散々と人の恋路の邪魔やら色々としてきたが、ことテニスにかんしてはなんだかんだ真面目にやつて来たつもりだった。

それだけが、数少ない取り柄であり、自身への支えになつていたはずだった。

とりあえず葉山に近づかなくては、とよろよろ近付く。

ネットを挟んで三浦さんが睨み付ける。

「最低」

三浦さんの口調は詰問に近く、言おうとした言葉を飲み込ませるのには十分だった。

「うわ、あれは無いわ」

「ちよつと凄い奴だと思つたのに」

「そこまでするかよ普通」

「所詮、嫌われ者だしな」

ひそひそと声が聞こえる。

さつきまで、前後左右に打ち分けていたこともあり、観客もわざと葉山に当てるように打つたと思つているのだろう。

もう何を言つても無駄だ。

どうせここで駆け寄つて謝つたとしても白々しいとしか思われない。

それは、きっと自分の心すら騙しているのかもしれない。

そう思つたら何も言えず、ただ葉山を見下ろすだけだった。

「わざとじゃないんだろう。君がこの試合でそんなことをするようには見えなかつた」

ふらふらと立ち上がり、三浦さんに支えられ

「また今度、戸塚との練習じゃないときにでもやろう」

そういうと、三浦さんに肩を持たれながらコートを出ていった。

「……悪い、戸塚。練習はまた今度な」

「元氣だしてね。僕もわざとじゃないって分かってるから」

「ああ、サンキューな」

嫌われる事は慣れていると思う。

ただ、自分をここまで嫌いになったことは、今までなかったとも思う。

自業自得、身から出た錆。

それを悲しいとも悔しいとも思わないけれど、葉山と戸塚の言葉が頭でリフレインしていた。

○

この出来事以降、俺自身なにか変わったかと言われればなにも変わっていない。

その代わり、回りが目まぐるしく変わっていった。

葉山は少し鼓膜が傷付いたらしく全治1ヶ月。その間は部活を休むそうだ。

高校生にとって1ヶ月は意外と長い。体は鈍るし最悪レギュラーの入れ替えだつてあり得る。

時たま申し訳なさそうに俺と戸塚を見る葉山の視線を感じる度、複雑な気持ちになる。

観客の証言で、故意にエースを怪我させてしまったことになってしまい、それにサツ

カー部の顧問が激怒し、テニス部の顧問は一応の対応として俺と戸塚の一週間の部活動禁止を言い渡した。

このままフェードアウトしていくつもりだ。

正直、恋の邪魔者の称号を得てから部活動に出辛くなっていたこともあるが、今はボールも見たくなかった。

その中でも変化が激しかったのが、戸塚彩加の環境だろう。

最初は俺がいる所に偶々一緒にテニスをしていたら俺が葉山に怪我をさせた。というものであったが、噂は尾ひれを付け、俺と一緒に葉山を怪我させたと変わっていった。このままでは戸塚まで叩かれる対象になってしまう。それだけは避けなければと、全ては俺が意図的に仕組んだもので戸塚は関係ないという噂を材木座に頼み込み流してもらったため一度は沈静化した。

問題はその後。

何故か戸塚は事あるごとに俺に構うようになっていた。

○

「はあ」

「どうしたというのだ八幡。幸せが逃げるぞ」

「お前、本当に溜め息をつくとき幸せが逃げるとでも思っているのか」

「まさか、もしそれが本当ならば我は今頃行き交う乙女達の桃色吐息と幸せを片っ端らから吸い込んで、総理大臣にでも成っているだろうな」

何時か聞いたようなやり取りをしながら、総武高へ続く道をつらつらと歩く。

「戸塚がさ、あまり俺に構うなって言っているのに教室内でも俺にべったりしてくるんだよ」

「いいことではないか、蜜月というものであろう」

「いいわけがあるか、おかげでせっかく流した噂だつて疑われているんだぞ」

「戸塚嬢が選んだ選択だ。男ならどんと構えておれ」

「俺はただ蔷薇色のスクールライフを楽しみたかっただけなのに、何でこんなことになつたんだろうな」

思えばテニス部に入って最初の頃は、話しかけてくれる人がチラホラといったような気がする。

あの時彼らと仲良くなつていればどうなつていただろうか。

材木座が俺の前に現れなかつたら、花火を打ち込まなかつたら、恋の邪魔者と呼ばれていなければ、練習を違う日にしていれば……

ここ最近、たらればを考えることが多い。

しかしそれでも、人生とは選択の連続である。

何処で間違えてしまった。

責任者は誰だ。

今にして思えばすべてが懐かしい。

後悔や嫌悪感は、俺の名前を呼ぶ可愛らしいソプラノの声にかき消された。

早朝の爽やかな風と、後ろから発せられる心地よい声を吸い込むために息を吐く。

「それはあれだ。戸塚嬢なりの愛ってやつだ」

欲しい気持ちを我慢して

「んなもん、いらねーよ」

と俺を呼ぶ声がある方へ振り向いた。

三畳紀 自虐的代理姉妹戦争

十話

まずこの手記を読むに当たり、必要になるのは登場人物の情報であろうから最初にそれを乗せておこうと思う。

主人公はこの俺、比企谷八幡。頭脳明晰で体格は今流行りの細マッチョ。もちろん運動神経もよい。

人望に優れ、その足取りからは強い意志を感じられる。道行く乙女の視線をかつさり、成田山を歩けば拝まれ、酒々井のアウトレットを歩けば黒髪の乙女に囲まれる程の威光を放っている。

それになりより目が光輝いている。

多少、盛っているところもあるかもしれないが、大体こんな感じだと考えてくれればいいと思う。

大事なのは見た目ではなく、心なのだから。

第二の主役として雪ノ下陽乃がいる。

俺が師匠と仰ぐ大学二年生。眉目秀麗、才色兼備、道行く人が10人中15人が思わず振り返ってしまふような人間で、どこか浮世離れた雰囲気がある。

多い5人分は二度見した人だ。

強化外骨格に覆われていて底知れぬ凄味があり、何処と無く胡散臭い陽気な微笑を浮かべ、その姿は高貴である。

俺と同じ学校に通う雪ノ下雪乃を妹に持ち、俺と同じ学校に通う葉山隼人を弟子に持つ。

何をしているのかの全容がつかめず、片鱗を垣間見る限り相当えげつないことをしていると思われる。

俺は学問そっちのけで彼女の修業に励んだ結果、およそ役に立たない事ばかり学び、人間として高めるべきでないところばかり高め、高めるべきところはむしろ低まつて見えなくなってしまうた。

最後に葉山隼人。

先ほども述べたが、師匠の弟子で、俺の兄弟子にあたる人物。

彼も容姿端麗、頭脳明晰、リア充を絵にかいたような人間である。

気に食わないので以下省略。

それ以外にも多くの登場人物がとりまき、こんな人々に囲まれながら過ごしていくのだが、俺は少々選択肢を間違っていたようだ。

まあ、この手記は俺の部屋の中の最深部に眠っていて無理やり開けようとするとな燃える仕組みになっているから誰も見ないとは思うけれど。

○

高校に入学し俺が退院した頃、既にクラス内ではグループが出来上がっていて、そこには俺の入る余地などなかった。

しかし、薔薇色のスクールライフを過ごすには何もクラスだけではない。部活でのあれこれだつて十分にスクールライフを謳歌できるだろうと意気揚々と俺が選びとつたのはサッカー部だった。

黒髪のマネージャーと恋の試合を一戦交えるのもいい。

もしくは、友達百人出来るのも悪くはないとたかを括っていたが、その俺に現実という刃が一閃した。

サッカー部を選んだのはいいが、他の一年生は誰もが以前中学でサッカーまたは運動部に入っていた者達で、技術的にも体力的にも俺は劣っていた。

ならば、コミュニケーションだとも思ったが、会話のパスが通らない。

こちらがトラップをしようとしても、来るボール全てがキラーパスに見え、気がついたときにはそのボールは通り過ぎてしまった後だった。

円滑なコミュニケーションをとる前に最低限のコミュニケーション能力を違うところで養っておくべきだったと後悔したが既に遅かった。

部活内から孤立した俺はいつしか幽霊部員として籍だけを残したまま、冷えたマツ缶を手には部活からの決別をバスタブプレイスで独り宣言した。

○ これをこの手記では、第一次比企谷独立宣言と言う。

そもそも俺が師匠と仰ぐ雪ノ下陽乃との出会いは今から十か月程前にさかのぼる。

第一次比企谷独立宣言から約一年、宣言をした方がいいが特に日常生活で変わったところはなく、部活、学問、恋人という高校生三種の神器をどこか遠くへ放り投げたままの俺が、早めの五月病にかかっていた頃、二年に上がっても幽霊部員のまま腐っていた俺のことを心配したのか、平塚静という黒髪の教師から

「紹介したい人物がいる」

と言われ、俺は師匠に出会った。

嫌々ながら指定されたところに行くと、えらい美人がそこにいた。

教師が美人局を斡旋する事はないだろうと思いき、声をかけると

「静ちゃんから弟子入りを頼まれたのは君？ふむふむ確かに腐った目をしてるね。なるほどなー」

えらい美人さんは一人納得したように頷いた。

「弟子入りって何のことですか、俺はただ……」

なんのこつちやわからないこつちにとつては、弟子入りの件を聞いたかったが彼女はそれを遮り

「そう慌てないで、私は雪ノ下陽乃。こつちは君の兄弟子の隼人。つて同じクラスだから知ってるかな」

と言つて隣にいる男を紹介してきた。

師匠の傍らに立つている男は、爽やか純度100%のスマイルを浮かべ握手しようとして手を差し出してくる。

マツクのクルーでもそこまで爽やかなスマイルは出来ないだろう。風の噂じゃ男子高校生は友人達と罰ゲームと称して綺麗なお姉さんにスマイル下さい。と言うのがあるみたいだが、その妙味を味わう事はずいぞ無いのだろう。

「サッカー部以来だね。よろしくヒキタニ君」

スマイルから青春の妙味にまで思考が飛んでいた俺に、この爽やかイケメンはサッカー部という禁句を使いよろしくしようとしてきた。

因みにサッカー部が禁句というのは独立宣言に書かれている事項で、破った野郎がいたら漏れなく絶対に許さないリストへの登録がされるが、登録されたところで誰も困らないと言うのが困った点だ。

そういうえば、まだ俺がサッカー部に顔を出していた頃、こいつは部でたまに話しかけていた男のような気がする。

「……うっす」

「まあ、兄弟子と言つてもそんなに日は経つてないけどね」

師匠はそう言つてからからと笑つた。

それが師匠とのファーストコンタクトであつた。

きつと彼女と関わらなければ俺の心はもつと清らかで薔薇色のスクールライフを謳歌できていたに違いない。

○

挨拶もそこそこに何故かそのまま、見るからに高級そうなレストランに俺と葉山は連れて行つてもらつた。

俺の人生の中でこれから行くことはないであろうという場所に、ドレスコードも無視して入っていく師匠はどこか格好良く見えた。

友人との食事というものを知らない俺にとっては、その会食は最初こそむず痒かつた

が、師匠の話術のお陰で、普段からは想像もできないほど話が弾み、つつい中学生時代の布団でばたばたしてしまふような話もしてしまった。

師匠はこの話をえらく気に入ったようで、二次会と称して俺の部屋に転がり込み部屋の中で葉山と一緒に黒歴史の発掘にいそしんだ。

妹の小町からは

「え、うそ。おおお兄ちゃんが男友達に綺麗な女の人を連れてくるなんて、ありえないってばよ」

と御言葉を貰い、しまいには

「分かった。これは月読なんだ。ちよつと小町72時間ほど寝てくるってばよ」

語尾まで崩壊して自分の部屋に籠城して行った。

俺の部屋でも大いに盛り上がった帰り際

「学校では今日のことは忘れて、普段の感じでよろしくね。じゃないとばれちゃうから」と意味深なことを残し去って行った。

かくして俺は雪ノ下陽乃の弟子となり、高校二年生を棒に振るうようになったのだ。

○

師匠と付き合っていくのに欠かせないものは『貢物』である。

それは珍しいものであったり、雑多な情報であったりと、とにかく師匠が喜びそうな

物を持ってくることが弟子としての条件だった。

貢いだ物の中には、精巧な猫のぬいぐるみや巨大なパンさんのぬいぐるみ等と用途不明な物まで含まれていた。

その代わりとして師匠は色々なことを教えてくれた。

強化外骨格の作り方、潤滑な人間関係を保つための社交性の身に付け方、正しい暗躍の仕方 e t c ……

これで分かるように学生の身で身に付けるべきでないものばかり、俺と葉山は身に付けていった。

師匠はいつも無理難題な品物や情報ばかり求める。

しかし、本当は俺たちの貢物を師匠は必要としないような気はした。

その気になれば、どんな事柄でも手に入れることのできる能力や人脈を持っているためだ。

だからただ単に、弟子である俺たちが奔走する姿を見て楽しんでるだけなのではと思ひ、俺と葉山でなぜこんな物ばかり求めるのかと尋ねた所

「私なりの愛ってやつよ」

と返され、2人して顔を真っ赤にしてしまった記憶がある。

そんな師匠に師事しているのにも係らず、俺と葉山のやり方は正反対だった。

人気や人脈、社交性を最大限に使い貢物を手に入れる葉山。

操作した噂やブラフ等の餌を使って貢物を釣り上げる俺。

元から有った学校での影響力をぐんぐんと伸ばしていく葉山。

元々無かった学校での存在を抹消していく俺。

こども差がついてしまつては面白くなかつたが、気が付いた頃には変えることが出来なかつた。

それに何よりダークヒーローって格好良いじゃん。と、そんな事を今も思つてしまうというの、俺はどうしようもない阿呆なのかもしれない。

しかし、俺はこの生き方を曲げなかつた。いや、曲げることができなかつた。

曲げていればもつと幸せになつたに違いない。

○

そんな師匠でも、唯一怖いものがあると云つたことがある。

「私は母親が怖いわ」

「師匠が怖がる人なんてどんな人なんですか？」

両腕を胸の前で組み身震いをする師匠が珍しく、いいネタに成りそうだと突つ込んで

話を聞いてみたが

「昔、会ったことがあるけど、あの人はとんでもないな」

「目的の為ならどんな手段も厭わない。他人が不幸になろうが破滅しようがその隣で優雅にティータイムを楽しむ、鬼か妖怪の類よ」

と葉山と師匠がそれぞれ言う。

話を聞けば確かに怖いが、詰まりは何時もの師匠の事でもある。

血は争えないというか母の教育の賜物で強化外骨格を纏った師匠が誕生したらしいが、俺や葉山からしたらたまたまもんじやない。

「なんだ、いつもの師匠じゃないですか」

そう答えたら、立ち上がった師匠から親指を拳の中に入れた拳骨をコツンと貰った。

「何ですか、その可愛らしい拳は」

「淑女足るもの、のべつまくなしに鉄拳を振るっていたら婚期が遅れるからね。それでも敢えて振るわざるを得ない時は、この『おともだちパンチ』をふるうんだよ」

ほら、と見せてきた拳は招き猫の手のような恰好をしていて某教諭が振るう、硬い握り拳と腰の入った鉄拳とは比べ物にならないほどの可愛らしさをたたえていた。

「親指をひっそりと隠して、固く握ろうにも握れない。この親指こそが愛なんだよ」

「平塚先生にも見習ってほしいものですね」

「静ちゃんにも教えたんだけどね。まっすぐ行ってぶっ飛ばす。右ストレートでぶっ飛ばす。って聞かなかつたんだ」

そのことを先生に言ったら、泣きながらラストブリッドを頂いたのは言うまでもないだろう。

○

彼等とのことを語るにおいて外すことのできない人物がもう1人いる。

それが、雪ノ下陽乃の妹である雪ノ下雪乃だ。

師匠譲りの才色兼備でありながら、品行方正であり、邪魔をする存在を真正面から叩き潰すという剛の人物である。

葉山とは一応幼馴染という関係で、ある事件をきっかけに俺たちとも行動を共にする機会が増えた。

その原因となつた事件を、ここに記す。

十一話

師匠に師事をしてから早、数ヶ月。あれほど五月蠅かった蝉の鳴き声も鳴りを潜め、朝と夕は幾分か過ぎしやすくなつた季節は、地平線上にクリスマスという祭典がちらつき、焦り狂つた独り身の男たちが蝉の変わりに無駄に騒ぎ立てる季節でもある。

そんな暗黒の季節の代表格とも言える一大行事、文化祭の近づいた頃、俺と葉山は師匠から呼び出しを頂き、集合場所である学校近くの小さな公園で師匠を待つていた。

「またなんか、面倒事でも押し付けられるのかよ」
「いいじゃないか。勇者のお使いとでも思えば」

この頃には師匠の投げ掛ける無理難題に少し辟易としていた俺と違って、少し声を弾ませ嬉しそうに葉山が言う。どういふことかは知らないが、こいつは師匠からの無理難題を押し付けられて喜んでゐるかのような節がある。

このまま行けば文字通り師匠の手足となり、宛ら二人羽織りの中の人のような人生を送るようになるのではないだろうか。被虐趣味の疑惑さえある兄弟子を心配してしまうほどの滅私奉公ぶりである。

「勇者のお使いって言つても、頼みごとをしてるのが村長Aでも王様でもなくて魔王

だけどな」

「それは確かに」

ついでに言ってしまうえば葉山は兎も角、俺は勇者でなく村人D辺りが無難だ。そんな村人に、ちよつと洞窟内の秘宝を取つてこいよ。と言つてくる師匠は限りなく魔王に近い存在である。

世が世なら邪智暴虐の王と認定を受け激怒されているに違いない。

俺と葉山の間には接点というべきものがそこまで多いわけではない。同じクラスで同じ人を師とし、同じように無理難題に頭を抱えることは有つても基本的に教室内では話しかけることはなく、また葉山の交遊関係と俺の交遊関係も交わる事はない。俺の交遊関係がごく限定的なものである事はこの際棚に置いておくとしてもだ。

だから師匠の事以外の会話は全くといていいほど続かず、やれこの間の貢物はどうしただ、やれ師匠の弱点は無いのかと話しをするも五分も経てば話題もつき、葉山は携帯を弄り出し俺は下を見ながら石の形鑑定をし始めた。

「ひゃつはろー。待った?」

自称石の形検定一級の資格を持つ俺からすれば、数多ある石の中から女性の耳の形に酷似した石を見つけるのは容易く、今日もそれらしき物を見つけ一仕事終えた職人のような達成感に浸っていると木陰から師匠がどこからともなく登場した。

最近はこの挨拶が自分の中でブームらしい。

「待ったけどそれはいいさ。それより頼みごとって?」

師匠と弟子の関係であるにも関わらず、タメ口を使う葉山だがそれを意に反さず

「ちよつとね、雪乃ちゃんの敵になって欲しいの」

と意味不明な事を言った。

何時もながら師匠の言うことは唐突で意味不明だが今回のはいつにも増して訳がわからない。白い害獣で無くとも訳がわからないよと言いたくなること請け合いである。

「いや、意味が分からないんだけど」

「ぶつぶー、鈍感な隼人はしっかーく。はい比企谷君その心は」

いきなり話を振られたところで、まず雪乃ちゃんなる人物も知らない。

どこの雪乃ちゃんなのかを説明してもらわないと話しても進まないと葉山を見るが、鈍感と言われたことにショックを受けたのか失格を言い渡された事が悲しかったのか下を向いていて、アイコンタクトは不発に終わった。

「タイムアツープ。比企谷君も失格ね」

チツチツチと指を左右に振り、無駄にテンションが高い師匠に失格を言い渡される。

「分からない2人の為にご説明します。雪乃ちゃんは文化祭の実行委員会に絶対入りません。それで絶対に成功させようとする。だから2人にも文化祭実行委員会に入っても

らって共同で雪乃ちゃんの邪魔をしてほしいの」

「絶対って言い切れる？」

「うん。なんだって私の妹だからね」

「まあ、正直やりたくないけど陽乃さんの頼みなら」

雪乃ちゃんは師匠の妹だったのか。そう言えば成績上位者のなかに雪ノ下雪乃と名前が有ったような気もするが、その時は国語の欄で俺の一つ上にあつた葉山隼人の文字に呪詛を唱える事に全意識を向けていた為、完全にうろ覚えである。

一つ納得は出来たが、今度は何故雪乃ちゃんの邪魔をしなくてはならないのかという疑問が浮かんできた。

「それで、内容なんだけど、比企谷君は有能な無能の役を、隼人は無能な有能の役をやつてね」

まだ、俺はやるとも言っていないし意図自体も汲み取れていないが、師匠は本日何度目かの意味不明な説明をして最後に

「分からないかなー、でもヒントはここまで、いかに邪魔をされながら雪乃ちゃんが成功を収めるのか、それとも君達に邪魔されて失敗するのか。報告待ってるよん」

そう言い残し、来た時と同じようにふわっと去って行った。

ふわっと残されたこっちは何から取りかかればいいのかさっぱり分からず、取り敢え

ず葉山とこれからの方針を決めようと話しかける。

「これから、どうするよ？過去最高難度だぞ」

「こういった事はヒキタニが得意だろ。作戦任せた」

無茶ぶりというか丸投げをしてきた葉山におともだちパンチを食らわせ、作戦とも言えないこれまたふわつとした方針を2人で決めてから解散した。

この腹黒師匠に腹黒兄弟子め。

心の中で毒吐きながら、帰路に着いた。

○

それから何度か葉山と顔を合わせ作戦をある程度煮詰め、漸く文化祭実行委員を決める当日がやって来た。

この頃になるとLHR以外の授業も利用してクラスの出し物と実行委員を決めることがあり、それをにLHRの次にある国語の授業まで引きづることにした。

主に葉山が周りをそれとなく陽動してだらだらと決めさせるといふ方法だったが、上手くいけば授業が潰れるということもあって、皆積極的にくだぐだしていた。

「では、女子は相模さんということでしょうか？」

その時間も大詰めとなり、男子の文化祭実行委員を決める時が来る。

「男子の方は誰か立候補する人はいませんか？」

最初の難関がここだ。

基本的に男子、女子共に実行委員はクラスに一名と決まっているが、どうごねて俺と葉山が実行委員になるかが問題だった。

俺が無言で手をあげると

「誰あれ？」

「転入生来たっけ？」

「影薄いのに」

クラスの大半がざわざわし始めた。

数の暴力を実感して泣きそうになったが、こつちを見た平塚先生はニコリと笑いかけてきた。

俺に師匠を紹介した後も、師匠と連絡を取って何かと気をかけてくれているらしい。

こないだ先生がなぜ結婚できないのだろう。

他に誰かいませんか、と事務的に聞く司会進行役に対して

「俺もやりたいんですけど」

と葉山も手を挙げる。

「嘘っ。葉山君やるの」

「私もやっておけばよかった」

「いいな南」

クラス全体がざわざわし始めた。

勿論、俺とは逆の意味で

実行委員に成るには自薦か居なければ他薦、推薦になる。俺と葉山が自主的に手を挙げた場合、クラス投票をして決めることになるが、普通に考えれば葉山の当選確実は揺るがない。

じゃあ、どうするかと考えた時に無理に委員として参加するのではなく、役職をもう一つ作ってしまえばいいとの結論に達した。

「じゃあ、葉山に譲ります。その代わりに、あくまで第三者的立ち位置として実行委員会の監査役、もしくはオブザーバーとして籍を置いてもらうことってできますか？」

と先生に提案をする。

「生徒の自主性は大事だ。特別に認めるが、仕事はこなしてもらおう。実行委員の活動をレポートにして集まりが終わるごとに私に提出する事」

先生は少し考えた後、条件付きだが許可を出してくれた。

「はい、頑張ります」

生活指導も兼ねている為、生徒のことに關してある程度の裁量は持つっていると踏み、この時間までぐだぐだと引き伸ばしたが、どうやら正解だったようだ。

ともかく第一段階は突破した。

と、ここまでは計画的に行くことが出来たが、思わぬ問題が発生した。

当初の予定では、雪ノ下さんを実行委員長に葉山を副委員長に据え、葉山をお飾りとして皆に無能と印象づけながら阿呆っぷり発揮させる。

俺がさも有能な監査官もしくはオプザーバーとして振る舞いながら雪ノ下さんの仕事を少しづつ増やしていくという筈だった。

しかし、何を血迷ったか最初の集まりで実行委員長を決める際に相模さんが立候補をして実行委員はそれに賛成、雪ノ下さんが副委員長になるという大番狂わせが起きた。

俺達2人なら阿呆っぷりも役どころ、ある程度調整できるといふもの。しかし、彼女は役で阿呆と言う訳でなく真正銘の阿呆であった。議題を雪ノ下さんに丸投げすることは勿論、ろくに会議の進行役を勤めることも出来ず、会議中は友人とおしゃべり夢中という始末。

これには葉山も頭を抱えた。

「妹さんはいい子だな。ヒキタニ君と違って」

今はゲリラ的伏兵が現れた事に対して、俺の部屋でこれからの方向性を決める作戦会議と言う名目の下、だらだらしている最中である。

最初に師匠と葉山が俺の黒歴史搜索した後も、なんだかんだ理由を付けては俺の家へ来ているが、未だに小町は「どうかこのゴミいちゃんを見捨てないであげて下さい」と目を潤ませながら葉山に挨拶をしている。

葉山との関係はそんなんじゃないと毎回言っているが聞く耳を持たず、今日も今日とてそんな感じの挨拶をしていた。よもや葉山の野郎、小町を狙っているのじゃないのかと、見られたものを腐らせるメデューサもかくやの如くの勢いで葉山を睨んだ。

「お前に小町は絶対にやらんからな」

毎度の事ながら小町が目を潤ませるのは、俺への哀れみなのかそれとも葉山への情かは分からないが、このままでは小町が葉山の毒牙にかかってしまう可能性が小数点以下で存在する。俺とは違い優秀な小町の慧眼なら爽やかイケメンの皮を被った阿呆だと気付いているはずと思いたいが、俺の部屋に来るといふ一点だけで小町ポイントは高くなっているかもしれない。

「いや、別にいらぬから」

「んだと、このタコ」

「ああもう。面倒臭い兄貴だなっ！」

「いいか、小町はだなー」

小町の素晴らしさを余すところなく十二分に過不足なく小一時間ほど伝えたところ、ナ

イチンゲールとマザー・テレサを足して二を掛けた人物が出来上がってしまった。これ程の素晴らしき人物なら次の五千円札の肖像は小町になるまでである。

「わかった。ヒキタ二君の妹好きは分かったから。今日の本題は文化祭実行委員でどうするかだろ」

俺が狙っていた最後のポテチに手を伸ばしつつ葉山が言った。

「そういえばそうだったな。しかし、どうするもこうするも、相模さんのフォローに加えて俺ら二人とも阿呆になったら、心労で雪ノ下さんが倒れちまうぞ。つか、お前一人でポテチ食いすぎだろ」

「俺が買ってきたんだからいいだろ。最初の集会の段階でぐだぐだだったしあれ以上は結構まずいかもな」

二人して相模さんを阿呆呼ばわりするのは若干申し訳ないと思っただが、本当のことなのだから仕方がないと開き直り相模さんは阿呆と今一度、認識を共用した。

「俺だつて場所と飲み物提供してんだ。だったら家主にポテチ残しとけよ。立場が逆だったらよかつたんだけどな。俺が相模さんに同調して監査役の葉山が諫める。そうすれば阿呆とフォローのバランスもちようどいい」

「飲み物つたつてこれ水じゃないか。確かに、でもそれなら俺が阿呆の役をやればいい話じゃないか」

「お前がマツ缶は遠慮しとくと言ったんだろ。家には水道水かマツ缶しかない。キャラじゃないな」

「実質マツ缶だけじゃないか。じゃあどうする？」

「取り敢えずポテチ買ってこい」

ポテチと飲み物を買って戻ってきた葉山とその後も話し合ったが案はまとまらず、結局出たとこ勝負ということになりその日は解散することとなった。

十二話

あの無駄なポテチ争奪戦もとい作戦会議からというもの、会議の時も葉山はポケーつと雪ノ下を見ているだけであり、特になにか行動を起こそうと言う気はないらしく、いい加減この停滞気味の空気を打開したいとオプザーバーの立場を利用し『仕事もそこそ順調ですし、皆さんもクラスの催しに力を入れるなどしてクラスの人達と一緒に楽しんでこそその文化祭じゃないでしょうか?』と提案をした。

その起爆剤足るや、先ず相模さんが同意を示し『自分たちが文化祭をまず楽しむってことで』と元から雀の涙程度しかこなしていなかった職務を放棄し、それに便乗するかのように多くの実行委員が集まりに来なくなった。

残った少数も日々襲いかかる書類の山に一人、また一人と屍を晒し、辺りが死屍累々の地獄絵図になったところで、残ったのは俺に葉山、雪ノ下と数人ということに気付いた。

一人潰れる毎に増える仕事量、そして増えた仕事に潰される人。何という負のスパイラル。ブラック企業の実態を垣間見て、雪ノ下の邪魔を等といっている場合ではなく俺も葉山も有能無能関係なく仕事をするはめになっていた。

そして今現在、今日は委員全員で文化祭のスローガンを決定するための全体会議があり少しでも書類を終わらせるために、俺と葉山と雪ノ下、その他数名は早く来て事務処理に追われている。

あの爽やかイケメン葉山も書類の海で溺れかけ人の言語ではないなにかを呻いでいる。

「はあ、なんで皆で楽しんでこそその文化祭だ、とか言ったんだ、俺」

「自業自得よ。口を動かす前に手を動かしたらどう？」

「見ろよ、この書類の山。葉山なんか生き埋めだぞ」

「それは、あなたが阿呆なことを言ったのがいけないのでしよう」

書類という共通の敵を前にした少ない実行委員は自然と話す機会も増え、凶らずも雪ノ下と俺と葉山の三人は結構仲良くなっていた。

「書類が、五メートルの書類が目の前に迫ってくる」

「葉山、それは幻覚だ。安心して目の前にある厚さ十センチの書類共と戦え」

「雪えもーん、助けてー」

馬車馬のごとく働きながら葉山が軽口をたたき、キャラ崩壊もいいところだ。

今そこにある仕事。これを文句言わずに片付けてこそ、『デキる男さらにイイ男』の称号を手に入れるというもの。

無駄口を叩く暇があつたら手を動かさせ。

「わーん。書類がいじめるよー」

……目の前にある書類には勝てなかつたよ。

何百枚もの量の紙をこれでもかといじめ倒した結果、やられたらやり返す倍返しだの精神で徒党を組みやつてくる紙達。土下座でもしたら紙達は無くなってくれるのだからうか。

「あら、なんなら仲良く逃げてても良いのよ。負け山君に逃げ谷君」

「……誰が逃げるか、お前こそ助けて下さい。って言った方が可愛げがあるぞ」

「そう。じゃあ今から予算配分の見直しをするから先ずは、従来の予算を打ち込んで三年から——」

「いや、はえーよ、ちよつと待てつて。まだ前の保存し終わつてないから。なんなら紙ベースのやつ渡してくれるだけでいいから」

「……俺はもう、負け山君でいいから逃げてもいいか?」

「しつかりしろよ。もつと頑張れ、自分を保てよ。出来る、やれる、お前ならやれるつて。富士山を見習つてみるよ」

「比企谷君。その腐つた目に反比例するかのような暑苦しい口調を即刻中止しなさい。胸焼けがしてくるわ」

葉山から聞いた話では、彼女は常に一人で全てをこなしてきたらしい。

成績は最優秀で、持久力を求められる物だけは苦手だがそれ以外は要求以上にこなして、その極まった文武両道ぶりや控えめに表現しても美しいといえる容姿から、女子からの嫉妬や男子からの告白を受けることが多かったと言うが、嫉妬はさりと受け流し、告白は男子の尊厳ごと片っ端からちぎっては投げ、嫉妬の心を育て過ぎた女子からのいじめのような物も真つ向から叩き潰してきた。

周囲には雪ノ下を剣か鎧か装飾品として味方につけ着飾ろうとする者ばかり、いざ近付けば特大の茨で自分も傷付く。傷付く事が分かれば敵になるか無関心を貫くかの二択。

結果、雪ノ下を雪ノ下として見てくれる人は居なくなり、やはり一人で全てをこなす棘は研かれる悪循環を重ねていた。

しかしながら、深夜のテンション的なものなのか、頼ることを覚えたのか、吊り橋効果的なものなのか、それとも師匠直伝の社交性を身に付ける講義のお陰なのか。

ともかくこんなやり取りができるまでになっていた。

実際のビフォーを見ていないためよく知らないが、聞いた話で推測するに雪ノ下は大改造劇的アフターまでである。匠は一人遊びのスペシャリストこと、この俺とうすら寒い笑顔の開拓者こと葉山だ。

「それにしても遅いわね。今日は全体会議だというのに」

流石に義務の発生する全体会議をさぼろうという人間はいないため結構な人数が来ている。

しかし、いまさら業務の引き継ぎに時間をかける余裕もなく、俺たちを含めた数人が生き埋めになりながらも業務にあたつてるのが現状で、さぼっていた奴らは申し訳なさそうに見えているが鬼気迫る表情で書類と格闘している為、声をかけることが出来ないだろう。

「遅れてすいません。じゃあー、今回の議題はースローガンを決めたいと思います」
今や阿呆を通り越して敵と認識されている相模さんが久しぶりに顔を出したと思えば、緊張感も罪悪感も感じられない語尾を伸ばした口調で始まりを告げた。

会議も中盤を過ぎ、ホワイトボードには様々な案が出されている。

全ての文化祭を過去にする。

後夜祭まで泣くんじやない。

高校よ、これが文化祭だ

そうだ、文化祭に行こう。

子供も学生もお爺さんも

総武校くそして伝説へく。

未来への挑戦、あふれる活力、輝く総武校。

どれもこれもどこかで見たり聞いたりしたものばかり並ぶ。

糸井重里に許可を貰ってから出直してほしい。

大体、最後のなんて静岡県のキャッチフレーズまである。どうせだったら、千葉県のキャッチフレーズをもじって、おもしろ文化祭総武校とかにすればいい。

そんな多々ある悪ふざけスローガンの中でもまともそうな部類に入らう、on e for allという文字を見た葉山が顔をしかめた。

「ああいうのが好き何じゃないのか」

「基本的にはね。でもそれってみんな頑張ってるとき限定の言葉だったってのを実感したよ」

「もしくは、なにかを犠牲にする時にも使ったりするけどな。そうすれば今の俺達と雪ノ下みたいな歪な結末が生まれる。ほら、優しい世界の出来上がりだ」

俺の言葉に更に顔をしかめる葉山。何がそんなに嫌なのか。虐めやカースト制度はこの最たるものだというのに。

「取り敢えず案はこんな感じですか。じゃ最後にうちの考えたやつを」

そういつて相模さんがホワイトボードに書いていく。

「これなんてどうですか。絆々ともに助け合う文化祭」

きつと相模さんは自分の半径五メートル以内が自分の世界でそれ以外は興味が無いのだろう。回りの状況が見えていなく、あまりにも阿呆な事を言うので思わず相模さんは変わらないと笑みを浮かべる。

「何かおかしなことといったかな？意見があるなら案を出してね」

やはり自分の言ったことの不自然さに気付いていないようで、隣では葉山が周りに気付かない程度の貧乏ゆすりをしている。

そんなことを言われたら精一杯の皮肉を込めた案を出したくなっちゃうではないか。

「じゃあ、こんなのは。『人々よく見たら片方楽してる文化祭』」

「……どういうことかな？」

こめかみをヒクつかせながら相模さんが聞いてくる。怒りを言葉にしないだけ思っていたよりも彼女はメンタルが強いみたいだ。いや、鈍感なだけかもしれない。

「どうもこうも——」

「ひゃっはろー」

売り言葉に買い言葉。相模さんに懇切丁寧に教えてあげようと口を開いた時に扉が

勢い良く開かれ、全員の視線は扉を開いた人物に注がれた。

「あれ、どうしたのこの空気？」

とぼけたように頭を掻きながら入ってくる師匠と、驚きの顔が隠せない雪ノ下との対比がやけに面白く、相模さんに対するさつきまでの感情がするすると手から離れていった。

「どうしてこんなところにいるのかしら」

「つれないなく、有志のやつ持つてきたつてのに。でも、お取り込み中だったみたいだね。気にしないで続けて」

雪ノ下の詰問するような口調をさらりと受け流し、師匠はこつちを見ながら白々しく続きを促してくる。

「ええと、まあ、あれだ。人という字は支えあうんじゃないなくて、誰かに寄りかかって楽している文字にも見えるだろ。この場合、今寄りかかっているのが誰で、寄りかかれてるのが誰だかをもう少し考えてから、共に助け合う文化祭ってスローガンを決めた方がいいと思うつて事だよ」

間延びした空気の中、取り敢えず早口で言ったが、誰もが毒気を抜かれて呆けているのかぼかんと口を開けている。

それを見ていた師匠が所在なさげにできてくと俺の場所まで来て、ボソツと「それは

甘いんじゃない」とつぶやく。

「なるほどねー、スローガンを決めてたんだ。いいね青春って感じだよ。文化祭は青春の場、怠ける人にも、探す人にも平等に青春はやって来るんだよ」

うんうん。と頷きながら師匠は葉山に目配せをする。

きつと今の目配せは、師匠が言った言葉を改編してスローガンにしろってことだと思うが、俺にはその意図が全くわからない。

「……さっきの言葉で思い付いたんだけどこんなのはどうかな。『青春を、探す阿呆と眺める阿呆。同じ阿呆なら探さにやそんそん』」

葉山がひきつった笑顔で実に阿呆っぽい案を口に出し、にこりと師匠が笑った。

どうやら及第点は貰えたようで葉山もホッと胸を撫で下ろしている。

中弛みと、葉山人気の効果もあり、もうそれでいいんじゃないかな的な空気になり、あの雪ノ下でさえも「他に案がなければ、これにしようと思うのだけれど宜しいでしょうか」と言い始めた。

その後、少しの改編を経て、『青春を探す阿呆と眺める阿呆。同じ阿呆なら探してsing a song』となり、斯くして師匠の思惑通りのいかにも阿呆っぽいスローガンとわからないままの真意を抱え文化祭の準備をすることになる。

十三話

雪ノ下が倒れた。

文化祭準備も終盤になり最後の仕上げ、と下校時刻まで粘る日々のことだった。

その日も大量の書類を抱え葉山と共に場所へ向かったが何時もは既にそこにいるはずの雪ノ下さんが居なく、まあその内来るだろうと書類に手を付け二十分ほど経ち彼女はやって来た。

「ヒツキー、隼人くん。ゆきのんが倒れたって」

ドタドタと足音をたてて来た人物は雪ノ下さんでなく由比ヶ浜結衣という乙女だった。

学校内で唯一俺の事をヒツキー呼ばわりする彼女は、実は高校の入学式以降の貴重な時間少しと交換に助けた犬の飼い主である。

何を血迷ったのか、俺が師匠に弟子入りしてから暫くして名乗り出てきた彼女の手に、丸い炭が入った袋が握られていた。

「面と向かってお礼を言いたくて」と感謝の言葉と共に渡されたのは本人が呼称するにはクツキーというお菓子のようだった。勿論、俺はクツキーがなん足るかを知らないわ

けではない。

黒い何かは原材料こそクツキーと同じという謳い文句で作られたが、一口かじろうとするとバリバリと心地よい音が響き、まるでバーベキュー会場で最後まで食べられずに隅の方に残ったピーマンのごとき香ばしさが口のなかに広がる逸品であった。

劇物を経口摂取したことに抗議をしようにも「ごめんね。ちよつと失敗しちゃったんだ」なんて心配そうな表情で言われた日には「ま、まあこれからうまくなれば良いんじゃないか」と答えるのが精一杯で、気が付いたらことあるごとに成長と退化をいつたり来たりするクツキーを貪る実験台となり今に至る。

「事故か、事件か、それとも病気か」

その報告は驚天動地だった。葉山も深刻そうな顔をしてこちらを見ている。あの完璧超人の雪ノ下の身に何が起こったのか。大事でなければいいが。

「風邪だって」

「それは倒れたといわん。てか、雪ノ下が倒れたって、何で由比ヶ浜が知ってるんだよ」「あれ？言ってなかったっけ。ゆきのんとあたし同じ部活だよ」

驚愕の新事実。と言うほどではないが、片や明朗快活だが頭に若干の不安が残る乙女、片や大和撫子だが毒舌に定評のある乙女。正反対の二人が仲良く席を共にしている姿を想像できない。

それと共にただの風邪でよかった。とも思ってたが、働きすぎたことも原因の一翼を担っているに違いない。そう気付けば俺の繊細なハートは罪悪感の重りにペチャンと音をたて潰されそうになった。

「雪えもんが居なかつたらどうやってジャイアンと戦えば良いんだ」

きつと俺は苦虫を味わっているような顔をしていたのだろう。わざとらしくおちやらけた声で葉山がふざけている。感謝はしてやらん。

「どうしたの隼人くん？」

「……気にすんな。シンの毒気にやられただけだから。葉山、お前は帰ってきたドラえもんを百回見直せ」

「実際問題、俺らで出来る物は引き継いでも大丈夫だけど雪ノ下さんか相模さんしか出来ないのも有ったりするからな」

「えっ。ああ、うん？」

しようきにもどった葉山が顔を引き締めて言うが、さっきとのギャップが激しかったせいで変わりに由比ヶ浜がこんらんした。

「雪ノ下がいつ復帰するか分かんないからな。取り敢えず相模さんにはお前が話して置くとして、由比ヶ浜は雪ノ下の見舞い行くだろ？」

「う、うん」

「大勢で行つても迷惑だし、雪ノ下に今週いっぱい休むなら書類は全部無いもんだと思えよ。つて伝言頼めるか？」

「わかつた。ゆきのんに伝えておくね」

「それと、見舞い行くのに手ぶらじゃなんだろう。千円あれば途中で何か買えるだろう。葉山、五百円な」

財布の中から千円札を渡すと由比ヶ浜はまるで不思議な物でも見るような目で顔を覗き込んできた。

「ヒツキー、大丈夫？ 変なものでも食べたの？」

変な物ならクツキーだけで足りている。むしろアレよりヘンテコな食べ物があると
いうなら教えてもらいたいぐらいだ。

「失礼な。博愛主義者の俺からしたら当然の事だろ」

「結衣、気にしなくていい。シンの毒気にでもやられてるんだ」

何やらドヤ顔を決めながら葉山が言っているが、さつきまでのお前とはレベルが違う
だろうと言いたい。ケダチクとアルケオダイノス位の差はある。何度も言うが感謝は
してやらん。

「それと、これ。まだ開けてないから雪ノ下に渡しといてくる」

「わつとと。マツ缶？」

「体調も仕事も辛いだろ。そんなときは飲み物ぐらい甘くても良いだよ」

「うーん。そうなのかなあ……」

「そういうもんだ。仕事が忙しくなるからそろそろ行つてやれ」

「頑張つてね隼人くん……後、ヒツキーも」

由比ヶ浜が教室から去つていくのを見てから葉山に聴こえるか聴こえないかと言つた声で呟く。

「……あながとな」

「なんのことやら……まあ、俺も共犯だしな」

○ 葉山と顔を見合わせた後、二人して苦笑いを浮かべた。

心配とは裏腹に、翌日には雪ノ下は復帰していた。見舞品のお礼を言われたときは、いったい彼女に何があつたのか、と勘ぐつてしまい、「貴方達は私をなんだと思つているの?」と聞かれ「他人が不幸になっている横で優雅にティータイムを楽しむ、鬼か妖怪みたいな人間」と葉山が答えると、口にするのも憚れるほどの罵詈雑言を頂いていた。しかし、雪ノ下が倒れた事により仕事をしなかつた多くの実行委員が戻つてきて、仕事を引き継いでくれたことは不幸中の幸いだった。

お陰で下校時刻まで書類と格闘する日々は終わりを告げ、文化祭前日には確認作業の

みで解散しこうして帰宅することも出来ている。

「明日には本番なんだよな」

「センチメンタルになるような性格では無かったと思うけれど、貴方でもそんな気分になることがあるのね」

「センチメンタルつつか実感が沸かないだけだ。書類しか見てなかったし。確か葉山はクラスでやる劇だかの主役だったろ」

「星の王子さまだよ」

「……あれだけの仕事をやっておきながらクラスの出し物にも参加するだなんて。尊敬を通り越して呆れたわ。葉山くん」

「来年は受験で皆忙しくなると思うんだ。だから今年ぐらい目一杯楽しもうとしてもバチは当たらないじゃないか。出来るなら時間を踏みしめて歩きたいから」

足取りの覚束無い秀才よりも、腰の座った阿呆の方が人生は楽しめるのだろう。

師匠に弟子入りしてすぐの葉山は、どこか強迫観念に近いレベルで調和、融和、波風を立てない、お手に繋いで一等賞のことなかれ主義に囚われ、だからこそ自分の足元を見れていないと感じた。

でも、最近のコイツは、いや実行委員になってから変わってきたような気がする。氣質こそ変わってはいないが、自然体で居られるようになっていた。

「とまあ、葉山と違ってクラスの出し物に参加せず高校生活の一大イベントの一つを棒に振るった俺には実感が無いわけだ」

「でも、そのお陰で私と下校を共にすることが出来るのだから書類と私に感謝すべきね」
「へいへい。ありがとうございます」

「俺も居るけどね」

思えば、高校生活も大体半分を過ごしたことになる。その早さはまさに光陰銃弾のごとし、撃たれたことにも気づかないままである。

去年の今頃は何をしていたのか思い出そうとしても、廻るのは弟子入りしてからの数ヶ月。貢物を駆けずり回り探したことや、葉山と共に聞いた師匠の講義、それに実行委員になってからのことだった。

少し感傷に浸り、日の落ちかけた窓を見つめる。

外では、楽しみに文化祭の準備をする人達がみえた。

十四話

文化祭当日。

心地よい秋晴れの中、体育館でいつになく歯切れの悪い実行委員長の言葉により文化祭が始まった。

どこもかしこも呼び込みの音が響き、どの廊下も確かな熱量を持って人を迎えている。極彩色にあしらわれた壁からは我がクラスこそが一番面白いという矜持を感じられ、道行く人々に求めよ、然れば与えられん。の精神でその扉を広くして待ち構えている。

どこから仕入れたのか、馬の被り物をした男や、豚の被り物をした豚、今会いに行けるアイドルグループのような格好をした男が自分のクラスの宣伝をしながら廊下を闊歩している。

誰得だよ。

文化祭当日での俺の主な業務は、問題がないかを巡回しながらあとで販売する用の写真撮ることと、常にインカムをつけて他の実行委員から受ける問題を調べる事だった。

気紛れに写真を撮りながら独りで練り歩く。

勿論、文化祭実行委員という腕章を着けているので、変質者には見られないはず。多分。

二時間ほど見回ったときにインカムから連絡が入った。

「比企谷君。聞こえているかしら」

インカム越しの彼女の声は、耳元で囁かれているようで、人通りの多い廊下でこの声が聴こえているのが俺だけだということに何故か背徳感をおぼえた。

「ああ、聞こえてるぞ」

「何処かで、占いをしているところがあるらしいのだけれど、そんな申請無かったわよね」

「俺が知ってる限りでは無かったな」

「もし見かけたら、辞めるように言って私に連絡を頂戴」

「はいよ」

「じゃあ、また何かあったら」

「おう」

文化祭は必ずと言っていいほど羽目を外しすぎる輩がいる。

きつとその占い師モドキもそうなのであろう。占うとか言つて、乙女たちの手を合法

的に握れるだなんて、なんてうらやまーけしからんことだ。

見かけたら少しの間交換してもらおうとしよう。

のべつまくなしに写真を撮りまくり、篠山紀信かはまだまたパーか、ともかくにも怪しげな風体を連想させること請け合いな行動をとりながら廊下を歩き、まだ見ぬエセ占い師に思いを馳せていたらインカムから連絡が入った。

「ヒキタニ君、聞こえるか」

インカム越しのこいつの声は囁かれているようで、人通りの多い廊下でこの声が聴こえているのが俺だけだということに気持ち悪さをおぼえた。

いや、人通りが少なかつたとしたら余計に気持ち悪い。

「んだよ」

「どこかで、こたつが移動しながら生徒達を引きずり込み、鍋を振る舞って構内を彷徨いているって噂を聞いたんだが、そんな模擬店の申請無かつたよな」

「書類のやり過ぎか、少し休んどけよ。じゃあな」

「いや、本当らしいんだよ。韋駄天コタツなんて言われてるらしい」

「はいはい。見かけたら辞めるように言っておくから、早く休めよ」

「おい、待てっ——」

耳からインカムを外して、何事もなかつたかのように廊下を放浪する。俺の分の書類

を然り気無く混ぜすぎたお陰で幻覚まで見るようになってしまったのか。

大体、コタツに鍋って季節外れもいいところだ。

この残暑厳しいなかでそんなことを考えるやつのが知れない。

○

自分のクラスの出し物も見に行かずふらふらとしていたら由比ヶ浜と遭遇した。

ばったりと会うなり後ろ手に隠していたクッキーを渡して来た。クッキーをずっと持ち歩いていたのだろうか。

よもや俺に惚れているのかもしれないのではないのかと、自意識を悶々と膨らませ眠れない夜を過ごしたものだ、騙されてはいけない。

これは、ただの御礼であり、その延長線上で由比ヶ浜が俺に親近感を抱くことはあるかもしれないが、恋心に発展するのは全くあり得ないことで、新薬の実験台にしていると言った方が可能性はある。

そうでなければ、この薬の味がするクッキーを渡してくるはずがない。だから、冷静たれ。比企谷八幡。

「お前は、俺をモルモットかなにかと勘違いしてるのか」

「ちがうし、何でそうなるの」

「このクッキー、薬の味がする」

「おかしいな。なにがいけなかったんだろう」

彼女は首を捻り、ぶつぶつと呟いている。

その単語のなかにドクターペッパーや、ローズマリーといったものが含まれていたが、そんなものはニートの探偵か厨二病の大学生にでも食わせておけばいい。

まだ、桃を入れていた時の方がよかった。

「頼むから今度からは味見をしてから持つてきてくれ」

「う、うん。ごめんね」

俺としては至極全うな切実たる願いであったが、しゅんとした顔をして彼女は俯く。

犬耳でもあればきつと垂れ下がっているまである。

「……それと、サンキューな。今度何かで埋め合わせするわ」

「うん。えへへ」

俺はどうにも彼女に弱いらしい。

花が開いたかのような笑みを浮かべ、しっぽでもあればぶんぶん振り回しているまであるだろう顔を見ると、実験体になっちゃうのもいいかもしれないと思えてくる。

……ここで彼女に何か話しかけてどこか二人で出掛けてしまっても良いのではないか。

今まで真面目には言い切れないがキッチンと実行委員としての職務を果たしてきた

つもりだ。それでこのまま一人で写真を撮り続ける苦行を歩き、永久映写機として文化祭、延いてはこれからの人生を進んでいくことを良しとしてもいいのか。

違うだろ。薔薇色のスクールライフを謳歌するんだろ。

「あの……さ……」

「はーちーまーん」

いいかけたその時、豚の被り物をした豚がぬつと出てきた。

「ひっ」

「うわっ、なんだよ。お前」

「我だよ我。お主の朋友だよ」

くぐもった声であろうことか俺の友と名乗る男。

材木座義輝。

道行く10人のうち8人が熊の妖怪と間違えるような容姿を持つ男だ。

残りの2人はきつと妖怪に違いない。

中二病で暑苦しく、他人の不幸で飯が三杯食べれるというおおよそ誉められる所の無い、特定外来種、犯罪係数300オーバーの執行対象の存在で、通称恋の邪魔者。

体育の授業で組んでからというもの、なにかと俺に構ってくるようになった。

中高生向けの小説家、つまりはライトノベル作家というものになろうとし、日々人の

恋路の邪魔をして、気持ちの悪い妄想と特定学物質に指定されるであろう男汁なものをたぎらせ創作活動にぶつけている。

そのおかげでこいつの書くものは、それはもう欲望だか願望だかの得たいの知れない何かを纏わせているものだから、読む人間にそこはかとなない生理的嫌悪を感じさせ、有害指定図書として未来ある青少年に見せることすら憚れるすらあつた。

それを毎回読ませられては、サイゼリアでその本の内容をボロカスに酷評するのが約束になっていた。

「何故だかお主からラブコメの波動を感じたから参上仕つた」

「すみません。俺、沙悟浄じゃないんで人違いじゃないでしょうか。天竺なら確か三年の出し物に似たようなのがあるからそこにいけばわかると思いますよ」

「むう、我は猪八戒ではないというのに」

「むう。じゃねーよ。どっからどうみても猪八戒のコスプレだろそれ」

「あはは、じゃあまたねヒツキー」

「お、おう」

「じゃあ、我もこれで。ぐえっ」

若干、引きながら去っていった由比ヶ浜を見て、満足そうに去っていく材木座の首根っこを掴む。

「おい、お前本当に何しに来たんだよ」

「そんなに睨み付けてくれるな」

「おい、無駄に引つ付くな。暑苦しい」

「だって寂しいんだもの」

「この寂しがり屋さんが」

「きやつ」

豚の妖怪に引つ付かれることに一瞬デジャブを感じるが、こんな気持ちの悪い事二度も起きてたまるか、と無理矢理材木座をひつpegがえす。

「で、何の用だ？」

「用などない。だが、決まっているであろう。幸せが有限の資源であるとするなら、我に幸せが回ってくるまで、誰にもその席に座らせなければいい。それだけの事よ」

そんな、悲しき一人フルーツバスケットだか椅子取りゲームをしている材木座は、フツ、とニヒルに笑いきるりと裾を靡かせて後ろを向いた。

その後ろ姿を見て、このホモサピエンスの面汚しめ、神様どうかこいつに天罰を、と願わずにはいられなかった。なむなむ。

「そうだ。今、一寸したことを行っている。文化祭の最後辺り暇があったら屋上に来てくれ。歓迎しよう」

「絶対にいかないから安心しろ」

「そうか、そうか。それは残念だな」

のっしのっしと去っていく材木座を見送り、それにしても、人間というのは学ばない生き物なのかそれとも俺が阿呆なだけなのかと反省をする。

材木座が現れてくれなかったら、迸る熱いパトスで思い出を裏切った挙げ句、またひとつ黒歴史を作り、校舎の屋上から空を抱いて羽ばたき、神話になるところだったかもしれないというのに。

やはり文化祭の魔力は恐ろしい。

ふう、と息を吹き出し、気合いを入れ直して業務へと戻った。

十五話

文化祭には立ち入り禁止区域が存在する。

実行委員や教師の目の届かない範囲や、教室を丸々出し物に使っている生徒達の荷物を置く場所、教職員室など学校として入られたら不都合のあるところは、前もって立ち入り禁止しておくのだ。

元々ボツチからしたら、人混みと熱気に酔ってしまうのはしょうがなく、人の居ないところで休もうと立ち入り禁止区域で座っていた。

勇者にだつて休息は必要だ。その証拠に宿に泊まれば毎回、お楽しみでしたねと言われるほどに夜の彼等は御大尽だったに違いない。

英雄色を好むというが、魂の安息を多くとらないとやってられなかつたんだろう。

ましてや勇者でも英雄でもない俺は、いつかは彼らと肩を並べるほどの人物になるに違いないと思つていても大器晩成。精神的に未だ成熟しきつてないこの身では、材木座と別れて業務に戻ってから中学時分のトラウマを掘り起こしてしまうのも無理からぬ話だ。

今日はよく頑張った。少しぐらい休んでも良いじゃないか。

連絡手段を断ち、一時間ほどブーツとしていたが、その時の俺は世界ブーツと選手権があれば日本代表に選ばれるのではないかと思うほどに魂が抜けていた。

そんな中、とある一面に占いという何とも怪しげな看板を掲げた露天を見つけた。

そこは文化祭から切り離され、いつも立ち入ってはいるが、いつもと違い人が全くいないという非日常的な日常的非日常空間であり、喧騒は遠くに聞こえ、陰湿な雰囲気と妖気を垂れ流し、無駄に説得力がありそうな場所だった。

占い師の顔はフードで隠れており見ることは叶わないがこんな妖気を無料で垂れ流している人物の占いが当たらないわけないと考え、取り敢えず注意する前に見て貰うだけ見て貰おうかと足が向かう。

「あなたはどうかやら真面目で才能もおおりのようです」

フードの慧眼に脱帽。

「しかし、今まで貴方が行ってきたことにより、貴方は三人の間で迷ったあげく答えを出せないでしょう」

妖気を垂れ流すのは構わないが占い師というのは、どうしてこうも回りくどい表現をするのだろうか。もつと今すぐ使える的確なものがほしいというのに。

「よく分からないんですけど、つまりどういうことですか」

「後悔をなさらないことです。貴方は後悔や自己嫌悪に苛まれる傾向が強い様ですが、

それを無くしなさい」

「俺ほど自己嫌悪と無縁な人間はいませんよ。自分大好きですし」

「そうですか。漫然とせず好機を掴みとりなさい。さもないと、貴方は今と変わらない日常を過ごすことになるでしょう」

「はあ、ありがとうございます。それと、占って貰ってあれだけど、実行委員会が目つけたから程ほどに」

「いえ、私もそろそろ閉店とします。ほしミュがあるので、ぐ腐腐」

○ どこか聞いたことのある特徴的な笑いをする占い師を残してその場を後にした。

立ち入り禁止区画を出てぶらぶらと二階を歩いている俺の目に入ったのは、お茶原理主義vs紅茶党員という看板だった。

その看板を掲げているクラスに入ると、徹底！後夜祭まで生議論。途中参加あり。と書かれた黒板を背に教室の半分を議論場、もう半分为観客として、白熱した論戦が繰り広げられていた。

「お茶みたいなノスタルジズムにアイダライズするのはアウトオブクエスチョンであり、紅茶こそ現代の日本にとってのモダニズムだ」

「それあるー」

「なに言つてつかわかんねーよ、ハゲ。日本人なら茶を飲め」

不毛とも呼べる議論をしている中で髪をポニーテールに纏め、凜とした表情で壇上を見つめている見知った顔があつた。

「何でお前はここに居るんだ？」

「知らない。呼び込みに着いていたら意味不明な議論してた」

川崎沙希とは、同じクラスだが妹経由で知り合つた。

弟の為に深夜のバイトをしているらしく、そんな兄弟愛がどこか親近感を俺に抱かせ、彼女の為にスカラシツプと材木座経由で知り合つた〈印刷所〉の所員を紹介してから、少しだけ話す仲になつて居る。

「知らない人に着いていっちゃいけないって教わんなかつたのか？」

「……バカじゃないの」

「……で、これは何してんだ？」

「弁論部の催し物で、お茶と紅茶に特にこだわりを持たない人が敢えて別れて議論をするらしいよ」

「和菓子に日本茶。この組合せは無類だ」

「アフタヌーンを紅茶とケーキで過ごす。これが最高の午後を彩るカラー」

「それあるー」

「ルー大柴みたいな言葉使いやがって、意味被ってんだよ」

「そういや、印刷所はどうだ？」

「正直、居心地はあんまり良くない。お金の心配もお陰様でないからそろそろ辞めようと思ってる」

「まあ、それがいいな」

彼女と話している内に討論会の議論が煮詰まったのか、進行役が見ている人に意見を求め始めた。

「貴女はどう思われます？お茶派？紅茶派？」

進行役が彼女にマイクを向け、彼女は少し考えた後

「……私はコーヒー派かな」

と言った。

新たな派閥の台頭が場内がどよめき、進行役がなんとかその場を治めようとして隣にいた俺に話題を振ってきた。

「あ、貴方はどうですか？」

「断然マツ缶派だ。ケーキとマツ缶。甘いものに甘いものが加わって最強に見えるまである」

俺の一言が火種を燃え上がらせ三棘みの状態の中、議論は再度白熱した。最初は俺と

川崎だけの派閥だったが、コーヒー・マツ缶連合の良さを熱く語り、時には師匠から教わった人身掌握術を用いた結果、半数近くを連合に寝返らせることに成功した。

マツ缶の良さを布教することに必死になっていたが、ある程度達成したことで本来の業務を思い出し寒々とした気持ちになった。

「つか、他の実行委員にこんな所見られたら何て言われるかわかんないな」

「はあ、あんた仕事中にはやってんのさ」

呆れるようにため息を吐かれたが、ずっとそれに付き合つて机を叩き、気焰を吐きながら意義ありと言つていた彼女だつて同類だろう。

「悪い、後で埋め合わせするからここは頼んだ」

「……わかつたよ。これで、少しは借りを返せたのかな」

「借りつてなんだ？」

「聞き返さなくていいから早く」

背中を強めに押され後ろ髪を引かれる思いをしながらも教室を後にした。

○

お茶派と紅茶派とコーヒー派による不毛な罵り合いを終えた俺は、偶々雪ノ下と遭遇し一緒に師匠が指揮を執るオーケストラの演奏を聞いた。

そういえば、結局出し物の劇を見に行くことなく終わってしまったなど感慨に耽りな

がらも、文化祭も大詰めを迎えた頃。

実行委員の一人がこちらに駆け寄ってきて、雪ノ下に何かを耳打ちした。その話を聞いた彼女が少し焦ったようにこちらを向く。

「ちよつと良いかしら」

「ああ、いいけど」

「こつちへ」

そう言つて彼女は体育館の舞台裏へと入っていく。舞台裏には演奏を終えた葉山や三浦さん、由比ヶ浜に戸部、それに少数の実行委員が集まっていた。

「相模さんの行方が分からないらしいの」

「もう最後の挨拶まで、あんまり時間無いつてのにか」

雪ノ下が神妙な顔で相模さんか居なくなつたことを告げた。思えば、文化祭で最初の挨拶の時にもたどたどしい挨拶をしていたし、その恥をまたかく位なら何処かへ逃避行してしまおうと考えてしまつても不思議ではない。

「ああ、探そうにも携帯の電源を切っているっぽくて繋がらない」

「じゃあ最後の挨拶を誰かに任せるとか」

「そもいかないわ。地域賞とかの結果は彼女しか知らないから」

「また後日について事にはできないのか」

「最悪はそうなるでしょうけど、地域賞は今発表しなくてはあまり意味がないの」
「後、何分あれば探し出せる」

「隼人。まさか」

「俺達で時間を稼ごう」

「隼人くん、それマジカッケーっしょ。主人公みたい」

「そうだよ。皆でやったらきつと大丈夫だよね」

なにやら、向こうの方ではアニメでよく見る時間稼ぎイベント的な青春の一ページが主人公葉山、ヒロイン三浦さん、友人A由比ヶ浜、賑やかし戸部で開演しようとしているようで、後日にしてしまえば良いと思っていた俺は、ぼつねんと取り残された気分であり取りを見ていた。

「驚きだわ。あなたでも空気を読むことが出来たのね」

と小声で雪ノ下が話しかけてくる。

「いや、なんでその思考に至った」

「あなたの事だから、そんな面倒なことするぐらいなら後日にすればいい。とか言うだろうと思ってる」

「そんなことは言わないぞ。文化祭だし」

「あら、あなたも文化祭だからといって浮かれてはめをはずすような人間だったの？」

「いや、浮かれる阿呆は尽く死滅すればいいと思ってる。なんだったら葉山は壇上で恥の一つでもかけばいい」

「……流石ね」

「よせやい。照れるじゃねえか」

「寧ろ貶しているのだけれど」

「大体空気を読むってなんだよ。空気は吸って吐くものだ」

横目でちらりと一瞥をした後、はあ、とため息を吐かれた。

はて、何かおかしなことでも言ったかしらん。

「兎に角、ここにいる皆で手分けして探せば、二十分もあれば校内全部見れるはず」

「ちよつ、二十分もやる体力も曲もあーしたちだけじゃ無理なんだけど」

「大丈夫だって。最悪、俺と隼人くんでも漫才でもして時間稼ぐからさ」

「そうすれば、文化祭も丸く収まるし俺はモテルしwin-winじゃね」

「そうだよな。ついでに葉山が恥をかけば俺も得してwin-win-winだ」

「なに、ヒキタニくん。俺らと一緒に漫才したいの？」

「いや、遠慮しておく。安心して探しに行けるってことだ」

「そう？俺ってば安心感ある男だかなー」

「……戸部くん。ありがとう」

「良いって良いって。らくしよーっしよ」

雪ノ下のお礼に戸部は軽く手を振って答えた。

この男は雪ノ下がお礼を言っただけで頭を下げる事の希少さを分かっている！

と説教の一つでも垂れてしまおうかとも思ったが、あいにくとそれをする時間の余裕はなかった。

時間を稼いでくれると言っているのだ。素早く的確に探す場所を決めないで。

「ひゃっはろー。なんだか楽しそうなことになってるね」

確かに何やら企んでいるようであった。それに、さつきまでオーケストラで指揮をとっていた。

しかし、それでもこのまま来ないで終わってしまったら良いと思っていた。

でも……ああ、来てしまった。

○

魔王の到来により頭の中では危険危険とシユプレヒコールし、早と退の二文字が頭の中でくずほぐれつサンバのリズムを刻んでいるが、それも仕方がないというもの。

ちらりと葉山を見ると目があつたが、どうしようもないと頭を振るだけだ。

全く使えないやつめ。

「あー、ゆきのんのお姉さんだ」

師匠に対して特に警戒心を持つていないんだろう。由比ヶ浜はいつもの調子で話しかけていた。

キツと睨み付けている雪ノ下とは対照的に、友達百人出来たら富士山の上で輪になって踊ろうを体現している由比ヶ浜に

お前はそのまま自分の道をひた走れ

と、心の中で熱いエールを送った。

勿論、表だつてそのエールを送ることは今後も無い。

そんなことをして、え……あ、どうも。と苦笑いを浮かべられでもした日には、俺の繊細なハートは復元不可能にまで粉々にされてしまふだろう。

「おお。久しぶりだねガハマちゃん。髪切った？」

「姉さん。そんな阿呆みたいな質問しないで。今、立て込んでるから邪魔をしないでくれる」

「はあー、雪乃ちゃん。話は聞いてたけどさ、そんな杜撰な考えで時間が稼げるとでも思ってるの。どうせ滑つて5分も持たないのがオチだつて分かっているのに」

「それ、酷いくー」

「ちよつと黙つててくれないかな」

戸部の抗議を途中で遮りにこりと笑いかける師匠は紛れもなく鬼か妖怪の類いであ

る。

心なしか角見えるし、戸部とか三浦さんなんか吹けば飛ばされる毛玉の如く丸くなつてゐる。

そんな中で俺は、黒髪の乙女が掌の上で可愛らしく丸くなつてゐる幻影を脳裏に浮かべ、思わずうへへと笑みをこぼしていた。

現実逃避してゐる間も師匠と雪ノ下の会話は続く。

「私だつたら、あんなの頼むよりも確実に簡単に時間を稼げるんだけどなあ」

「何が目的？」

「なにも。あえて言うなら『面白きことは良きことなり』つてね。だから別に貸しとかそんなのにはならないよん」

「……わかつたわ。よろしくお願いします」

「まつかせなさい。おもしろ可笑しくしてくるから」

雪ノ下が折れ、いつもの何処と無く胡散臭い笑みを浮かべた師匠は意気揚々と壇上へ上がつていく。

「おい、まだ間に合うつて、あれを止めろ」

「大丈夫よ、きつと。戸部君達が赤つ恥をかく事と、あの人に任せろ事、どっちが酷いことになると思う？」

「いや、俺と戸部だけなら恥をかいたって別に大丈夫だけど……」

「ああ、師匠は何か仕出かしてくるな」

「師匠？」

「あ、いや、それよりもほら。喋り始めるぞ」

「そうだよ。雪乃ちや——雪ノ下さん」

「後で、じっくりと、聞かせてもらおうわ」

ついうっかり、師匠呼びをしてしまったせいで、雪ノ下から冷たい視線を感じるようになるが、師匠が挨拶をしてその視線は反らされた。

隣では、ついうっかり、雪乃ちゃん呼びしてしまつたせいで、葉山が三浦さんから燃やされるかの様な嫉妬の視線を浴びていた。

○

「ひゃっはろー。皆楽しんでるかい？」

突然壇上に上がった師匠に驚いていた観客たちだが、喋り始めると会場から歓声が沸いた。

「今日は文化祭日和だったね」

会場にマイクを向けると、そうですねー。とレスポンスが響く。

「祭りも酣になつてるけど、そろそろ終了の時間が迫つちやつたんだよね」

今度は会場からええーと落胆した声が出てくる。この昼間に見たことのあるようなやり取りは、一体いつの間に仕込みを紛れ込ませたのだろうか。

「でもね。実行委員長がお祭りを終わらせたくないって校内の何処かに隠れちゃったの」

お昼の司会者から、どこぞの歌のお姉さんに早変わりをしたかのような口調で師匠は喋り続ける。

「文化祭のスローガンは『青春を、探す阿呆と眺める阿呆。同じ阿呆なら探してsing a song』だったよね」

悲しそうな口調から一転、抑揚のある明るい声で師匠は告げる。

「そこで皆には、これから委員長を探して貰います。無事見つけて連れてきた人にはなんと、デイスティニーランドとシーの3日分フリーチケットと、その隣のホテル2泊分をペアでプレゼントしちゃいます」

一拍置いて、今日の文化祭が始まってから一番の歓声が響いた。

「ルールは簡単。校内の何処かにいる委員長を最初に見つけて連れてきた人の勝ち。ただし、小さいお子様もいらつしやるので、誰かを怪我させてしまった。迷惑行為及び妨害行為をしてみました。等の違反者は即失格とします。基準としては、失格者は校内各地にいる実行委員や先生方が持っているカメラで撮られてしまいます。その失格者が

委員長を見つけてしまった場合は景品も没収」

「そうなつてしまつたら、悲しきかなこのチケツトは日の目を見ることなく終わつてしまふでしょう」

よよよ、と泣く真似をして言う師匠は堂に入つていて壇上で一人芝居をする女優のように見えた。

「彼女、彼氏にあげるもよし。友達と一緒にいくもよし。今日出会つた人と一緒にいくもよし。未来のパートナーのためにとつておくもよし。家族にプレゼントするもよし。一人で6日分楽しむもよし」

「最後に、委員長の顔はこちら」

後ろを振り向きながら突然現れたスクリーンに手を向けると、相模さんの顔がアップになり写し出される。

「というわけで、探す阿呆と眺める阿呆。同じ阿呆なら探してsing a song。委員長を見つけて青春も見つけちゃおうゲーム。スタート」

スタートの合図と共に会場にいたほぼ全員が早足で外に出ていった。

十六話

会場裏は会場の熱気とは裏腹に、皆が頭を抱えさながらお通夜のような雰囲気になっている。

「ああ、やってくれたわね」

「本当にどうしようか」

「どうするもこうするも、相模さんはこの事知らないだろ」

一番マシな結末としては相模さんが師匠と共謀してこの企画を考えていた場合だが、十中八九師匠の深謀で成り立った企画だろう。

「そうね。そう考えていた方がいいかも知れないわ。今となつては時間稼ぎも意味を成さないし、とにかく私達に出来るのは、参加している人間よりも早く彼女を保護すること」

「確かに、それしかないのかもな」

「この人数でか」

見渡すと、俺に雪ノ下、葉山、由比ヶ浜、戸部、三浦さん、その他有象無象。それに初期の頃から真面目に仕事をしてきた実行委員の十人しかいない

十対体育館満杯の人数。

それに、あっちの総指揮は師匠である。

いつの間に実行委員を味方、いや、手下につけたのかは知らないけども、結局、俺に
呟いたときからこうなることは決まっていたのだろう。

こんなのスパルタ軍でも即時降伏するレベルだ。

「でも、ここでぐだぐだしたって仕方ないよ。私と優美子は女子トイレを見てくるから、
ゆきのんは放送室に。ヒッキー達は心当たりのあるところを片っ端から」

「あーしたちにもインカムかしてよ。見つけたときに連絡しやすいっしょ」

実行委員Aからインカムを受け取り、彼女達は走っていく。

「はあ、どうしてこうなっちゃったかね」

「でも、陽乃さんの迷惑通りを阻止できる機会なんて早々ないだろ」

「確かにな。もうこうなりや自棄だ。さっさと相模さん見つけるぞ」

「今は良いけれど、帰ってきたら何故姉さんを師匠と呼ぶのか教えてもらおうから」

「わかったって。それと雪ノ下、放送室に着いたら相模さん用のカンペ作っておいてく
れ」

雪ノ下の返事を待たずに、葉山達と早足で会場裏を出ていく。

○

校庭はすでに多くの人が溢れ色んな所をさがしている。

火の中、水の中、草の中、森の中、鞆のなかも机のなかも、向かいのホーム、路地裏の窓、そんなとこにいるはずもないのに。

この混乱に乗じて、これ幸いと意中の女性に告白しようとしている野郎が居たが、振られていた。

振られた悲しみで校庭を走りながら去っていったが勿論、人混みの中で走るのは禁止と実行委員に写真を撮られていた。

こんな意図明白意味不明な行動に走り出し、ロマンチックエンジンを噴かしながら、自分だけのハッピーエンドを探す手前勝手な妄想を垂れ流し、迷走することの何が楽しいのか。

今まさに主役にならんとして委員長を探し回っている奴、時間を稼ごうと言った戸部達、由比ヶ浜に何かを言おうとした俺……

どいつもこいつも阿呆ばかりだ。

「この、御都合主義者共め」

隣を走る葉山達に聞こえるか聞こえないかと小さく呟く。

「そういえばさっきのあれ、なにげ俺っちも気になる」

「さっきのあれってなんだよ」

「そりゃー、なんかあのお姉さんを師匠とか呼んでた事に決まってるっしょ」

この非常事態に変わらぬ軽薄さで訊ねてきた戸部だが、ある意味その軽薄さが沈んでいた心を浮かせてくれた。

「お前には教えん」

「酷くないヒキタ二君」

「まあまあ、早く行こうじゃないか。俺はこつち側を探すから」

「うっし。じゃあ、二年後にシャボンデイ諸島で」

「一人で行つてろ。ついでにレットドラインの向こうから帰つてくんない」

「意外と良いツツコミじゃん。ヒキタ二君サッカー部戻つてこない？」

「何が悲しくて、お前と漫才するためにサッカー部に戻ならいけん」

　　楽しげに笑う戸部と葉山二人と別れて、校舎へと走つていく。

　　一人になり、委員長はどこにいるかと考えを廻らせる。

見付けづらい場所と言えば女子トイレや体育館裏の焼却場近く、又は立ち入り禁止区域だろう。きっとああいうタイプは自尊心と劣等感の間で震えているような小さい肝っ玉の持ち主に違いない。ソースは俺。

ましてや、副委員長が自分よりも優れていて、自分がただ足を引っ張つてしまう存在だと気付いてしまったら、誰だって隠れたいくなるだろう。

隠れる事によって、誰かが困り、それによって自分の必要性を確認したい。誰かに見つけてほしい。

でも、簡単には見つけてほしくない。

誰かに糾弾してほしい。

でも、一方的には責められたくない。

そんな人間が隠れるのは、女子トイレなんかじゃない。見つけようと思えば誰でも見つけることができ、且つ探すためだけに足踏み入れない所。

つまりは、立ち入り禁止区域の何処かになる。

立ち入り禁止区域は多分五箇所以上はあったはずだ。

手当たり次第に捜そうにも回りきれないだろう。

何カ所かを回れる最短距離を選びながら校舎の中を進む。

○

校舎内では、既に参加しているだろう人間が色々な教室やロッカーの中を探していた。

二階に上がると前を走る人が、一つの教室に吸い込まれるように入っている。

先を越されたかとその教室をよく見ると、すらりとした背丈のメイド服を着た人が立っていて、それに釣られるかのように男達が入っていつてらしかった。

その教室まで近付き、メイド服の人物に声をかける。

「本当にお前は何をやってるんだ」

「全員がコーヒー連合になったあと、喫茶店になった」

恥ずかしがって居るところが男心をくすぐるのだろう。教室内の視線は全て彼女に向かっている。

「意味不明だな」

「それよりもお客から話は聞いたよ。相模さんなら結構前に泣きながらここを走って行った。この先は階段しかないから、多分屋上じゃない？」

確かに屋上は立ち入り禁止区域。探そうとしなければ見向きもしない所であり、それっぽいわずらな青春気分も味わえるだろう。

「ここまで来る人達は足止めしといてあげるから、早く行ってあげな」

彼女の素っ気ないよう言う口調と、それに反した服装と柔らかい表情。それに目標がどこにいるかが判り、俺の頭の中は常夏にでもなってしまったに違いない。

「サンキュー、愛してるぜ川崎」

と思えば返せば、自室に引きこもり布団にくるまりながら叫び出すのが確実な台詞を口走っていた。

「バ、ババババカじゃないの……」

教室の中から来る彼女に釣られて入ったであろう野郎達の視線と、真つ赤になつた川崎を横目に走り出す。

他の人に気付かれないように、培つたステルス性能を全力で高めて屋上へと向かう。階段を上りきり、息を整えながら逸る気持ちを抑え、屋上の扉に手をかけた。

○

「どうせみんな、影で無能とか役立たずとか思つてたに決まつてるじゃん」

「うんうん。分かるぞ、その気持ち。何が『ははつ、結構真面目な御方なんですな』だよ。ははつ、の部分からドン引きしてるのが手に取るように分かつたぞ。教師がそんなにダメなのか。教師がダメで保母さんが良いのは何でなんだ」

「2人とも、そんなことないですつて。ああ、はちまーん。ちようど良いところに、助けてくれ」

扉の先では、こたつで鍋を囲みながら愚痴る相模さんと、ぐずる平塚先生と、それをあやす材木座の姿があつた。

「いや、この状況は想定外だわ」

「何を言っているのだ八幡。いいから何とかしてくれ」

「いや、うん。まあ、はい」

それまで、どうやって相模さんを会場に連れ戻すかを考えていたが、もうこのまま何

も見なかったことにして、家でカマクラと小町を猫可愛がりしたい気持ちをはぐくむくと沸き上がってくる。

流石にそれでは今まで頑張ってきた雪ノ下に申し訳がないのと、相模さんがほんの少しだけ哀想に思えて、開いていたこたつの一面に入った。

「何があつてこうなつたんだ。というか、韋駄天コタツつてお前のことだつたのかよ」

「うむ。よくぞ聞いてくれた。私の韋駄天コタツは、立ち入り禁止区域を移動しながらカップルをこたつに連行して、破局に導くように囁いて居たのだ。その輝かしい戦績は——」

どうにも話が長くなりそうだった為、鍋の中のちくわを材木座の鼻に突っ込んでおいた。

「熱っ、ちくわ熱っ」

「いや、どうでもいいからそこら辺は。何で先生と相模さんが居るのかだけ教えろ」

「わ、わかった。先ずは平塚教諭だが、何やら妖気のようなモノを垂れ流していた立ち入り禁止区域を通ろうとしたときに、その奥からフラフラになった教諭が通りがかって、それからずつと居座られて愚図っている」

大方、占いの所にでも行って、結婚できませんとか何とか言われたのだろう。

ちらりと先生達を見ると、どこか虚空を見つめながら二人ともぶつぶつと呟くだけ

で、会話にすらなっていないかった。

「その後、教諭の愚痴を屋上で聞いていたら、これまたフラフラとこちらのお嬢さんが来て、教諭がこの中に誘って今に至る」

「大体わかった。ほら、先生に相模さん。もう文化祭も終わりですよ」

二人に声をかけたら、他称腐った目をしている俺よりも腐った四つの目が睨んでくる。

「どうせあんただって、無能とかつて思ってるんでしょ。でも、あんたがあんなことさえ言わなければ」

「私の何が悪いって言うんだ。軽い女の方がいいのか。もういい、比企谷。お前が結婚してくれ」

「材木座、捌ききれない。平塚先生は任した」

喚く材木座を無視して、相模さんと対面する。

相模さんは俺を睨み付け、今にも掴みかかってきそうな雰囲気になっている。

「確かに、自分達が楽しむことが大事、と言ったのは俺だよな。でも、予算の決定、進捗状況の把握、外来の対応、書類整理、どれかひとつでもちゃんとやったのはあるか」

「そんなこと言われたって」

「全て雪ノ下任せで、会議の進行もろくにできない。無能って思われても仕方ないとは

思わないか」

「でも、雪ノ下さんはうちがやらなくても」

涙目で訴えかけてくる彼女だが、段々と語尾が小さくなり、心なしか縮こまってきてるような気もする。しかし、今は構わずに続ける。

「そこは、あいつも悪い。相模さんの中にもあると思うけど、自分の中で一定ラインに達してない奴は、全員そこらのモブみたいな考え方。多分、あいつはその一定ライン、求めるものが高すぎるんだと思う。しかも、人をたてるとかは苦手だろうし、自分で出来ることは全てこなす節がある」

「なら」

「でも、委員長は相模さんだ。役職には責任がある。それが嫌だったら、それこそ、そこら辺のモブにでもなっていたらよかった。だから、無能って思われても仕方ない」

言うだけのことをいってから、改めて相模さんを見ると手で顔を隠し、肩を震わせていた。

その姿をブーツと見ながら、なぜか小学校の頃の学級委員会を思い出した。

もちろん立場は逆で、三十人対一人だったが。

「でも、それは実行委員会限定だ。会議に参加してない大多数の人間は、相模さんのことをまだ有能かも無能かも分かってない」

相模さんの肩がピクリと動く。

「御都合主義者」

「えっ?」

「文化祭とか修学旅行とかのイベント事になると、誰もが勝手に大団円を求め、自分に都合の良い結末を願う御都合主義者になると俺は思ってる……馬鹿みたいだよな。そんな御都合主義者が罷り通るなら、今頃世界は平和になって、バブルは弾けず経済はうなぎ登り、俺は成田山の御本尊として祀られ目が煌めいてた筈だろ……それでも……」

勿論、大多数が文化祭の主役足り得ず、その幕をひっそりと降ろすだろう。

俺だって精々、走り回って空回りした男Aだ。

本当に馬鹿みたいだ……それでも、ちよつとぐらい信じてもいいじゃないか。俺が願っても叶わなかった、薔薇色のスクールライフを。

きつと、どこかにある俺の可能性を。

一息吐いてから、なるべく大仰な言い方をしようと立ち上がる。

「文化祭とは青春の押し売り、叩き売り。闇市ならば手段を選ばず。この手をとれば、今までの不祥事を一切合切引っくり返して貴女を御都合主義者たらしめてしんぜよう」

「ふふっ、なにそれ」

彼女は少しだけ笑った後、戸惑いながら差し出した手と俺を交互に見る。

「ねえ……まだ、間に合うかな？」

「今だからこそ」

「……わかった。うち、やってみる」

顔をあげた彼女の目元には涙がたまっていて、声も震えているが、俺を見るその目はさつきまでの目よりもいつも鏡で見る目よりもずっと綺麗だった。

「ありがとう。あと、色々ごめん」

「よし、行くか」

「ゴッしと目を袖で擦りながら彼女は立ち上がった。

「え、我もしかしてこのまま」

「まだ話は終わってないぞ材木座」

「……お空、綺麗」

中空に何かを見つけたのか、平塚先生の甘い初恋話を上の空で聞く材木座に手を合わせ、なむなむと拜んでから、インカムで雪ノ下に連絡をいれる。

「聴こえるか、相模さんを見つけた。体育館、いや校庭に集まるよう放送頼む」

「わかったわ。それとカンペ渡すから一回こっちにきて」

「ああ」

連絡を終えて、未だ上の空になっている材木座に声をかける。

「それと材木座。お前の事だから文化祭終了間際、浮かれている学生に花火でも打ち込もうと屋上に来たのだろう。で、その花火はこたつの中にでも隠していると。それで、のこのこお前の誘いに乗って屋上に来た俺を花火襲撃の共犯に仕立て上げようとした。そんなところだろ」

人の邪魔をする事にかけては、師匠とどっこいどっこいのこいつの事だ。そんな下らない計画でも立てていたに違いない。

「ぐぬぬ、良く分かったな。流石は我が朋友——」

「その花火。俺の合図で空に打ち上げろ」

「う、うむ。あいわかった。だが、その前に平塚教諭を何とかしてくれないか」

その言葉を無視して、相模さんの手を引き屋上から降りる。程なくして校内放送が響いた。

○

放送室に着いた俺達は、雪ノ下を交えて今の状況を斯く斯く然々と伝えた。

「うそ、今そんなことになってるの」

「そうよ。あのままだと事情を知らずに、見知らぬ誰かに追い回された挙げ句、強制的に壇上に上げられていたわね」

「一生もんのトラウマだな」

あと一步で大惨事になるところということで、相模さんの顔からは血の気が引き、小刻みに震えていた。

「放送では二十分後に校庭に集合と言ったから、十分でこのカンペを覚えて頂戴」

そう言つて雪ノ下が渡した紙は、少なく見積もつて原稿用紙二枚分はあろう物だった。

「いや、覚えられるか。二、三回読んだだけで時間なくなるわ」

「そうかしら」

可愛らしく小首を傾げられても困る。

誰もが、雪ノ下みたいにできる訳じゃないというのに。

「内容を忘れたら余計パニックになるだろ。こういうのは、ある程度言うべき言葉をメモするだけで十分だつての」

「……ありがとう。雪ノ下さん」

「依頼は達成できたようね」

深く頭を下げる相模さんに雪ノ下が微笑みながら答えた。依頼とは何だったのか、雪ノ下の微笑みはどんな意味なのか。聞きたいことは山ほどあったが、それを飲み込み雪ノ下の原稿から幾つかの単語を見繕つたメモ帳を相模さんへと渡し、放送室を後にした。

○

「えーっと、見つかつちやいました」

夕暮れ時、夜が徐々に支配の手を伸ばす中、壇上に上がった相模さんは開口一番そう言った。

目は赤く少し鼻声になっているのが遠くからでも分かるが、オーデイエンスにとつては些細なことなんだろう。ガヤガヤと騒ぎ立て、文化祭最後のサプライズの余韻に浸っている。

「ぶ、文化祭が終わったら……わ、私はきつと先生方に怒られてしまうかもしれないが、えー、皆さんにとつて……高校生活最初の文化祭、若しくは最後の文化祭、二度目の文化祭を少しでも盛り上げることができたのなら嬉しいことです」

喧騒が波のように引いていった。

けれども、白けたという事ではなく、外に向けて出ていた熱気が内側に籠ったような、そんな静けさの様に感じた。

その様子を見て材木座に連絡をかける。

相模さんはメモを持った左手を見ようとして顔を下に向けるが、そのメモを見ることなく顔を上げた。

「ある人が言いました。文化祭は誰もが自分にとつての大団円、ハッピーエンドを求め

る御都合主義者になるって。確かに雰囲気は浮かれて自分勝手に動いて怒られたり失敗した人も居たかもしれない」

「でもうちら高校生だよ。一日は短いし、春はもつと短いし、人生なんてきつともつと短い。今、阿呆になってハッピーエンドを求めないでいつ求めんの！つてうちは思う……大丈夫、失敗しても誰かが手を伸ばしてくれるし、うちだつてある人達みたいにしてもらつたみたいに手を伸ばすから。だから、文化祭が終わつても、みんな阿呆になつて学校生活たのしもう!!……だから、ありがとう」

材木座に命を下し、色とりどりの花火が夕焼けを染めていく。

籠つていた熱が爆ぜた。音は波になり人を飲み込んで伝搬され、師匠の演説の時よりも大きな歓声に包まれた相模さんはちらりとこつちを向いて照れたように笑つた。

「以上・閉会前に先生方への言い訳でした。続きまして、地域賞の発表に――」
「貴方、彼女に一体どんなメモを渡したのかしら」

雪ノ下が見つめて来るが、全くもつて見に覚えがない。高校生活阿呆になろうだなんて、メモに書くほどパツパラパーではない。

「いや、待て、冤罪だ。俺はそんなこと書いた覚えはないし、相模さんに阿呆になれだなんて言つた覚えもない」

「そう。まあ、いいわ。どうかとも思うけれど結果的には、そう悪い事にはならなかつた

のだから」

「そうだな。色々あったが、終わりよければ全て良しって感じた」

「あら、何時から貴方は御都合主義に傾倒するようになったのかしら？」

「……今日だけは、阿呆になってもいい日だろ。文化祭だしな」

「ふふっ。確かにそうね」

声を弾ませ楽しそうに話す雪ノ下の声が珍しく、思わず顔を向けると夕焼けが眩しいのか、少し目を細めた雪ノ下が微笑んでいる横顔が見えた。

十七話

結果的に相模さんの閉会式は成功を納めた。

最初こそ緊張した雰囲気を出していたが、観客が興奮しきっていた事もあり、締めの際には堂々とした態度で現代のジャンヌダルクかくやと観衆を導き、師匠が壇上上がった時よりも大きく文化祭史上最大瞬間風速を観測した歓声が校庭に響くこととなった。

これで彼女が恥をかく必要は無くなったわけだ。

閉会の言葉をいい終えた彼女は、俺や雪ノ下、葉山達にお礼を言ってから他の実行委員に謝りにいくと駆けていった。実行委員会の時から阿呆だの何だのと散々言っていたが、流石に師匠のあれでは可哀想過ぎるといふもの。それに最後には彼女も反省をした様であり、ならば俺や雪ノ下、葉山の多忙さを持ち出すのは不粋だろう。

「それで、貴方が姉さんを師匠と呼んでいた理由はなぜかしら」

文化祭がなんとか終了し安堵している俺に、雪ノ下が詰め寄り聞いてくる。

バナナで釘が打てるようになる程の視線を浴び、観念した俺は師匠と出会ったところから文化祭でどんなことをしろと言われたかなどを、自分は加害者でなく被害者側であ

るといふニュアンスを醸し出しながらぎっくりと説明した。

「また、阿呆なことを……」

頭を抱えながら雪ノ下は吐き出すように呟く。

「言つとくけど、俺と葉山も最初こそはお前の邪魔をしようとしたが、しつちやかめつちやかになつた後はそんなことしなかつたからな」

「分かつてるわ。自分のやつたことで首閉めて阿呆の骨頂じやない」

「まあまあ二人とも、大団円で終わつたから結果オーライでいいじやないか」

三浦さんからの詰問を逃れ、合流した葉山が納めようとしたが、この状況にした戦犯がふわりと何処からともなくやって来た。

「よくないよ。全くよくない」

「姉さん」

「せつかくもつと面白くなりそうだったのに、比企谷君がすぐ見つけちゃうんだもん。お姉さんつまんない」

「今回は流石にやり過ぎよ。姉さん」

ギリリと食い縛るように雪ノ下が言う。

「ちよつと、あの委員長ちゃんにはお灸を据えないとつて思つただけなんだけどなあ」

「それにしたつて、あれは可哀想だと思えますよ。師匠」

「陽乃さん。確かに俺もやり過ぎだと思っう」

「酷いよう。弟子の反乱が起きてる」

「ちゃんと聞いてるの?」

ハンカチに目を宛て壇上の時よりもわざとらしい、よよよと泣く演技に苛ついているのか、雪ノ下は地面をカツカツとならしている。

「今回は比企谷君も隼人も弟子としては、不真面目で最低だったけど、まあ楽しめた方から及第点をあげよう」

雪ノ下の苛立ちをよそに師匠は続けた。

「それと、雪乃ちゃん。今回は皆にしてやられたけど次はそうはいかないからね」

ビシツつとゆびを指して師匠は普通に歩いて帰っていった。

師匠が帰ったことにより、緊張した空気がへなへなと弛緩していく。

「……これで分かったら、あの人の弟子なんて直ぐに辞めなさい」

「もしかして、今までもこんなことって有ったりしたのか?」

「ここまで大事になることはやってこなかったけれど、どちらにしろ、とても下らないことをやってたのは確かよ」

「どんなことをやられてきたんだい?」

「そうね……あなた達なら言ってもいいかも知れないわね」

そう言うとポツリポツリと雪ノ下は語りだした。

○

姉妹間戦争。

師匠はそう名付けている。

事の始まりは彼女が中学生の頃。

彼女は幼き頃より、よく上履きを隠される生徒だったそうだ。女子の嫉妬や逆恨みだったり、男子が気を引く為だったりと原因は数多くあったが、彼女は犯人を精神的に追い詰めペシヤリと潰していった。

雪ノ下は過ぎた過去として淡々と話していたが、それでも彼女だって人間であり、上履きを隠されるという行為に全く傷付かなかった、なんてことは無かつただろう。

そんな時、師匠が彼女の上履きを桃色に染め上げたらしい。

「わーい、引つ掛かった。引つ掛かった」

と喜ぶ師匠がカンにさわり、卒業まで彼女はそのピンク色の上履きを使い続けたそう
だ。

「なくしても、見つかりやすい様になっただけよ」

愛憎が一体化したかのような笑みを浮かべ、彼女はそう話した。

高校になっても悪戯は止まらなかった。

読んでいた小説のしおりを全ページに挟まれる。

家にあるDVDを全てホラー映画に差し替えられる。

テレビと冷房のリモコンの中身をそっくり替えられる。

塩と砂糖、小麦粉と重曹、醤油とソースを入れ替えられる。e t c.

と、一人暮らしを始めてオートロックに住んでいる雪ノ下の部屋に忍び込んでするに
は割に合わない労力や技術力を駆使し、実に下らない悪戯ばかり師匠はしてきたそう
だ。

最初こそは下らないと一蹴していたそうだが、塵も積もればなんとやら。

高校二年生に上がった頃、彼女の堪忍袋の緒が切れた。

報復として師匠の家に忍び込んだ彼女は、トイレトーパーをキッチンペーパーに
すり替え、家の本棚全てをこち亀とゴルゴで埋め尽くした後、師匠名義で寿司を二十人
分頼んだらしい。

それからは報復に次ぐ報復で、端から見るとはなんともまあ可愛らしい悪戯合戦を繰
り広げていたと言うわけである。

「まあ、なんというか」

「阿呆だな」

聞いていた俺と葉山で出した結論は実に端的なものであった。不毛にも程があるだ

ろう。

「自分でもわかってるわ。それでも姉さんには負けたくなかったの」

とまあ、これが姉妹間戦争の小さき全容だった。今回の事もその延長線上に過ぎなかったということだ。

ともかくにも、割りを食ったのは俺と葉山、それに相模さんだと言うことは読者の皆さんにも想像に固くないはずである。

○

人生一寸先は闇。

俺達はその底知れぬ闇の中から、自分の益となるものを掬い出さなければならない。

そういう哲学を学ぶという口実の元に、師匠が闇鍋を提案した。たとえ闇の中であっても闇からの確に意中の具をつまみだせる技術は、生き馬の眼を抜くような現代社会を生き延びる際に必ず役に立つというが、甚だ疑問である。

その夜、師匠のマンションで催された闇鍋会に集まったのは、師匠に俺、雪ノ下雪乃、それに何故か一色いろはという葉山の自称弟子だった。

闇鍋会のルールは、各々食材を持ち込んでもいいが、煮るまでその正体は秘密にしておくということ。文化祭の一件や師匠からの日々の嫌がらせに腹を立てていた雪ノ下

は「闇鍋なのだから、何を持ってきてもいいのよね」と不適な笑みを浮かべていた。

日頃の鬱憤を晴らす為に言語を絶するものを入れるのではないかと俺は気が気ではなかった。

「大師匠に雪ノ下先輩、初めまして。一色いろはと申します。それに先輩は少しぶりです。レポートで来れない葉山師匠の名代として来ました。師匠が何時もお世話になっているようで、つまらないものですがこれを」

と彼女はころころと笑いながら俺と雪ノ下にはカステラを、師匠には桐の箱に入った何かを渡していた。

「へえ、あそこの亀の子束子か。将来有望だね」

「えへへ、ありがとうございます」

師匠にそこまで言わせるような逸品である亀の子束子。

後に聞いたところ、強靱で繊細な毛先がファンデルワールスなる力をむにやむにやっとして、どんなに頑丈な汚れも洗剤要らずで落とすという幻の一品らしい。

なぜ彼女がそんな品を持っていたのかは不明だが、葉山には勿体無いくらいの弟子であることは明らかだった。

決してカステラで買収されたわけではない。

「葉山には勿体無い程しつかりした人だよな」

「そうね。というより、何を教えてるのかしら」

「いえいえそんな。特にまだ教えてもらっていませんよ。ただ、着いていくばかりで」

魍魎と魍魎が跳梁する闇鍋会にするりと潜入した、一色いろは。彼女に会ったのは文化祭が終わってすぐのことだ。

亜麻色の髪を靡かせる乙女で可愛らしくはあるが、自分のことを可愛いとわかった上での打算的な行動が見える小悪魔の様な後輩である。

その気になれば俺なんかは手玉に取られ、それこそお手玉の如くぼんぼんと他の手玉に混ざり、材木座にでも無様なエンターテイメントを提供してしまうだろう。

好きなものは葉山とお菓子作り。

サッカー部のマネージャーとして葉山の後ろをついて回り、その事が切っ掛けで俺とも知り合った。当事者じゃない俺からすれば彼女が葉山に惚れているのは丸分かりだった。

それを問い質したところ、あっさりと認め、時々俺に相談するまでになっている。

押し掛けて弟子入りしてしまえと言ったのは他でもなく俺で、葉山も弟子入りを認めてはいないが渋々ながら彼女がそばにいるのを受け入れているようだ。

葉山は葉山で師匠とはため口をとれるような間柄ながらも雪ノ下とは過去に一悶着あったらしく、それでいて一色や三浦さんを側に置き女避けとして使っているようで、

というのだから隅に置けない。

爆発してしまえばいいと心の底から思う。

○

電気の消えた中で物を食べるというのは中々に不気味なことだ。しかも鍋を囲むのは三人の乙女と俺という奇つ怪な面々である。

「俺も葉山と同じクラスだからレポートあるんだけど」

と主張を試してみたが

「まあまあ、そういわないでくださいよ先輩」

「貴方が女性三人と鍋を囲める機会なんて一生に二度とないのだから、寧ろ喜ぶべきではないかしら」

「まあ、今回も〈印刷所〉に頼めば良いじゃない。御安くしておくよ」

と悉く却下を出された。

イケメン無罪とでも言うのか。

「なんですかこれ、うにようによしてますっ」

と一色が悲鳴を上げて放り投げたものが俺の額に当たった。後から分かった事だが、ただのちぢれ麵だったらしい。暗闇では細長い虫のように感じた。

「なんだこれ、誰かエイリアンのへその緒でも入れたのか」

「そんな妙ちくりんな物、貴方しか入れないのだから責任もって食べなさい」

「いやいやいや、無理だつてこれ」

「第一陣は変なもの入ってないから安心して食べていいよ」

と妙に先行きが不安になる言い方をしたのだが仕方なしに箸を進めた。

何の気なしに掬った丸っこい物体にかぶり付いていると一色の方から声が出た。

「大師匠、ちよつと相談が……」

「なーに？」

「もしかしたら私、生徒会長に祭り上げられてしまいかもしれないですよ」

軽い口調とは裏腹に何処か切羽詰まった雰囲気を一色の方から感じる。

「良かったじゃん。なったら生徒会長特権で色々出来るんじゃない？」

「でも、ですね……」

「えー、何が嫌なの？やってみたら良いのに」

生徒会長になるのが嫌で知恵を借りようとしたのに、逆に面白がられて師匠から後押しを受けるような形になって困っているらしい。

暗闇でもなんとなく一色があたふたしているように見える。

「姉さん。あまりそういったものは無理強いきせるものではないわ」

「うーん。じゃあ分かった。もしいろはちゃんが生徒会長になったら役員に隼人と比企

谷くんもつけてあげる」

「分かりました。やります」

この変わり身の早さには舌を巻かざるを得ない。

きつと彼女の中では、自分の利益、不利益と俺の不利益を天秤にかけた結果、驚くべき初速で自分の利益へと傾いたはずだ。

「いや、師匠。俺と葉山の意志は」

「これも、弟子としての修行だよ」

「はあ、阿呆らしい。勝手にしなさい」

予期せぬ生徒会入りに断固抗議しようと思ったが、雪ノ下も匙を投げた今、なんとか雪ノ下をこちらの陣営に引き込みたい所だ。

「なあ、雪ノ下さんや奉仕部に依頼がー」

「ごめんなさい。臨時休部中なの」

言い終わる前に言葉を被せられ、師匠と一色を納得させる言葉も見付からない。

最早、ぐぬぬと唸るだけしか出来なかった。

十八話

何やらとてつもない時間が流れた気もするが、暗闇の中に居ると時間の感覚が分からなくなるのだろう。具体的には三ヶ月程。

だが、実際に闇鍋が始まってから、未だ一時間しか経っていないはずである。これが常に時間がわかるスマホを持ち歩く現代人の業なのかと、第三陣まで食べ進めなぜか甘い鍋に変わり果てた物を目の前に現実から目を背けるように呟く。

「誰だよ。あんこ入れたの」

「それ私です。ちなみにお手製です」

この世の甘味にありつたけの怨みを込めたあんこへ八つ当たりを少し嬉しそうな声色で一色は受け流した。俺が苦しんでいる様子がさぞお気に召したのだろう。

「お手製かどうかはどうでもいい」

「そういう貴方もMAXコーヒー入れたわね。お鍋が甘ったるいわ」

「馬鹿言え。MAXコーヒーは何にだって合う」

「そんなわけないじゃん。うわっ、茶巾にチョコ入ってる」

三人集えば姦しいとは言うが、想像以上に皆のテンションがおかしい。箸が転んで

も、何を掴んでも俺がMAXコーヒの善さを力説しても彼女達はけらけらと笑っている。

誰かが怪しいキノコでも入れたのだろうか。

「みんな。私は、マシユマロなんか入れてないからね」

師匠はどうやらマシユマロを掴んだ様で静かに宣言をしていた。

「マシユマロは私よ。でも、姉さん。お酒入れたでしょう。少しアルコールの臭いがするわ。それに私達は未成年よ」

「大丈夫、大丈夫。普通の料理だっついていれてるし、煮てればアルコールは飛ぶから。それに何より味に深みが出るよ」

言われてみれば確かに消毒液のような臭いが微かにしている。テンションがおかしいのは、このお酒の匂いのせいかもしれない。

というよりも、鍋にお酒を入れる物ではない。

「最早深すぎて何が何だか分かりません」

「底は浅いけど深淵なる鍋だね」

その後、師匠命名の底の浅い深淵なる鍋に浸かったマシユマロが纏わりついた謎の肉をたべ、あんこ味のキノコを食べた。

皆一様に訳のわからないものを食べたので余計に腹が膨れ、そこから先は余り鍋に手

を付けずにあれこれと話すことが多くなった。

しかし、十分もするとお酒が入っていたせいも、変なものばかり食べたせいも分らないが、一色の声が途中からしなくなつた。不気味な甘つたるい鍋を目の前に遂に逃亡でもしたのでらうか。

「一色生きてるか？」

「ダメです。死んでます。もう食べられません」

逃亡はしていないようだが、苦しそうに声を絞りだし一色は答えた。明日は休みなので別にほつとも良いのだが、葉山の代わりとは言え女の子。更には紳士であれと常日頃から自戒してもいる俺は、ここは一つ元氣を出して貰おうと小嘯をすることにした。

決してあんこの恨みをここで果たそうという事ではない。

「そうか。なら、一色が死んでる間にこいつの恋の話でもしようか」

「なにそれ、なにそれ」

「へい、へーいっ」

「女子がする反応じゃないな」

もつと繊細微妙でふはふはした可愛いものに目がない乙女なら、ふえつ、とか、はわわつ、とか、あうつ、とか反応してくれたはず。

「いいんですよ。先輩しか男子はいないんですから。それとも何ですか？ふえつ、だの、あわわ、だの、はうつ、だのと反応すれば良かったですか？」

凶星である。

「い、いや、そんなことは無いぞ」

「気持ち悪い擬音が二次元の中にしか溢れてない時点でそんな女の子はいないって気づいてください」

「ここに居るのが俺じゃなくなつて葉山だったら？」

「言うのも吝かではないです」

しれつと言いつつ一色の言葉に顔面格差社会ここに極まれりと軽く絶望を抱いた。

これならばいっそのこと神様が全人類の顔を均一に作つた方が戦争は無くなり世界は平和になったのではないか。然る後、健全な肉体と精神を俺に与えてくれればなおのこと良かったのではないか。

「ほらみたことか。それでだな、実は葉山に弟子入りした切っ掛けなんだが、どうすれば葉山ともっと近づけるかを相談されて、だったら弟子にでもなればいいって言ったのが俺なんだよ」

「成る程。それで、葉山くんの弟子に」

「嘘です。嘘つぱちです」

「やつぱり元気じゃないか。それで、この前なんか泣きながら電話で……」
「それで、それで!？」

「黙秘権ですつ」

「最近やけに貴女とその男や葉山くんが一緒に居ると思つたら、二人はそんな仲だったのね」

「今時の高校生は進んでるんだねえ」

「まだ、進めてないみたいだけどな」

「黙秘権を主張します。弁護士を要求しますつ」

笑いながら言う雪ノ下姉妹ときやあきやあと叫ぶ一色の声を聞きながら鍋に手を伸ばす。

「あれ、これ食いもんじゃないな」

箸で掴んだ物はむにゅつとしていて、布で出来た先に金属の輪っかがついてるようだ。

「食べれないものを入れちゃダメだよ」

「そろそろ窓開けようかしら」

「私は電気つけに行きますね」

電気をつけて目に飛び込んできたのはパンさんのストラップで、皿の上に何処か不機

嫌そうに鎮座ましましていたそれは、鍋の汁を吸って茶色に変わっていた。

「勿体ない。誰が入れたのかな」

「私じゃありませんよ。でも、かわいいですね」

「パンさん……」

その表情からして全員が見に覚えが無いものらしい。

「洗って来るわ」

洗面所に着き、よくよく観察するとそのふてぶてしい顔付きに、どこぞのパンクロッカーのような模様が入った熊らしき生物で、普段と違うスカーフを巻いていた。

そのパンクロッカーなグリズリー然としたそいつを北極熊に戻す作業に時間を取られ、帰ってきた頃には一色は船をこぎ、雪ノ下と師匠は話ながら後片付けをしていた。

「どこか遠くに行きたいな」

「遠くにつて、またそうやって訳の分からないことを」

「誰も登った事のない山、誰も潜った事のない海、見たこともない景色。そんな誰も知らないところ」

「私達はまだ学生。そんなこと出来るわけじゃないじゃない。行きたかったら冒険家にならなさい」

「んーそうだよねえ」

「この、酔っ払い」

「えへへ」

姉妹間戦争と銘打ち、普段敵対しているとは思えないような、姉妹らしい会話をしている見てしまったこつちがなぜか恥ずかしくなってしまうという怪現象を体験し、会話が一段落した頃、自分の存在を確認させるためにわざと大きめの声をだした。

「洗ってきたら中々に愛らしい顔をしてた」

その声に反応したのか、船を漕いでいた一色が起き上がり

「あー先輩。これ、私がもらって良いですか？」

と言った。

別段反対するものじゃないと思ひ、頷きながら他の二人を見ると

「……ええ、良いと思うわ」

「良いんじゃない。後で隼人にも見せながら思い出話してあげれば」

と同意していた。

「夜も遅いし明日も休みだし、いろはちゃんと雪乃ちゃんは泊まって行きなさい」

「じゃあ、俺はこれで」

乙女の花園に足を踏み入れる事など出来るわけもなく、すぐごとと師匠の家を後にした。

十九話

闇鍋から何日か経った冬のある日。

というより祭りの当日、師匠と俺とはある屋台のラーメン屋を目指していた。

何でもその屋台では猫で出汁を取っているという。真偽のほどは定かではないがその味は無類らしい。

いつしか俺は猫ラーメンとも言われている屋台を探しにふらふらと夜の街へ抜け出し散策するのが日課となっていた。

猫を出汁にするのはとても気が引けるが、食欲と探求心には勝てなかったよ。

さらに言えば、愛しき妹の小町は

「今日は友達とお祭りに行ってくるから晩御飯は自分でなんとかしてね」

とのたまい出て行ってしまった。

家にあるのは数日前に由比ヶ浜が持ってきてくれたクッキーと常備しているマッ缶だけだったので、どうしようかと悩んでいると師匠が話したい事があるからと半ば拉致のように猫ラーメンへと連れ去られた。

あれほど目を更にして探していた難攻不落の猫ラーメンも師匠の手にかかれば鍋で

コロンと愛らしく丸まる子猫同然だった。師匠に連れられて意気揚揚と高架下へ向かうと、ぼつりと佇む屋台を見つけた。

「大将。いつもの」

「いつ来たってここには、ラーメンしか置いてないよ」

「つれないなあ、付き合ってくれても良いのに」

ぶくりと頬を膨らませ不貞腐れる師匠を見ながら、慣れ親しんでいる人に向けるやりとりで少しの嫉妬と意外とここに来てるんだらうかという疑問を覚えた。

「師匠はよく来るんですか？」

「うん。愚痴を聞いてもらったり色々だね」

「師匠にも愚痴を言いたくなる時なんてあるんですね」

「そりゃあ、もう。弟子が不真面目だったり、弟子がダメダメだったり」

「これでも頑張ってるんですけどね」

「誉めてたりもするけどな」

「ダメだよ大将。弟子は叩いて伸ばすんだから」

ここ最近、姉妹間戦争だの闇鍋だので師匠の意外な一面をよく見る気がするが、少しは親しい仲になれたのだろうか。

緩む顔を見せないよう、ラーメンを食べた。

○

それから師匠は呼び出したのにも関わらず、黙ったまま猫ラーメンを後にする。祭りをやっているだけあって大通りは人が多く、自然と人の少ない公園へと足が向かった。

それでも師匠は喋らずにぼてぼてと歩き続け、焦った俺は何かを話さなくては、と話題を捻り出そうとしていた。

「文化祭で占い師がいました」

「うん」

「言われたんですよ。後悔しないように好機を捕まえろって」

「面白いことを言う占い師だね」

「俺は師匠に会わなかったらどうなってたんでしょうか」

「んー、どうだろうね」

何処と無く上の空で聞いている師匠に続けて言う。

「思うんですよ。俺は自分の意見を持たず、他人に振り回されてきただけじゃないのか。自分の可能性というものを、もっとちゃんと考えるべきだっんじゃないか。自分の力で好機を掴んで、違う可能性を掴まなきゃ駄目なんじゃないかって」

話をしているうちに自分の中にあるもやもやとした感情が形作られていった。それは、文化祭であり闇鍋である。

自分が青春を謳歌出来ているかと言われれば、多分否定は出来ないのだろう。皆でわあわあとかをする事への抵抗も少なくなっている。きつと一年生の頃の自分の自分を見たら、このリア充めつ、と心の唾を吐き出しているに違いない。だが、当事者であるという実感が持てなかった。何処か第三者の目線で見ているかの様な、青春の輪を皆で囲んでいる中、真ん中に一人で座つて目を瞑り、後ろの正面が誰かを当てている。そんな疎外感や焦燥感が常にあつた。

だからこそ文化祭では御都合主義に傾倒して、柄にもなく闇鍋にも参加をしたのかもしれない。

「好機ねえ……」

頭をかりかりときながら、俺を見て言った。

「可能性という言葉をところ構わず使っちゃだめだよ。人間は生まれた時から平等じゃないもの。えてしてなりえないものの中にはあるのよ。君はバニーガールになれる？ 大工になれる？ ひとつなぎの大秘宝を手にする海賊になれる？ スーパーハッカーになれる？」

「……なれないです」

そんな詭弁じみた言葉に若干不貞腐れる俺を見て、師匠は頷きながら続ける。

「人の苦悩の大半は、あり得たかもしれない可能性を妄想するから起こるの。人気者に、

頭がよく、目が腐っていない……そんな宛にならない可能性に望みを掛けるのがいけないのよ。確かに私たちは、小さな頃からテストの点数、運動会、容姿、性格……良いことは善と教えられてきて今日まで生きてきた。だからそう思うのかもしれないとも思うわ。でもね、君は今まで生きてここにいる。君がここまで来たのは可能性を信じたからじゃなくって不可能性を見極めて来たからよ」

「酷い言われようですね」

「それでも、認めてあげなさい。ここにいる君は不真面目で目が腐っていて、人気者でもない。運動神経も抜群に良いってことはないし、取り立てて頭が良い訳でもない。私の頼んだことを斜め下の方法で解決したりするけど、それでも、文化祭で下手を打ったあの委員長ちゃんを見捨てないであげるとどこか後ろめたい優しさを持つてる」

本当に酷い言い草である。

思いもよらず自分の本質を当てられた事に、このまま夜の公園でぎゃあああと叫んでしまいたくなるのをぐつと堪えて続きを待った。

「比企谷君はいわゆる桃色の学生生活を満喫できる訳がない。何故ならこの世は実に雑多な色で溢れているから。そのカラフルな色彩の中で私たちは迷いながら生きているのよ。時に眩しくて目がくらんだり、隣が青く見えたりする。でも、それは関係ないの」
「だから、これからの人生の中で、どうにもならない事、どうにもできない事なんていく

らでもある。それは私が保障するからどっしりかまえておきなさい」

師匠の言葉は中々な説得力を持っていて、そうなのかもとも思わされたが、それでも可能性を信じて何が悪い。理想を追って何がいけない、と思う。

過去を天真爛漫に肯定し、今の自分を大いなる愛情を持ち抱き締めてやることなんか出来るはずがない。俺には果たして、人生の選択肢は無いとでも言うのだろうか？

無いと言うなら、あがく意味なんてあるのか、そんなのは運命論じゃないのか。

「なら……なら相模さんは何だったんですか。彼女は文化祭で御都合主義のような最良の結果を出せた。それは彼女の可能性だったんじゃないですか？」

「そうだねえ。偶々彼女が奉仕部に依頼を持ち込んで、偶然部長が雪乃ちゃんで、思い掛けず私が雪乃ちゃんの邪魔を君達に依頼して、奇跡的に私がキャッチコピーを決める日に来て、予想外に彼女が終わりの挨拶を逃げ出し、計らずも私が皆を誘導して、何故か君の前を走る人が特定の場所に吸い込まれるように向かって、奇遇にも君が最初に相模さんを見つけ、コペルニクスの転回で彼女が決心をする……これは彼女にとっての可能性だったのかな？それとも誰かにとっての必然性だったのかな？」

そんなちよつとした俺の反抗を、あたかもあれが最初から師匠の手の内にあつたかのような口振りで捲し立てられ思わず背筋にぞぞつと悪寒が走った。

師匠にとっての相模さんは舞台装置のようなものだったのだろうか。

師匠にとつての雪ノ下はどんなものだろうか？

師匠にとつての葉山や俺はなんだろうか？

「師匠は何のために、あんなことをしているんですか？」

いつも浮かべる胡散臭い笑顔に気圧され、気が付けばそんな言葉が口を衝いて出ていた。

「それは雪乃ちゃんのこと？」

「そうです」

ふむと顎に手を当てて考える素振りをしてから師匠は話始める。

「……知ってるかもしれないけど、昔の雪乃ちゃんは今よりもっと焦っていたの」

「何に、ですか？」

「親とか、周りとか、出来る姉とかで……多分雪乃ちゃんは私みたいになりたかったんだと思う」

「師匠のようなちやらんぼらんに？」

師匠が二人居る恐ろしい幻影が脳裏に浮かび、思わずそう言った。

「酷いなあ。こう見えても雪乃ちゃんが高校生になるまではもうちよつとマシだったんだから。でも、私はそんなじゃない。私なんか目指さなくても良いんだって言いたかったの」

「……雪乃ちゃんは強い子よ。私がちよつかいなんて出さなかったら、自分の道を一心不乱に進み続けて、他の色に染まらず、何でも最短でたどり着くようになると思う」

「でも、そんな一本道の先にある世界で高いところまで登っても、そこから見える景色はちつとも綺麗じゃないと思う。どうせなら、雪乃ちゃんには良い景色を見てほしいから」

すつ、と様々なものが落ちていった気がした。

なんのことはない。ただ愛情表現が苦手な極度のシスコンだっただけの話。

戦争とは名ばかりの、小学生の男子が好きな子にちよつかいを出してしまうような、そんな他愛のない事だった。そんな彼女だからこそ、俺達に無理難題を押し付け相模さんを追い詰め、雪ノ下と対立もする。

陽乃さんの、私なりの愛……だったのだ。

とてつもなく傍迷惑ではあるが。

「まあ、それも今日までなんだけど」

遠い目をしながら彼女は言った。

「は？…どういうことですか」

「あれ、言ってなかったっけ？明日から、ちよつとばかり遠いところに行くの」

「初耳なんですけど」

その言葉に冷や水を浴びせられた様な衝撃を受けたが、何でそんないきなり、と言ったところで、陽乃さんの中ではもう決定事項であり、俺なんかがいまさら何を言ってもきつと変わることはないだろう。

「と、言う訳で比企谷君には雪乃ちゃんのこと任せるけど大丈夫だね」

「いやいやいや、無理ですって、俺なんか任される奴じゃないですよあいつは」

「大丈夫だって、隼人君にもお願いしたからいろいろはちゃん達と3人で支えてあげて、ねっ」

「……はあ、分かりましたよ」

「うんうん、聞き分けのいい子はお姉さん好きだぞ」

思えば、何かしらのサインを俺や葉山に送っていたのかもしれないが、それも今と成ってはすべてが遅すぎた。

なら俺にできることと言ったら、きつとこうやって送り出すことしかない。

「いやー、それにしてもこの八カ月間は、私にとっても最高だったよ。君たちを弟子にしたかいがあった」

陽乃さんの浮かべた笑顔に驚いた。他の人には分からないであろう、胡散臭い作り笑いをいつも張り付かせている彼女が、こんなにも寂しそうな笑顔を見せているのだから。

出来れば、こんな顔は見たくなかったと素直に思った。

「なに今生の別れみたいなこと言ってるんですか。貴女のことだからひよっこり戻ってくるんでしょう」

「分からない。3年ぐらいは戻らないかも」

3年間。それは17年程度しか生けてない俺からして、あまりにも長い時間だ。高校を卒業して何処かの大学に入って、成人になって、それで何をしているのだろう。

「もしくは、比企谷君の旅が終わる頃か……まあ、その時は紙吹雪の1つでも咲かせて迎えてあげるよ」

「葉山は知ってるんですか」

「昨日言ったら目を丸くしながら驚いてたよ」

にやりと笑った。

最初は、というより今でも胡散臭い笑顔と思っているけれど、もしかしたら俺も葉山もこの笑顔見たさで弟子を続けていたのかもしれない。

「そう言うことだから後はよろしくね。それとこれ、クリスマスプレゼントと文化祭の時の景品」

「っ、ちよつと待ってください」

俺の言葉を聞きもせず、彼女はいつもと同じように颯爽と去ってしまった。

手元に残ったのは、何時の日か彼女が俺に所望したやけにリアルなカマクラのぬいぐるみとディスプレイニーランドのチケットと俺の旅云々と言う意味深な言葉だけだった。

○

自分の周りの物全ての痕跡を消して風のように居なくなつた陽乃さん。

今どこで何をやっているかも分からないまま、年が明けて一月が過ぎた。

雪ノ下は越えるべきなのか越えてはいけないのかどうかは解らない壁を失つたからか、それとも悪戯合戦という張り合いが無くなつたからなのか、表向きはいつも通りに見えて、その実いまだに晴れることはなく俺と葉山、それに時々一色も顔を付き合わせる度彼女に、彼女を託した陽乃さんに何が出来たのかを相談する日々が続いていた。

そしてなぜか、海老名さんが鼻血を垂らしているのがよく見られる今日この頃。

放課後に葉山と二人、サイゼリアでドリンクバーを頼み時間を潰す。

「なあ」

「どうした?」

「俺はあんなに近くに居たのに結局、最後の最後まで陽乃さんの事理解できなかつた。それに今も雪ノ下さんに何もしてあげられない」

葉山は柄にもなく、おセンチな気分にもなつてきているのだろう。こんな話を聞かされる俺の身にもなつてみると言いたい。例えばこれが一色であつたなら「弱つてる師匠も

素敵ネ」とか思いながら親身に話を聞いてあげるのだろうか、俺にそんな気は殊更ない。むしろあつたら気持ち悪いだろう。

しかし、その気持ちに分からないと言うほど精神的無頼漢ではないと自負しているため、ふんふんと唸った後、持論を述べることにした。

「……しようがねえだろ。俺らは高校生だしな」

「高校生かどうかは関係しないんじゃないか？」

「ほら、俺らが小学生の時、中学生つて大人だと思つてた。でもいざ中学生になったら、こんなもんかつて思つたり」

「確かに中学生の時も高校生になったら何かが変わるつて思つてたな」

「きつと俺らにとつて師匠はそんな感じだろ。それでも、どうしようもなく時間は陸續きで、いきなり大人になんかなれはしない。ならどうして師匠は大人だと、理解できない程の存在だと勘違いすると思う？」

「新しい環境。俺達にとつて未知の事が彼女にとつては既知だから……か」

「知らないことは知らないでこの際、神棚にでも上げて飾っておけばいい。その棚に上げて飾つた師匠を眺めて思つたことは」

「……シスコン？」

「なら、それが陽乃さんなんだろ」

「そんなもんか」

「そんなもんだ。と言つても、それを知つたところで雪ノ下にしてあげられる事なんて殆ど無いけどな」

「せめて、元気付けることでも出来たら」

「ずっと音をたててストローを吸う。」

このままでは、陽乃さんが託した事すらまともにできない。

いや、それ以前に雪ノ下が沈んでいるのを余り見たくはない。

一つだけ頭の中に考えていた事はあつたが、余りこの方法は取りたくなかつた。それでもそれにかけてみるしかないのかもしれない。

「なあ、お前これから暇か？」

「いや。着替えた後に優美子達とカラオケに行く」

「そこに一色はいるか」

「いるけど、どうかしたか？」

「いや、何でもない。俺も用事あるから先行くわ」

食べた分の代金を葉山に渡してサイゼリアを出た後、自称葉山の弟子に電話をかけた。

○

次の日、早く学校についた俺は教室で寝ていた。

今から行われる一連の出来事をできるだけ多くの人に目撃させるのが目的である。クラスの半分以上が登校してきた時、扉が勢いよく開けられ

「比企谷あぁ」

と怒鳴り声をあげた葉山が入ってきた。

全員が驚きと困惑、若干の笑いが混じった表情をする中、どこどかと人ごみをかき分け俺の前に立つ。

「このっ、よくも、よくも制服を……」

怒りで言葉が出ないとはこう言うことだろう。

葉山の制服は、色鮮やかな黄色に染まっていた。

「よく似合っているじゃないか。ちよつとゲツツってやってみ」

「違う、どうして、お前が、こんなことをやったかって聞いているんだ」

わなわなと震えている葉山に対して、俺たちだけが分かる合言葉をいった。

「俺なりの愛だよ」

葉山は自分の椅子の上に置いてあるカマクラのぬいぐるみを見てた後、合点がいったような表情で

「んな、汚いもんいるか」

と笑った。

愛、すなわち結婚、キマシタワーと叫び、教室を赤く染めた人物がいたが、気にせず葉山は続ける。

「お前がその気ならば、こつちにだつて考えがある。せいぜい身の回りに気を付けるんだな」

ニヤリとして、席に戻った葉山は三浦さんや戸部から質問攻めにあつていたが、全部普段の爽やかスマイルで受け流していた。

その後は、教師に何を聞かれても何事もなかったかのように黄色い制服で授業を受ける葉山と、好奇と敵意の視線に晒された俺以外は特に何事もなかったかのように午後の授業まで進んだ。

普段、体育の授業はやれ二人組を作れだの、やれチーム戦だのでめんどくさいと思つているけれど、六限目となれば話は別だ。

適当に流しているだけで時間が過ぎるので、授業が五限で終わるような気分になる。

高かった日差しも傾きかけ、六限の授業が終わった後もやけに絡んでくる戸部以外はいつも通り、独りで練習し教室に戻ると、俺の机に真つピンクな制服を着て前衛的なポーズをとつた等身大パンさんが座っていた。

ああ、やってくれたな葉山。小町になんて説明したらいいんだ。と

恭しくパンさんから制服を脱がせ、着替えているとにやにやした黄色い制服の葉山が近づいて来た。

「どうしたんだい、その前衛的な制服は？」

「お前が言うな」

「ちよつとカメラもつて、あつはっつて奇声挙げてみるよ」

「なんでパーの方なんだ。大体体育の時間お前ずつと居ただろう」

「出来た弟子が居たもんでね」

「お前、一色を使って……」

2人そろつたら売れない芸人にしか見えない光景に、終礼をしに来た教師が本日二度目の反応をして、放課後になる。

俺と葉山はむすつとしながら特に話もなく奉仕部の部室へと向かう。

桃色の制服を着る俺の手には、等身大パンさん。

黄色の制服を着る葉山の手には、リアルなカマクラ。

もちろん、その道中でも好機の目にさらされていだが、そんなことはどうでもよかつた。

この恰好をみた雪ノ下はどう反応をするだろうか。

『また阿呆なことを……』

と笑ってくれるだろうか、呆れるだろうか、それとも俺達と陽乃さんからのプレゼントに興味を示すのか。

まあなんでもいい。少しでも気が紛れてくれれば。

隣を歩く葉山もきつと同じことを考えているのか口角をあげている。

きつと鏡を見たら俺も表情を浮かべているのだろう。

俺もこいつも彼女に影響を受けすぎた。

○

きつとその後の事は語るに値しないだろう。

雪ノ下に由比ヶ浜や川崎、一色の生徒会に入る約束や文化祭で助けた相模さん。

方々に作った約束や借りや貸しをどうしたか。

デイスティニーランドの2泊ペアチケットがどうなったか。

成就しなかった恋。成就した恋を語るのも、それで一喜一憂するのも阿呆のすることだ。

諸兄達だって、そんなMAXコーヒーよりも甘ったるくゴーヤより苦い読み物を見せられても困惑すること間違いなしだろう。

俺だって一応書いても見たが、ただただ俺が延々と空回りしてたり勘違いしていたり

する喜悲劇になり、材木座の有害指定図書よりも不気味なものになってしまったので、タンスの引き出しへとしまふ他なかったのだ。

そんな薔薇色のスクールライフとまでは言わないが、人並みの高校生活を送ることになった。それでもやっぱり思ってしまう。

もし、師匠と出会わなかったら。もし、師匠を引き留められたなら。もし、もし、もし……

今にして思えば、陽乃さんと葉山や一色との何気ない会話、雪ノ下姉妹の悪戯合戦も懐かしい。

○

「つたく、どうしてこんな解決法でしか出来ないのか君は。乗った俺も俺だけだ」

「しようがないだろ。師匠が言うに俺らは、不真面目で最低な人間だけど最高の弟子らしいからな」

「あつ、師匠に先輩。遅いですよ」

視線の先には、闇鍋の時のパンさんのキーホルダーをくるくると回す一色が待機していて、小声で俺達を呼んだ。

「お前、後で覚えてろよ」

「えー、似合ってますよ先輩。カメラ撮りながら、あつはーって言うてみてください」

「だから、何でパーの方なんだよ」

「でもこれ、どうですかね。このシニールな光景」

珍妙な格好をした二人に生徒会長という組合せ。

道行く人が端に寄るのも仕方がないだろう。

俺だつてそんな奴等を見かけたら関わり合いになりたくはない。

「仕方ないさ。これが師匠と俺達なりの愛つてやつなんだから」

「まあ、俺だつたらこんなめんどくさそうなのいらねえけどな」

「またまた、そんなこと言つて捻デレなんですから」

「なにその、そこはかとなし不快さを感じる造語」

「2人ともそのぐらいにして……よし、それじゃあ開けるぞ」

話している内についての間にか奉仕部の目の前に来ていたらしい。

深呼吸をした後、3人でニヤリと顔を見合わせ扉に手を掛ける。

こうして、偉大にして下らない姉妹間戦争を引き継いだ自虐的代理姉妹戦争が幕を開けた。

四畳紀 同位点四角関係

二十話

当日、俺はピカピカの高校一年生。

ある事情で一番大事な時期を病院で過ごすという失態をおかし、クラスの中でライフジャケットでも着用しているのではないかと言うほど浮きに浮く存在になってしまっていたが、目の前には部活動という名の薔薇色のスクールライフへの扉が無数に開かれていた筈だった。

そう、あの部活の扉を叩きさえしなければ。

扉の先は雪国でもなければ、魔法学校に繋がっている訳でもなく、ただ単にみようちくりんな秘密組織がたあっただけであり、この場所に手をかけなければ、忌まわしい妖怪とした男と出会うことはなかった。

奴に出会わなければ、己に襲い掛かる不利益を悉く振り払い、己に降り注ぐ幸せを享受していたに違いない。

その決定的な間違いをおかしてしまったピカピカの一年生から早いこと一年と半分以上が過ぎ、高校二年生の冬という世の中の人間が人生の中でも一、二を争うほどの青

春真つ只中にいると主張するであろう時期に差し掛かった俺だったが、これはその頃に起きた俺と三人の女性を巡るリア王ばりの劇的な事件だった。

しかしながら、これは悲劇でもなければ喜劇でもない。

もし、これを読み悲劇だと感じる人間が居れば、子犬の散歩で泣き出してしまふほどの徳光的感性を持った人物か、歩きスマホをしながら読んだせいで足の小指をぶつけたかのどちらかに決まっている。

また、これを読み喜劇だと笑い転げる人物が居れば、妹の小町に纏わりつく悪い虫を追い払うがごとく地の果てまで追い回し、マツ缶の湯船に沈めた後、虫の多い夏の千葉村に放置するだろう。

そんな輩はまとわりつく糖分の不快感と虫に喰われて痒みに悶えればいい。

かの発明王は、人生そのものが学習の場だと言ったらしいが、確かにその通りだ。

この事件で様々なことを学ぶことができた。あまりにも学びすぎた為全部を挙げることは出来ないが、あえて三つを挙げるならば、鍵はキチンと締める事、下半身に主導権を握らせずに理性の化物と呼ばれようとも冷静になること、人とのコミュニケーションは顔を見て取るべきだということだった。

○

高校二年生に上がり少しした日、高校生活を振り返ってという題名のレポートを提出

した俺を呼び出したのは平塚静という教師であった。

もう少しで三十路に手が届くという彼女は黒髪をなびかせどこか理知的な風貌を匂わせ、清楚可憐というよりは質実剛健といった雰囲気であり、その見た目に反してアニメや漫画に造詣が深く、科学教師でないにも関わらず白衣を着こなし、見た目からは想像できないがスポーツカーに乗り煙草をふかす、千葉県の教師陣をかき集めてみても彼女のような存在はいないだろうと思われるほど稀有な人物だ。

何より美人である。

そんな彼女に呼ばれ説教をうけている。

「何なんだ、このふざけた文は？」

「別にふざけている訳では無いです。大真面目に書いています。ただ、俺の高校生活を振り返ったらこんな感じになるのは仕方ないことだろうと思います」

「……はあ、もうダメだな、末期症状だ。本当ならば君はある部活に入って人格矯正して貰おうと思っていたけど、私直々にその腐れ曲がった根性を叩き直してやろう」

それは俺が高校生活の不平不満を余すところなく一から十までぶちまけたいと思っていたが、それをぐぐつと我慢し学校及び生徒諸君の改善点を情緒豊かに、尚且つ多角的に書き記したもので、そこに文学的価値や学術的価値を見出だすことがあっても、腐れ曲がった根性と言われる覚えは全くない作品だったことをここに記しておく。

「いや、そんな先生のお手を煩わせるようなー」

ふわりと頬を撫でる爽やかな風が通り抜け、誰かが窓でも開けたかと思案しようとする目の前には拳があつた。

美人ほど怒らせると怖いというが、彼女の場合も言葉の通りだった。少しばかり意味とは異なるかもしれないが。

「これは決定事項だ。これから毎週金曜の放課後に個人的に授業があるから必ず参加するように」

美人教師との放課後個人授業。美人と教師の間に暴力の二文字が無ければなんとも甘美な響きだ。

○

てつきり彼女との授業は道徳的な何かを学ばされるのかと思つていたがそんなことはなく、文系に限らず、化学や物理、数学等の授業をごく普通に行った。

お陰で俺の成績は指数関数のように伸びていき、期末テスト前の疑似問題では、それまで目も当てられなかった点数が目も当てても焼かれない程度には回復した。

その頃になると授業が終わった後に彼女と近場のラーメン屋巡りをするのが日課になり、もはや人格矯正の為の授業なのかラーメン屋巡りの為の時間潰しなのか本質が

よくわからない時間と化していた。

しかし、本質がわからなくてもラーメンは美味しいし、女性と事務的会話以外を話す珍しい機会でもある。

授業が終わり、隣でうきうきと、今日はどこに行こうかな。なんて呟いている彼女を見ると、もし、彼女が教育実習生であったり、それに近い年齢、干支を周回遅れにされていなかったら心底惚れていたとさえ思う。

その日も個人授業が終わり、帰り際にラーメンを食べに行こうと町へ繰り出した。

「今日とはっておきの所があるからそこに案内しよう」

「へえ、どんな所なんです？」

「そうだな。巷じゃ猫ラーメンなんて呼ばれている」

何でもその屋台では猫で出汁を取っているという。真偽のほどは定かではないが、その味は無類らしい。

猫ラーメンと呼ばれる屋台に着くと、注文もそこそこに彼女はこの一週間でどんなことがあったのかを聞いてくる。

ラーメンを食べているときの彼女は自分の話は余りしないで俺の事について聞くことが殆どだ。

最初の一月程は幼少時代の話でお茶を濁していたが、その話題も直ぐに尽き、どんな

事を話せば良いのか毎週頭を捻っていた。

「これ以上話せることなんて有りませんよ。それに俺の話なんか聞いてもなんの面白味もない」

「そんなことはないさ。君がどんなものを見て、どんな事を聞いて、どんな事を体験して、どんな風を感じたか。それを話せばいいんだ。君はいささか人とのコミュニケーションが苦手なようだからこれを機に少しでも克服した方がいい」

「そう言われてもですな」

「それに、君の話は詰まらなくはない。ツمامミにはちょうどいい」

「ツمامミって、先生お酒飲んでないじゃないですか」

「教師つてのは可愛い教え子の前じゃカッコつけたいものなんだよ。お酒を飲んで余り無様な姿は曝したくない」

「そんなもんなんですか？」

「そんなものだ。とは言っても君の話ばかり聞いているだけなのもなんだからな……今日には少しばかり私の愚痴にも付き合ってもらおうとするか」

「そういうと、つるつるとラーメンを啜りながら学校内にいるセクハラ教師の話や、恋の邪魔者と呼ばれている阿呆学生に対しての愚痴を溢した。」

送って行こうとする彼女を夜風に当たりたいからと断り一人ぶらぶらと歩いていると、熊の化物のような人間に遭遇した。

「やあやあ八幡。おこんばんわ」

材木座義輝。

道行く10人のうち8人が熊の妖怪と間違えるような容姿を持つ男だ。

残りの2人はきつと妖怪に違いない。

中二病で暑苦しく、他人の不幸で飯が三杯食べれるというおおよそ誉められる所の無い、特定外来種、犯罪係数300オーバーの執行対象の存在で、通称恋の邪魔者。

「さぞ名のある化物とお見受けいたす。何故このような場に、森へ帰れ」

「我はシシ神でも森の賢者でもないぞ」

むう。と唸りながら言うその姿は可憐な乙女が夜に出会したら、悲鳴をあげて逃げ出す風体だった。

俺自身もぎやあと叫んで逃げ出してやろうかとも思ったが、さながら弁慶の精神でその場に留まる。

「それはどうでもいいけど。なんでこんなところに」

「ああ、猫ラーメンでも食そうと思つてな。お主も付き合え」

「いやだ」

「な、なにゆえに。我とお主の仲ではないか」

ついさっき猫ラーメンを食べたばかりでお腹には何も入るような状況じゃないと懇切丁寧に説明したが、熊の妖怪はその場で地団駄を踏みながらぎやあぎやあと喚きたてるので仕方なしについていくことにした。

○

材木座と出会ったのは高校一年の春だ。

桜の花は散りきって、葉が青々としていたことを思い出す。

一年生への部活動誘は数多の部が行っていて、俺は色々な部活のピラを押し付けられた。

その内容は様々で、テニス部やサッカー部等からも貰ったが、その中でも秘密機関へ印刷所という存在は異彩を放っており、取り敢えず覗いてみるかと考えてしまったのが前述もしたが全ての間違いだった。

まさか、秘密機関と書かれたピラを大々的に配るような部活が秘密機関な訳がないと思っていた。

しかしながら〈印刷所〉は歴とした秘密機関で、顧問の先生は居なく、上には所長という肩書きを持つ先輩がいるだけだ。

印刷所の活動は偽造ノートや課題代行、自然な問題の間違い方やさらには的中率七十

%を誇る擬似試験問題まで幅広く取り扱いを行う。

その歴史は狭いが深淵で、ここ三、四年に創られたとの事だが誰がなんのために立ち上げたのかさえ不明の組織である。

当時を知るであろう人間を訪ねても彼らは固く口を閉ざすばかりらしい。

顧客リストは当初、氏名や学校名だけであったが、その膨大な組織力が遺憾あるように発揮された結果、住所、家族構成から趣味、懐事情、果ては最近借りた桃色映像の詳細まで網羅し掲載されていて、所長を初め上役なら見ることができるようになっていた。

その活動及び情報網は総武校のみならず、千葉県の高校、大学を巻き込んで今や政治にまで関与できるとの噂が飛び交う。

その話を所長から聞いたとき頭のなかで警鐘が鳴り響いたが、俺が産まれたときはどんな臭いのする赤子だったのか、小学生時代の甘い初恋、中学生時代の黒歴史を滔々と語られた時に逃げ場は無いのだと悟った。

自分の思い出したくもない歴史を他人から聞かされうんうんと蹲っていると、その傍らに酷く縁起の悪そうな顔をした不気味な男がたっていた。

繊細な俺にだけ見える地獄からの使者かはたまた雪山から遭難したイエティでも来たのではないかと最初は思った。

「まあまあ、こうなった以上は頑張ろうではないか」

これが、材木座とのファーストコンタクトでありワーストコンタクトだった。

○

材木座がずるずるとラーメンを啜っている時に、あることを思い出していた。

結構前に、妹の小町経由で川崎大志なる輩から相談を受けたのだ。

小町の知り合いの男と言うだけで万死に値するが、紹介したい人がいると言われたときは、そいつをアクアラインの人柱か成田山に巣食う妖怪の餌にしてやろうかと思っただけの腸が煮えくり返ったのを覚えている。

兄は断じて認めん。と気焰を吐きながらそいつに会ったが、そんな考えは杞憂で彼の姉が夜遅くまでエンジェルなんちゃらという所で怪しげなバイトをしているからどうにかしたいという内容だった。

姉の名前は川崎沙希と言って同じ学校の同学年らしい。

後で調べたところ同じクラスだったのだけれど、その時は妹のお願いだっただけのことともあり、取り敢えず袖振り合うも多生の縁と〈印刷所〉を使って調べてみるかと思っ
ていた。

そして調べた結果、近場でそんな名前前で営業をしているのは、バーもしくはメイド喫茶の二つだった。

流石にメイド喫茶に一人で入る勇氣は持ち合わせていなく、バーという大人の社交場に一人で行くのも心許なかつたので、気が付けば調べてから結構な日数が経っていた。というのが今の現状である。

「どうしたのだ。そんな腐りきつた目をしていて、何か考え事か」

「デフォルトでこれだから心配するな」

はふはふとチャーシューを食うその姿は、四方八方どこから見ても共食いか自分の体を切り取って食べているかのようなおぞましい体を成している。

さつきまで先生とラーメンを食べてこのチャーシュー野郎の愚痴で盛り上がっていたのにこの落差は一体なんだと愕然とし、次に何故にこの様なイエティがラーメンを食う歴史的珍風景を見なければならぬのかと沸々と憤りが湧いてきて、気が付けばじろりと睨み付けていた。

「そんな睨み付けなくてくれ」

「近付くな。気持ち悪い」

「寂しいではないか。それに夜風が冷たいの」

「この寂しがり屋さんが」

「きゃあ」

野郎二人の気色悪い寸劇を見ていた店主の顔が苦笑いを張り付けた様になり、その虚

しさが口を開く気を削り取った。

「どうやら、隣の男も同じだったようで、無言でラーメンを啜っている。

「……同じクラスの川崎沙希つて奴がさ、エンジェルなんちゃらつてメイド喫茶かバーで働いてるらしいんだよ」

無言空間に耐えかね、どうせなら材木座も巻き込んでしまえと考えていた事を話してしまおうと口を開いた。

「それを知つてどうするのだ。はっ、よもや弱味を握つてあれこれと破廉恥な事でもしようと思つているのか、この桃色脳内野郎っ！」

言われもない罵声を浴びせられて甚だ遺憾である。

「と言うよりも、こいつの頭のなかが常にこんなことばかりだからそれを思い付くんじゃないのか。」

「バツカ、お前。それを止めさせたいつてそいつの弟から相談されたんだよ」

「そうやって助けた恩を着せてあれこれとするのであろう。やはり桃色脳内野郎ではないかっ！」

「だから違うつての。メイド喫茶にしろバーにしろ一人で突っ込むには敷居が高すぎるから手伝えつて話だ」

「……ふむ、いずれ行くやもしれん人生の妙味をこの年で味わうのもよかろう」

少し前まで唾を飛ばしながら騒いでいた材木座だったが、少し考えたあと何やらした顔で頷いていた。

こんな表情をするときは十中八九、良からぬことでも考えている。

「酒なんか飲まねえからな」

「分かつておる。しかし、いつかは可憐な乙女と行く予行練習だと思えば……ぐふふ」

「どうせこれから暇だろ。明日は祝日だからこれから行くぞ」

こいつの妄想世界の中では、今頃可憐な乙女と夜の町へとしつぽり繰り出しているのだろう。

全く返事を返さない桃色脳内野郎に場所に時間、今着ているむき苦しいコートは着てくるなど言い聞かせ、屋台から逃げるように家へと帰った。

○

家へと戻るとリビングでは小町がタンクトップのような格好をしてアイスを食べながらテレビを見ていた。

小町は腐っている目と形容される俺とは違い、非の打ち所のない人柄、巧みな話術、可愛らしい容貌、コンコンと溢れ尽きることのない隣人への愛を持つ。何より、本当に同じ遺伝子を持つているのか不安になるほど小町の目は清みきっていて、その双眼に姿を写せば、晴れの日の江川海岸のように驚異の反射率を誇るだろう。

色々と恥の多い人生を歩んできたことを否定はしたい。だが、否定したからと言って第三者が待ったをかける事請け合ひであり、ならばと少しだけ此方から歩みよりをして己の非を認めてあげるのもやぶさかではないが、それでも人生の中でも一番の誇りと言えるのは小町の存在だった。

自慢の妹と言つても過言ではない。

むしろ不足まである。

「あ、お兄ちゃんお帰りなさい」

リビングでくつろいでいた小町は横目でちらりとこちらを見ると、ニヤリとした笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「ねえねえ、なんかお兄ちゃん宛の手紙が着てただけでもしかしてラブレターだったりするの?」

小町がひらひらと見せてきた見に覚えのない手紙に戦慄を覚えた。

その便箋は可愛らしい色をしてちよつとしたシールがはつてあり、いかにも女子力が高い乙女が出しましたというような逸品あった。そんなものとは無縁な生活を送ってきた人間からしたら戦慄を覚えるのも当たり前だろう。

小町は手紙などという時代錯誤で情緒のある品物を書くはずがない。他に俺に向けて手紙を送ろうとする人間を知っている訳もなく、我が家においてそれは一際異彩を放

ちながら小町の可愛らしい手に弄ばれていた。

「多分あれだろ。不幸な手紙とかその類いじゃねえの。最近チェーンメールとか流行ってるみたいだし」

と答えながら、内容を見るために小町から手紙を受け取り部屋へと戻った。

「後で内容教えてね」

後ろから催促の言葉が投げ掛けられたが、もはや頭のなかに響いてこなかった。

急ぎ部屋に戻り文を読んで俺は愕然とした。

諸君、驚くことなかれ。

なんと文には文通をしたいという申し出が書かれていた。

名前を雪浜輝子さんと言う。

その文にはいきなり手紙を書くことの非礼から始まり、どのような経緯でこの手紙を書くにあたったか、本の感想などが可愛らしさが溢れ出る文字ながらも流麗な文章で書かれていた。

彼女は小さい頃に風船に手紙を乗せて飛ばしたら返信が来て少しの間、文通をしたことがあられるらしい。

そんな文通上級者の彼女がふと手に取った古本には俺の名前と住所が書かれていたようで、知らない人に手紙を送りつけるという、ともすれば変態的所業に通ずる文通魂

が再加熱して思わず送っていたとのこと。

ちなみにその本は俺が昔、材木座に貸した本だった。

内容としては、目の腐った高校生の男が麗しい乙女二人と依頼を解決しながら友情や恋心を一進一退させながら成長していく青春小説で、そこはかたないむず痒さと既視感にさいなまれたのを覚えている。

材木座のことだから借りたのを忘れて古本屋に売り払ったのだろう。

だが、まで、しばし。これが誰かの罰ゲームと言うことはないと言い切れるのか。

ここまで誠意ある文を送られて返信しない男、いや人間は居ないと思うが、罰ゲームやその類이었다として俺が文を送り、その翌日に黒板にでも貼り出されて見ろ。

いくら精神的成熟が他の同世代よりも進んでいると自負していても、オムツを変えてもらえない赤子のようにわんわんと泣き叫んでしまうかもしれない。

嘲笑、人間不振、孤独、転校、孤独、自宅警備と一連の流れが走馬灯のように駆け回ったが、そもそもが孤独のようなもので、もともと人間不振の気もあり、だいたい俺の顔と名前が一致する人物なんて殆どいなかったと思いついた。

名前の知らない人間を調べてわざわざ罰ゲームの標的にするなんてことはないはず。

よし、彼女に文を送ろう。そして文の技術を身に付け、ゆくゆくはフミマイスターとして文章ひとつで相手に感動、興奮をもたららし、尊敬の念を相手に与え、強いては恋心

さえ操作しうる位の文章力を持って今の状況から脱し、薔薇色のスクールライフへと邁進しよう。

そう決心して時計をみたら材木座との待ち合わせの時間に迫っていた。

二十一話

「やつはろー。遅かったではないか」

エンジェルなんちゃらが入っているピルの前で妙ちくりんな挨拶をした材木座は少し窮屈そうなスーツ姿でやって来ていた。

いつも着ている暑苦しいコートは着てくるな、Yシャツとジャケットかあるならスーツにしとけと再三言い聞かせた為、みょうちくりんな格好をしてくることはなかったが暑苦しさは健在であり、どんなに着飾っても馬子は馬子だということわざの例外を垣間見るような格好をしている。

「なんだよ、そのくつそ頭の悪い阿呆のような挨拶」

「いや、ちよつと知り合いが使っているのを聞いてな。それより、いくら着飾っても目は腐ったままで安心したぞ。馬子は馬子だな」

思考が被った事に後悔をしつつ建物の中に入っていく。

建物の中は勿論学生の姿はなく、背広やドレスをぴりりと着こなした男女たちがアバンチュールに勤しむかのように腰を抱きながら歩いている。今更ながらに野郎二人でバーに行くのも十分に敷居が高い事じゃないのかと足取りが段々と重くなった。

「なんだ、今になって怖じ気付いたのか」と不思議とココロを読むような発言を材木座がするものだから、「違うわ!!」と多少ムキになり返してしまった。

「ならば、なんだというのだ?」

「よくよく考えたらさ、男二人でバーってどうよ」

先の失態を取り戻すように出来るだけ低い声で威厳の出るように口にするが、重厚な雰囲気醸し出しすぎたせいで無駄に悲観的な想像をしまい余計に足が重くなった。

それでも一人よりかはまだマシだ。これで材木座の桃色脳内が現実に戻り、帰られでもしたら撤退も辞さない構えだが、杞憂だったようで

「これで居なかつたら次はメイド喫茶であろう。そんな尊大な羞恥心と臆病な自尊心を抱えてたらメイド喫茶になんか行けんぞ」

と材木座にしてはやけに正論を言ってきた。

「お前が言うことかよ。てつきり抱えすぎたから熊になったのかと思ったわ」
「はっはっは。面白いことを言うではないか」

「……人選ミスったな」

「人選もなにも、このようなことに誘えるのは我しかないではないか」

「うるせえ」

「我に秘策あり。紳士の溜まり場よろしく華麗に演じて見せよう」

「……泥舟に乗ったつもりで期待しとく」

その宛にならない自信はどこから来るのか、ぱつんぱつんのスーツで胸を張ったせいでボタンが服との別れを惜しむかのような悲鳴をあげていたが、材木座は意に返さずどしどしと音をたて前へと進んでいった。

○

「……」

「……」

「……」

意気揚々と扉を開けたまではよかった。

しかし、材木座は場の空気に飲まれたのか、張った胸は段々と猫背になりカウンター席に座る頃には借りてきた猫のように大人しくなっていた。

そのあとは、我ウーロン茶。と小さい声で言っただけで喋らないで座っているだけである。

秘策があるなどと抜かした泥舟に自分でも意外だったが、おんぶにだつことしがみついていた俺は出鼻を挫かれ、俺もウーロン茶で。と言っただけで話せないでいた。

カウンターにいる人物——川崎さん——にとつてもどつかで見たことのあるような

未成年風の挙動不審な二人組が目の前に座り、二十分もの間無言でウーロン茶をちびちび飲む姿を見るのは余り目にいい光景ではないと思う。

勿論彼女も無言であつた。

このままでは不味い。

まず俺の精神衛生上にも非常に良くない。

もう良いじゃないか、戦略的撤退をするべきだ、というかここにいるって分かったから後日話を聞けば良いだろ。

そう言い聞かせ席を立とうとした時に、何を血迷つたか材木座が

「タイムっ!」

と大声を出して俺をトイレに引つ張っていった。

「いや、何がタイムだよ。向こうにいたおつきさんがものそつい目でこっち見てたぞ」

「無理、我、無理。こんなところに居られるか、家に帰る」

盛大に死亡フラグを立て、いやいやと頭を振りながら材木座は取り乱す。

「家に殺人鬼がいないといいな。それよりお前、秘策はどうしたよ」

「我としては、ノンアルコールのシンデレラを奢つてこんな時間まで働いているとシンデレラの魔法も解けてしまうぞ的な紳士的会話をしようと思ったのだ。ウィットにと

んだ頼れる大人のオーラでなんか全体的になんとかなると思ったのだ」

トイレに入り問いたしたが、返ってきたのは精神を現実という鋭利な刃物に八つ裂きにされボロボロになりながら涙目で呟く材木座の姿だった。

「無駄に紆余曲折した会話考えてたんだな」

「調べたのだ。きつとこの好機を逃せば恋の邪魔者の称号を返上することはできず、いつか恨まれた人達にアクアラインの人柱として千葉県民を支えることになっちゃうんじゃないかと思って調べたのだ」

「いや返上しないで支えとけて、それに恋の邪魔者としての誇りはどこにいった」

「そんなもんで幸せになれるか」

えずきながら材木座は言った後

「幸せになりたいなあ」

と小さくこぼした。

「言つとくけど、川崎さんには選ぶ権利はあるからな」

材木座は泣いた。

○

さめざめと泣く材木座をあやし、荷物は後で持っていくから先に帰れとトイレから送

り出して、材木座と時間差になるようにトイレを出た。

「お連れのお客様はいかがなされましたか？」

席に座ると、今のところは同級生でなく客と店員の関係である彼女は、距離を置いた接し方で話しかけてきた。

「ああ、役に立たないから帰ってもらった……川崎沙希さん」

「……すみませんがどちら様でしょうか？」

名前を呼ぶと一拍置いた後、訝しげな表情をしながら不機嫌気味の声で言った。

「同じクラスの比企谷」

そういうと彼女は頭を捻らせながら思い出そうとするが、どうやら思い出せないらしい。最終的に頭を降って思い出すのを諦めていた。

嘘みたいだろ、同じクラスなんだぜオレ。

「で、同じクラスのあんたが何でこんなところに居るの」

涼しげな目を細めながら聞いてくるその姿は、一昔前の不良やヤンキーといった非社会的な人々と被って見えるが、彼女が遊ぶ金ほしきでこの様な事をしてるわけではない筈だと大志から耳にタコが出来るほど聞かされていた。

「あれだ、弟の大志くんから夜な夜な妖しげなバイトをやっているのを辞めさせたいって相談されて」

「怪しくないってわかったでしょ。わかったならさつきと残っているの飲んで帰って」
視線が一層冷ややかになり、いよいよ目で人を刺す事ができるんじゃないかという頃に彼女がまた口を開いた。

「まあ、どうでもいいけど。とにかく辞める気はないから。大志にも言つといて」

お金がほしい理由は人によつて無数に存在するが、大まかにふんわりと簡単に分けてしまえば欲しい物があるかやりたい事があるかの二種類だと個人的には思っている。

時給の高いところで働いているところから、ある程度高額の物が必要になり、尚且つ大志から聞いた本来は真面目な性格、部活の有無、両親が共働き等の情報を考えると「習い事か学費か、そんなところか」

真面目な学生の身で大金がいると言つたら、オトモダチ料か学費等だろう。

半ば当てずっぽうに言つたら、細めていた彼女の目が開かれた。

「……だとしたら何なの？あんたがどうにかできるつて言うのー！」

怒声と共に肯定する言葉が吐き出される。

これ以上、怒りをみせると髪の毛が金髪になつて逆立つちゃうんじゃないか。

「まあまあ、落ち着けて。バイト中だろ」

「誰のせいだと思つてるわけ」

さつきの大声で殆どの人の注目を浴び冷静になつたようで、顔は赤くなつていたけど

声は小さくなっていた。

「生憎、習い事は守備範囲外だけど学業と稼ぎを両立させる方法ならある」

もし、彼女が塾の代金を稼ぐために働いているならばスカラシップを勧めればいいし、仮に違う習い事や大志の為だとしても上手くやればここでバイトするよりも印刷所の方が実りはいいだろう。

「明日、五時半に通りに沿いのワックで待つてる」

そう言って、泣きながら帰っていった材木座のウーロン茶の分まで支払い颯爽と店を出たが、店を出ていくときの俺は客観的に見ても『デキる男さらにはイイ男』のそれで、このシーンを見た九割以上の人間が彼は将来ビックになるだろうと答えてくれるに違いない。

そんな人間が今なら無料で着いてきます。

更に世界一カワイイ小町まで義妹になってくれます。

こんなチャンスはめったにありませんよ。

飼うなら今。

一家に一人、比企谷八幡を。

と、深夜の通販番組のような事を考えながら歩いていたら、余程不審者に見えたのか

グググと笑うシーンを見た国家権力の方々とお話をするはめになってしまった。

○ そのあとは材木座の言っていたような破廉恥なイベントはなく、自分の塾の代金が必要で働いていたとワックで彼女の話を少し聞き、スカラシップと印刷所を紹介した結果、クラス、印刷所、塾の俺のあまり広くない生活圏の殆どで彼女と顔を会わすこととなっただけである。

それはもう破廉恥なイベントではないのかと怒髪天の諸兄も居ると思うが、まず聞いてほしい。

心の声こそ多弁でゴルディアスの結び目を断ち切る活躍をしているように見えるが、基本的に俺は無口な男である。そして彼女も決して多弁な方ではない。

よって俺と彼女の間に会話らしい会話が発生しない。日によっては「よっ」「ん」で会話が終了する。

しかも、その無言の空間が心地好いかと言われればそうでもなく、彼女の鋭い視線と相まり熟年夫婦的な雰囲気というより補食生物と被食生物の体である。

しかしながら、印刷所内ではそこが良いとでも言うかの如く、彼女は最初こそ下っぱ的立ち居ちからのスタートであったが、その孤高のカリスマ性を持って会員から人気を集めたほか、弟妹がいる会員の為に高校受験のノウハウを網羅する本を作ることを確約

し印刷所始まって二番目と言われるほどの人気を集めた。

印刷所の一部の人間は、自分達がグレーなことをしていると自覚しているからこそ、どこかアウトロー然とした雰囲気醸し出して、いかにも、顔は止めな。ボディにしなボディに、と言いつうな彼女に惹かれカルトな様を成してまでいる。

そんな彼女の紹介者であり、なおかつ恋の邪魔者と呼ばれる奴とつるんでると思われていて、不真面目な態度の為、印刷所における俺の立場はふんわりとしたものであった。いや、正確に言えば肩身が日に日に狭くなり、今や猫の額程であった。

そんなある日、リビングで寛いでいた小町が不意に

「んふふ。お義姉ちゃん候補ができたのかな」

と意味の分からない事を言ってきた。

「誰だそれは？もしかして大志とその姉ちゃんの事か？もしそうだとしたらあのナメクジ野郎に塩を撒きに行かなきゃならないな」

いや、例えナメクジ野郎じゃなくて成績優秀、品行方正、文武両道の人物だとしても、小町と付き合っているという事実一つで全て帳消しになり、俺の中ではド腐れ外道に認定してしまうのだが。

小町には軽妙に聞こえるようにおどけた口調で言ったが、丑三つ時の襲撃計画も考えなくてはならない。

「もう、違うよゴミいちちゃん。小町じゃなくってゴミいちちゃんの方だよ」

「馬鹿なことを言うんじゃないやありません。大体誰のことだよ」

「さつき言ったじゃない。大志くんのお姉さんだよ。お兄ちゃんのこと良く分かってくれそうだし、どこか似てるというか」

「あのな、俺はもつと繊細微妙でふはふはつてして、可愛いもので頭が一杯の女の子がいたのであつてだな。何が悲しくて俺に似てたり、俺のことを十二分に理解できるような人と付き合わなけりゃいけないんだよ」

冗談ではない。もし、俺に似た嫁さんを貰いでもしたら確実に俺に似た子供が産まれるのであつて、俺に似た子供なら勿論目が濁りに濁っているだろう。

そんな業、子供に背負わせるわけにはいかない。

「そんな女の子がいても、お兄ちゃんに近付いてこないじゃん。現実見ようよ」

俺の妹はたまに物事の本質についてくることがある。

先程の小町の言葉と今の文との間に間があつたのは、決して妹に言われた一言でへこんでいた訳でも、言い返す事が出来なかつたわけでもない。

その客観的事実を認め、大いなる懐で包み込む事に多少の時間がかかっただけであり、言葉に詰まったところで諸君らに「全く君は人としての器が猪口かよ」等と言われる筋合いなどない。

「小町、本質を見抜くのは結構なことだけどな、あんまり本質を突きすぎても幸せになれないぞ」

「小町はお兄ちゃんが元気で居てくれれば幸せだよ。今のポイント高いね」

「確かに今のはポイント高すぎだわ。他の野郎とかにするなよ」

おどけながら言った小町の頭を撫でくり回し、小町曰くのお義姉ちゃん候補に思いを馳せようとする。

確かに彼女は俺の殆どないといつていい今までの女性遍歴の中でも一番話す女性である。

しかし、目付きからも読み取れるが彼女が仕方なしに嫌々しように俺と話しているという考えもなきにしもあらず。あの中学生の頃の轍をなぞる様な真似はしたくない。

ここは慎重に考えるべきでは無いか。リスクとリターンを省みて堅実な道へ進み薔薇色のスクールライフを謳歌することを第一として考えるべきではないのか。

しかし、そんな考え方で万が一、スクールライフを享受出来たとしてもそれは、俺が

忌み嫌っている関係に違いないだろう。

だが、材木座も誇りで幸せになれるかと嘆いていた。確かに一理も二理もある気はする。ならば、偽りの関係でも可及的速やかになって、それからゆつくりと本当の関係を築き上げるのも一つの手と考えるか。

いや、そんなことを考えている時点で、本当の関係とは言えないのは明白であつて……

—そこまで考えて、この状況は桃色遊戯の達人でない限り解決する事が出来ないと悟り、結論を先伸ばしにする結論を下した。

○

拝啓

お手紙ありがとうございます。

こうして文を書くのも何カ月か過ぎ、季節が移ろいゆく早さに目を見張るばかりです。

今も外では蝉の鳴き声が聞こえて、ああ、もう夏ですねと沁々と思う季節になりました。

妹さんと仲がよろしいですね。

私にも姉が一人居ますが、そこまで仲が良いわけではないので羨ましく思います。

私も嫌いというわけではありませんが、事あるごとに悪戯をしてきて困ってしまいました。

先日も友人と二人、夏祭りに行ったときにばったりと出会してからかわれてしまい、友人と仲良くしている所を見られるのは少々恥ずかしいと感じてしまいました。

カマクラとは可愛らしい名前です。是非今度見てみとうございます。

私の友人に猫好きの人がいて、この前はペットショップの前で猫に話しかけながら幸せそうな顔をしていました。

普段は理知的な人なので、新たな一面を知れたと私も笑ってしまったらお饅頭の様に膨れられました。

私の家には犬が一匹いて、名前はサブレと言います。この子も大変可愛らしいのですが、少しお転婆さんで手を焼くこともしょっちゅうです。

家族からは、私に似たと少し恥ずかしいような事を言われてしまいました。

私ったら困ったり恥ずかしがったりしていますね。

学校の方はいかがでしょうか？

私の方は相も変わらず、大きな出来事はそこまでなく、学業に追われたりしています。

この間は、両親に連れられて立食会に参加する機会がありました。やはりそのような場合は苦手で本を読んだり勉強をしたりするのが私には合っているなあと再確認させ

られました。

私が言うのは余計なことかもしれませんが、しがらみがなく、友人と何処かに出掛けたり学業に精を出すことが出来るのはとても有り難いことだと思います。

高校も半分が過ぎ、そろそろ受験の準備に入られる人も多いと思いますが、貴方ならきつと与えられた機会を生かして自分を高めていかれると思いますので、自分を信じ頑張ってください。

ただ、何をするにしても健康が第一に大切ですので無理はなさらないで。

MAXコーヒーがとてもお好きなのは分かりましたが、貴方も糖分の多く含まれた物ばかりに偏り過ぎず、程ほどに御自愛下さいませ。

では、今回はこの辺りで失礼します。

お手紙お待ちしておりますね。

かしこ

雪浜輝子